

千葉市種ヶ谷津遺跡

——千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ——

1 9 8 9

千葉急行電鉄株式会社

財団法人 千葉県文化財センター

ち ば し たね が や つ い せき
千 葉 市 種 ヶ 谷 津 遺 跡

——千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ——



1 9 8 9

千葉急行電鉄株式会社
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

房総半島の玄関口ともいえる千葉市は、千葉県の県都として日々発展を続けていますが、市の南部地域は、緑も多く恵まれた自然環境を残しています。また、そうした景観をみせる台地上には、先土器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が所在し、かつての人々の生活の舞台であったことを物語っています。そして今、この地は現代の活動拠点となろうとしています。それに伴い交通網の整備も重要な課題となってきました。このような状況に対応するため計画されたのが、千葉急行線です。

ところで、鉄道の路線予定地は、ご承知のとおり古くから遺跡の存在が知られているところであり、千葉県教育委員会では、その取り扱いについて千葉急行電鉄株式会社をはじめ、関係諸機関と慎重に協議を重ねてきました。その結果、千葉急行線のもつ強い公共性から、やむを得ず、計画用地内に所在する埋蔵文化財について記録保存の措置を講じることとなり、昭和53年度以来、当千葉県文化財センターにおいて、発掘調査を実施してきました。

千葉市生実町に所在する種ヶ谷津遺跡については、昭和54・56年度に確認・本調査を実施しました。調査の結果、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡18軒、土坑2基、溝状遺構3条などと、それに伴う遺物のほか、先土器時代の石器集中地点1か所が検出されました。特に、竪穴住居跡からは該期の良好な土器がセットで出土する等、学術的にも貴重な成果を得ることができました。

このたび種ヶ谷津遺跡の整理作業も終了し、その成果を「千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」として刊行するはこびとなりました。本書が、学術的資料としてはもとより、多くの方々が、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることを望んでやみません。

終わりに、地元関係者、千葉急行電鉄株式会社、千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会の御協力、御指導に深くお礼を申し上げますとともに、発掘調査等に御協力をいただいた調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

平成元年9月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 岩瀬良三

例 言

1. 本書は、千葉急行電鉄株式会社による千葉急行線建設に伴い調査した、千葉市生実町^{おゆみ}に所在する種ヶ谷津^{たねがやつ}遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉急行電鉄株式会社との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和54・56年度に下記により実施した。

昭和54年度	調査期間	昭和55年2月1日～昭和55年3月31日
	調査面積	7,000m ² のうち上層の確認調査1,000m ²
	調査担当	調査部長 白石竹雄 部長補佐 山田友治 班長 堀部昭夫 調査研究員 相京邦彦 高橋博文 白石 浩
昭和56年度	調査期間	昭和56年10月1日～昭和57年2月27日
	調査面積	本調査6,100m ²
	調査担当	調査部長 白石竹雄 部長補佐 中山吉秀 班長 三森俊彦 調査研究員 相京邦彦 柳 晃
4. 調査で使用したコード番号は、201（市町村コード）-015（遺跡コード）である。
5. 整理作業及び本書の作成は、年次計画に基づき、主任調査研究員 相京邦彦（～昭和60年3月）、池田大助（～昭和63年3月）、小林清隆（昭和63年4月～）が担当して実施した。
6. 本書の執筆・編集は、調査部長 堀部昭夫 部長補佐 岡川宏道・西山太郎の指導・助言のもとに小林が行った。
7. 本書に使用した地形図のうち、第2図は国土地理院発行の1：50,000千葉(NI-54-19-15)、第4図は1：25,000蘇我(NI-54-19-15-2)である。
8. 本書に使用した図面の方位は座標北を指すものである。
9. 本書における遺物の実測図のうち、断面を墨で塗ったものは須恵器で、網を入れているものは胎土中に繊維を含むことを示す。
10. 本書に使用した空中写真のうち図版1・2は、京葉測量の撮影によるものである。
11. 本書に収録した遺物及び記録類は、当文化財センターに保管している。
12. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉急行電鉄株式会社、千葉県教育庁文化課、千葉県教育委員会の関係者各位、発掘調査・整理作業に参加いただいた調査補助員の皆さんをはじめ、多くの方々から御指導、御協力を賜りました。ここに謝意を表します。

本文目次

序 文
例 言

I 序 章

1. 調査の経緯と遺跡の概観…………… 1
2. 遺跡の位置と周辺の遺跡…………… 2
3. 調査の経過と遺跡の概要…………… 6

II 検出遺構

1. 竪穴住居跡…………… 8
 - A 各竪穴住居跡の説明…………… 8
 - B 焼失住居跡と遺物を出土したカマドについて……………23
2. 土坑・溝状遺構・礫集中地点……………32

III 出土遺物

1. 土器……………34
 - A 竪穴住居跡出土土器……………34
 - B 土坑出土土器……………46
 - C グリッド出土土器……………46
2. 石器……………49
 - A 先土器時代石器集中地点の石器……………49
 - B グリッド出土石器……………54
3. 石製品・土製品……………55

IV ま と め

1. 遺物について……………56
2. 遺構について……………62

挿 図 目 次

第1図	発掘区と周辺の地形（1／2,500）	
第2図	種ヶ谷津遺跡の位置	1
第3図	種ヶ谷津遺跡の地形（1／5,000）	3
第4図	周辺の主要遺跡	5
第5図	遺構配置図	6・7
第6図	001・002竪穴住居跡	9
第7図	003・004竪穴住居跡	11
第8図	005・006・007竪穴住居跡	13
第9図	008A・008B・009竪穴住居跡	15
第10図	010・011竪穴住居跡	17
第11図	012竪穴住居跡の全景	18
第12図	012・013竪穴住居跡	19
第13図	014・015竪穴住居跡	21
第14図	016・017竪穴住居跡	22
第15図	003竪穴住居跡の炭化材と焼土の検出状況	23
第16図	003竪穴住居跡のカマド	24
第17図	008B 竪穴住居跡の炭化材と焼土の検出状況	25
第18図	008B 竪穴住居跡のカマド	25
第19図	004竪穴住居跡のカマド内遺物出土状況	26
第20図	010竪穴住居跡のカマド内遺物出土状況	27
第21図	201・202土坑、302溝状遺構、501集石	33
第22図	001・003竪穴住居跡出土土器	35
第23図	004竪穴住居跡出土土器	37
第24図	005・006竪穴住居跡出土土器	39
第25図	008B 竪穴住居跡遺物出土状況	40
第26図	008B・009竪穴住居跡出土土器	41
第27図	010・011竪穴住居跡出土土器	43
第28図	012・013・014竪穴住居跡出土土器	45
第29図	015竪穴住居跡・201土坑・グリッド出土土器	47
第30図	グリッド出土縄文土器	48
第31図	層序	49
第32図	401ブロック①	50
第33図	401ブロック②	51

第34図	401ブロック出土石器	52
第35図	グリッド出土石器	54
第36図	石製品・土製品	55
第37図	古墳時代後期土器編年①	59
第38図	古墳時代後期土器編年②	60
第39図	古墳時代後期土器編年③	61

表 目 次

第1表	401ブロック出土石器観察表	53
-----	----------------	----

図 版 目 次

図版1	種ヶ谷津遺跡と周辺の空中写真	図版10	(1)016竪穴住居跡
図版2	種ヶ谷津遺跡の空中写真		(2)302溝状遺構
図版3	(1)遺跡遠景(榎作遺跡から)		(3)202土坑
	(2)遺跡近景	図版11	(1)基本土層
図版4	調査終了時の空中写真		(2)・(3)401ブロック遺物出土状況
図版5	(1)001竪穴住居跡	図版12	(1)004竪穴住居跡カマド内甕出土状況
	(2)002竪穴住居跡		(2)004竪穴住居跡カマド内高杯出土状況
	(3)003竪穴住居跡		(3)010竪穴住居跡カマド内遺物出土状況
図版6	(1)004竪穴住居跡	図版13	出土土器 001・003竪穴住居跡
	(2)005竪穴住居跡	図版14	出土土器 003・004竪穴住居跡
	(3)006竪穴住居跡	図版15	出土土器 004・005竪穴住居跡
図版7	(1)008A・B 竪穴住居跡	図版16	出土土器 005・006・008B 竪穴住居跡
	(2)008B 竪穴住居跡遺物出土状況	図版17	出土土器 008B・010竪穴住居跡
	(3)009竪穴住居跡	図版18	出土土器 010・011竪穴住居跡
図版8	(1)010・011竪穴住居跡	図版19	出土土器 011・013014竪穴住居跡
	(2)010竪穴住居跡	図版20	出土土器 014・015竪穴住居跡
	(3)011竪穴住居跡		201土坑
図版9	(1)013竪穴住居跡	図版21	出土石器 401ブロック
	(2)014竪穴住居跡	図版22	(1)出土石器 401ブロック・グリッド
	(3)015竪穴住居跡		(2)出土石製品



第1図 発掘区と周辺の地形 (1/2,500)

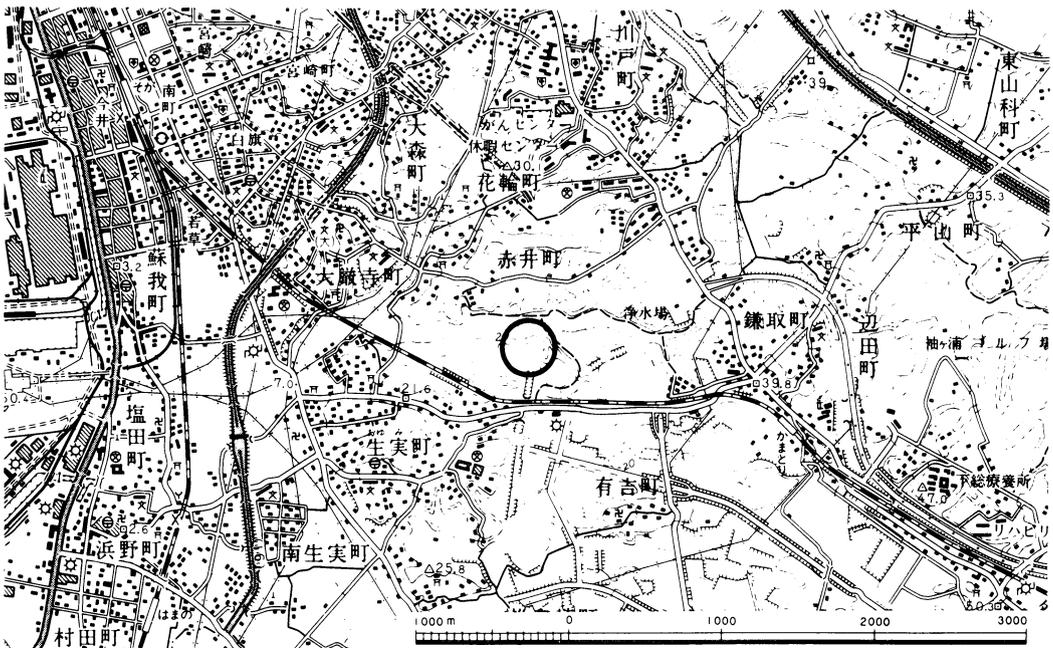
I 序 章

1. 調査の経緯と遺跡の概観

千葉急行線は、京成の千葉中央駅から小湊鉄道の海士有木駅に至る延長19kmの路線として計画されたものである。この鉄道建設予定地にあたる千葉市東南部地区は、先土器時代から歴史時代にわたる遺跡が所在している地域として知られている。このため千葉県教育委員会では、路線内の遺跡の取り扱いについて、千葉急行電鉄株式会社をはじめ関係諸機関と慎重に協議し、その結果、記録保存の措置を講ずることになった。発掘調査及び整理作業は、当センターと千葉急行電鉄株式会社との委託契約に基づき、昭和53年度から、年次計画によって進めてきている。昭和60年度までの事業内容と、成果の一部については、すでに「千葉急行線内埋蔵文化財調査報告書」のIとIIの2冊の報告書によって、公にしてきたところである。

千葉市生実町2668-3ほかに所在する種ヶ谷津遺跡は、昭和54年度に確認調査を行い、その成果に基づき、昭和56年度に本調査を実施した遺跡である。調査終了後、整理作業に移行し、昭和62年度までに、基礎整理、挿図・図版の作成を終了し、昭和63年度に原稿執筆し報告書刊行のはこびとなった。この間、市原市の草刈貝塚、千葉市の榎作遺跡の発掘調査・整理作業等を並行して遂行してきた。

種ヶ谷津遺跡は、千葉市と市原市との境を流れる村田川によって形成された赤井支谷を北側に臨む東から西側へ張り出す台地上にある。現在、赤井支谷は水田として耕作されており、台地上は雑木林で、その自然景観は四季折々に変化をみせている。



第2図 種ヶ谷津遺跡の位置

2. 遺跡の位置と周辺の遺跡 (第3・4図)

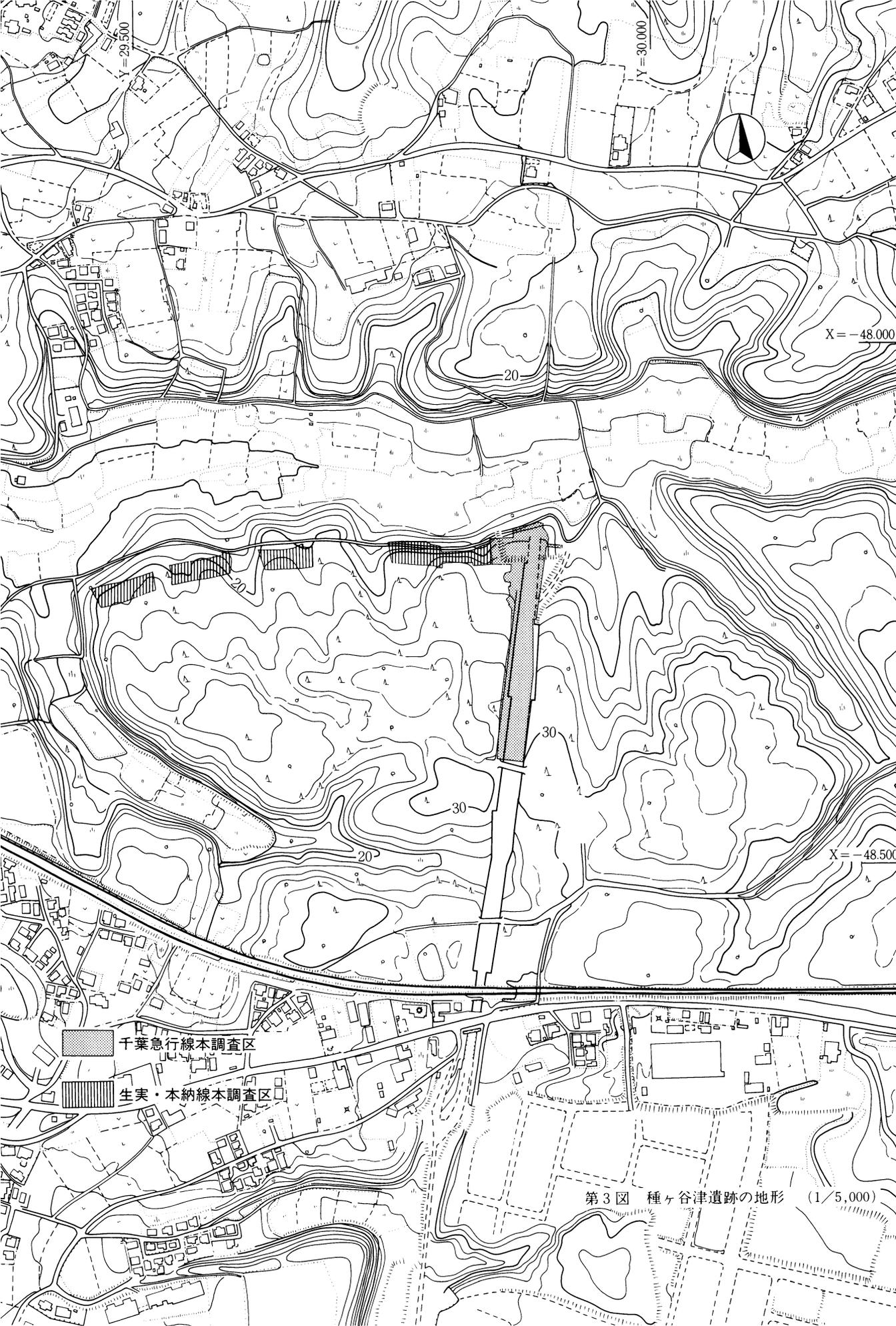
千葉県政治・経済・文化の中心である千葉市は、昭和63年4月末現在、人口81万人を目前にし、平成4年には政令都市移行が予定されている。市街化の波はJR千葉駅を中心に同心円状に拡がり、また鉄道各線の駅を核とする住宅団地が、市の外郭地域に造成されている。ただ、こういってしまうと市郊外への急激な都市化が想像されてしまうが、周辺部はまだ緑も多く、のどかな田園風景が残されている。

さて、JR千葉駅から外房線に乗って鎌取駅へ向かう途中、車中から対照的な景色を見ることができる。蘇我駅を過ぎて、駅の周りの町並が終ると、田圃を横切る。このあと左側には、水田から一段高まって木々が茂る林が遠くまで続く風景が、そうして右に顔を向けると関東ローム層がむき出しになった造成中の団地と、その一角に入居が始まった新しい家々が目に入ってくる。まさに下総台地の典型と今日的千葉市の象徴であるといった観である。ところで、最初にとおった水田は、東京湾側に開口する村田川水系の谷で、生実谷と呼ばれており、花輪町方面に浸入し、途中で鎌取町を奥部とする赤井谷津とに分かれていく。そのため、赤井町をのせる台地は、Yの字のVの位置に当たり、生実谷の開口方向に張り出す大きな舌状台地となっている。一方、赤井谷津の南側の台地は、赤井谷津からさらに枝分かれした小支谷によって刻まれ、複雑な地形が作りだされている。

種ヶ谷津遺跡は、赤井谷津から伸びる二つの支谷によって、東西が画されているといつてよいだろう。西側、つまり生実谷との分岐点に近い方の支谷は、一度南に入ってから東に方向を変えていき、遺跡の南を確定している。その西の谷から東へ500m強の距離を隔てて、もう一つの支谷が南東方向へ600m程入って東限を決めている。したがって、遺跡の範囲はおおよそ東西に700m、南北に400mとみることができよう。このような、いわゆる舌状台地に立地する遺跡であるが、平坦部が意外と少なく、台地中央から周縁部に徐々に標高を減じていく傾向が認められる。中央部の標高は30m前後で、縁辺部で20mとなり10mの比高を有している。また水田面の標高が10mなので、最高点とは20mの比高を測ることになる。

今回の千葉急行線に伴う調査区は、遺跡のほぼ中央に南北に細長く設定された。北端は赤井谷津に面し、東に小さな谷が調査区と並行して僅かに南入する。標高20m～30mで、北向の緩斜面部である。種ヶ谷津遺跡の本格的な調査は、この路線内が初めてであるが、昭和58年に県道生実本納線の道路工事に伴って、遺跡北縁の調査を実施しており、その成果については、すでに発掘報告書として公表されている¹。生実本納線の調査区は、千葉急行線より西の北側縁辺部に設けられ、A～Dの4地点に分かれている。調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居跡9軒のほか、三彩陶器小壺が含まれていた奈良時代の包含層等が発見された。いずれにせよ両調査区を合わせても広範な遺跡の一部に過ぎず、種ヶ谷津遺跡は研究の途についたばかりである。

1. 『千葉市種ヶ谷津遺跡』 一 県道生実本納線道路建設工事に伴う 一 (財)千葉県文化財センター 1985



千葉急行線本調査区
生実・本納線本調査区

第3図 種ヶ谷津遺跡の地形 (1/5,000)

種ヶ谷津遺跡を含み、村田川によって開析された台地上には数多くの遺跡が所在し、その時期も先土器時代から中・近世にわたっている。次に、調査が実施されている遺跡のなかで、本遺跡と時期を同じくする遺跡を中心に、周辺の諸遺跡について簡単に紹介しておきたい。

まず、遺跡の西側の谷を挟んで立地する大道遺跡¹から挙げることにしたい。この遺跡も赤井谷津と密接な関わりをもつと考えられるからである。昭和56年に県営住宅建設に伴って、遺跡の南側が調査され、竪穴住居跡70軒を検出している。集落の営まれた期間は、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけてで、住居跡の発見軒数からいうと、古墳時代が15軒で、他がそれ以降で、奈良・平安時代に入って規模が大きくなっている集落である。

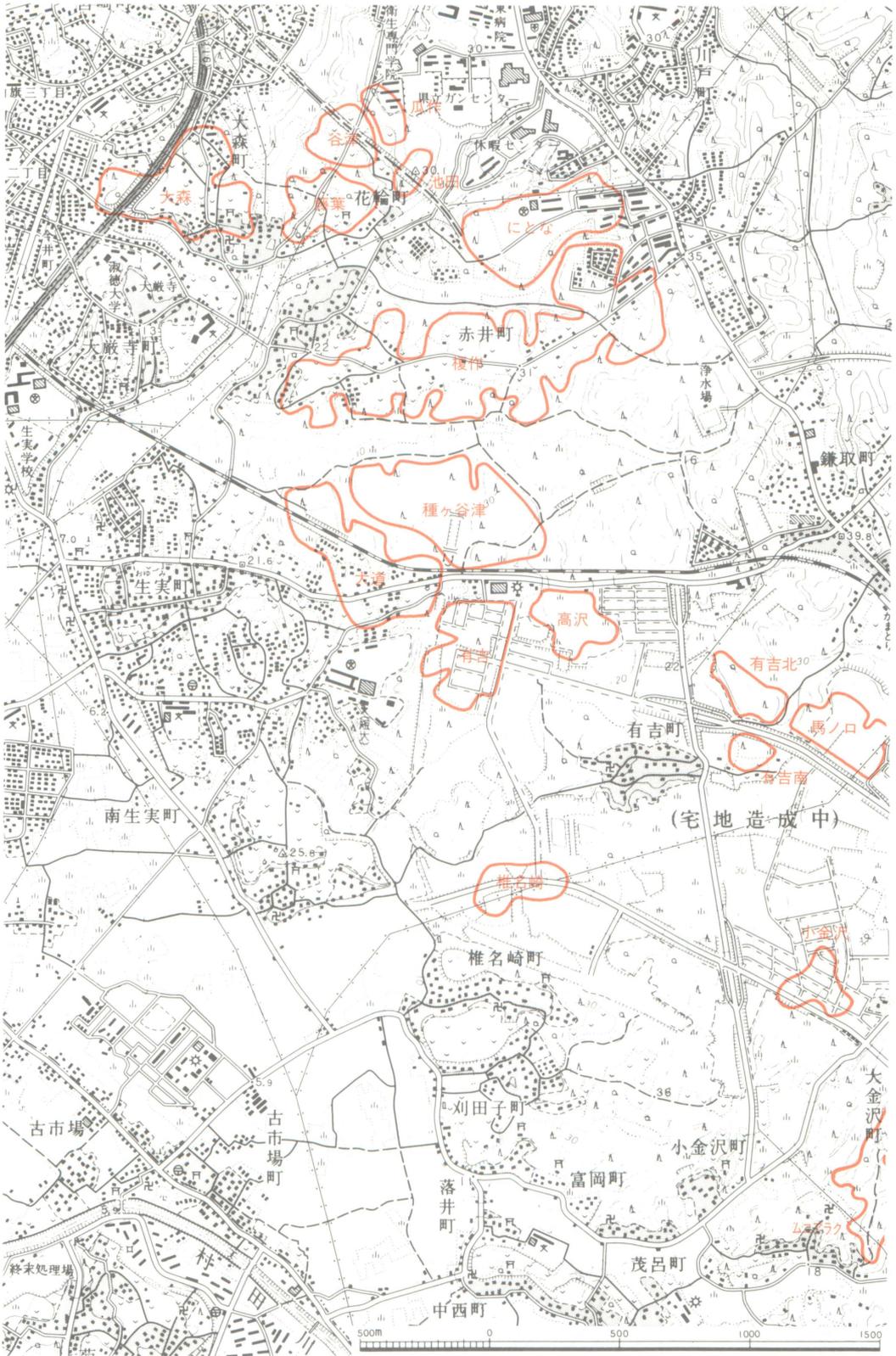
赤井谷津の北岸で、本遺跡と対峙するかのように位置するのが榎作遺跡²である。広い範囲に土器片が散布し、大遺跡であることが推測されていたが、千葉急行の路線内の調査により、土師器を出土する236軒の竪穴住居跡を検出しその一端を垣間見ることができた。検出遺構の大部分が古墳時代後期の所産で、遺物の出土量も豊富である。

生実谷は赤井谷津と分かれて北東方向へ入り込み、さらに花輪支谷と大森支谷とに分かれていく。両支谷の間に広がる台地状には、谷津遺跡、藤葉遺跡、瓜作遺跡、池田古墳群³がある。いずれも近接して立地し、古墳時代後期以後の集落が検出されているので、有機的関連が強いものとみられる。上記の4遺跡のなかでは、池田古墳群が最も南に位置し、また、にとな遺跡⁴が花輪支谷を臨んで造営されている。

今度は外房線から南の遺跡について瞥見しておきたい。この地域は、住宅・都市整備公団の千葉・市原ニュータウン造成に伴い、当センターが予定地内の遺跡の調査を実施しており、考古学的環境がしだいに解明されつつある⁵。種ヶ谷津遺跡を画する二つの小支谷が刻み残した尾根状の細い台地を南に下ると、有吉遺跡、高沢遺跡が東西に向き合って展開する。高沢遺跡⁶では、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて350軒にのぼる竪穴住居跡が検出されているが、同時期に大規模な集落が形成される遺跡に、椎名崎遺跡、ムコアラク遺跡がある。また、集落跡と隣接して6～7世紀にかけて築造された古墳が多数明らかになっている。

以上ふれてきた古墳時代後期を中心とする集落跡のほか、時期的に遡っても特徴的な遺跡があるので、いくつか列挙してみたい。先土器時代では、大道遺跡、馬ノ口遺跡、六通金山遺跡に良好なブロックがある。縄文時代を代表する中～晩期の貝塚としては、有吉北・南貝塚、小金沢貝塚、木戸作遺跡、六通貝塚等が著名である。

-
1. 『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』(助千葉県文化財センター 1983)
 2. 『千葉県文化財センター年報』No.11(助千葉県文化財センター 1985(現在整理中))
 3. 『千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書II』(助千葉県文化財センター 1986
『谷津遺跡』千葉市文化財調査報告書第10集 千葉市教育委員会 1984)
 4. 『にとな』仁戸名古墳群発掘調査団 1972
 5. 『千葉東南部ニュータウン』1～16の報告書が刊行されている。
 6. 『千葉県文化財センター年報』No.8(助千葉県文化財センター 1982(現在整理中))



第4図 周辺の主要遺跡

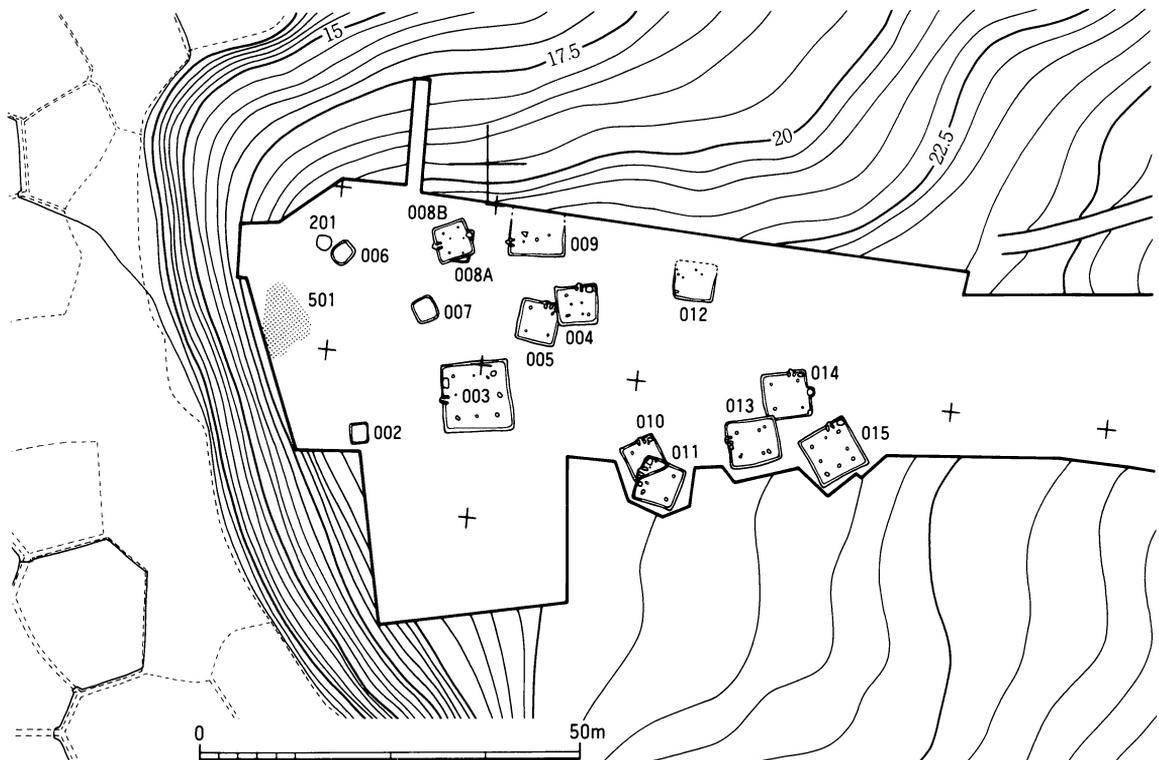
3. 調査の経過と遺跡の概要

今回の調査は、種ヶ谷津遺跡のうち、千葉市生実町2668-3ほかの千葉急行線建設予定地について実施したものである。現場での発掘は、昭和54・56年度の2年度に分かれる。

昭和54年度は昭和55年2月1日から3月31日の間に、調査対象面積7,000㎡について1,000㎡の確認調査を行った。発掘区は、路線の中心杭2点を基準に20m×20mの大グリッドを設定し、大グリッド内を2m×2mの小グリッド100個に分割した。確認調査は、この発掘区を基に1～13区にとおしのトレンチ（幅2m）を設定し、また20m間隔に直交方向に幅2mのトレンチを加えて、遺構検出面まで手掘りで掘り下げ遺構の有無を確認した。その結果、竪穴住居跡5軒、溝2条の存在が明らかになった。

確認調査の成果に基づき、上層6,100㎡が本調査範囲となり、昭和56年10月1日から現場作業を開始した。遺構の精査は10月28日から001竪穴住居跡を皮切りに順次遺構番号を付けて進めていった。表土除去と遺構検出に呼応して、遺構の発掘と並行し、先土器時代の確認調査を10月31日という早い段階から始めた。先土器時代の確認は、2m×4mのトレンチを基本とし、武蔵野ローム層上面まで下げ、文化層の存在を調べた。年が明けて昭和57年1月28日に、遺跡の空中写真撮影を実施し、その後に竪穴住居跡の掘り方と、カマドの断ち割り、および先土器時代遺物集中出土地点の調査を行った。写真撮影、図面の点検をし、2月27日に調査を終え、同日に現場撤収を済ませ現場作業を完了した。

整理作業は、昭和57年度までに水洗・注記・復元を実施した。昭和59年度に遺物実測、昭和



60年度に遺構・遺物のトレースまで進め、その後昭和62年度に挿図および写真図版を作成し、原稿執筆を昭和63年度上半期に行い、平成元年度の報告書刊行となった。

本調査によって検出した遺構は、竪穴住居跡18軒、土坑2基、溝状遺構3条、礫集中地点1か所、先土器時代石器集中地点1か所である。

遺構の分布は、赤井谷津に面する北側に多く、南側の台地中央部で希薄な状況を呈している。竪穴住居跡のうち002・007・008A・016・017の5軒は、出土遺物が少なく、明確な時期比定を困難にしているが、他の13軒は下記のように大別できよう。

古墳時代前期 006

古墳時代中期 001

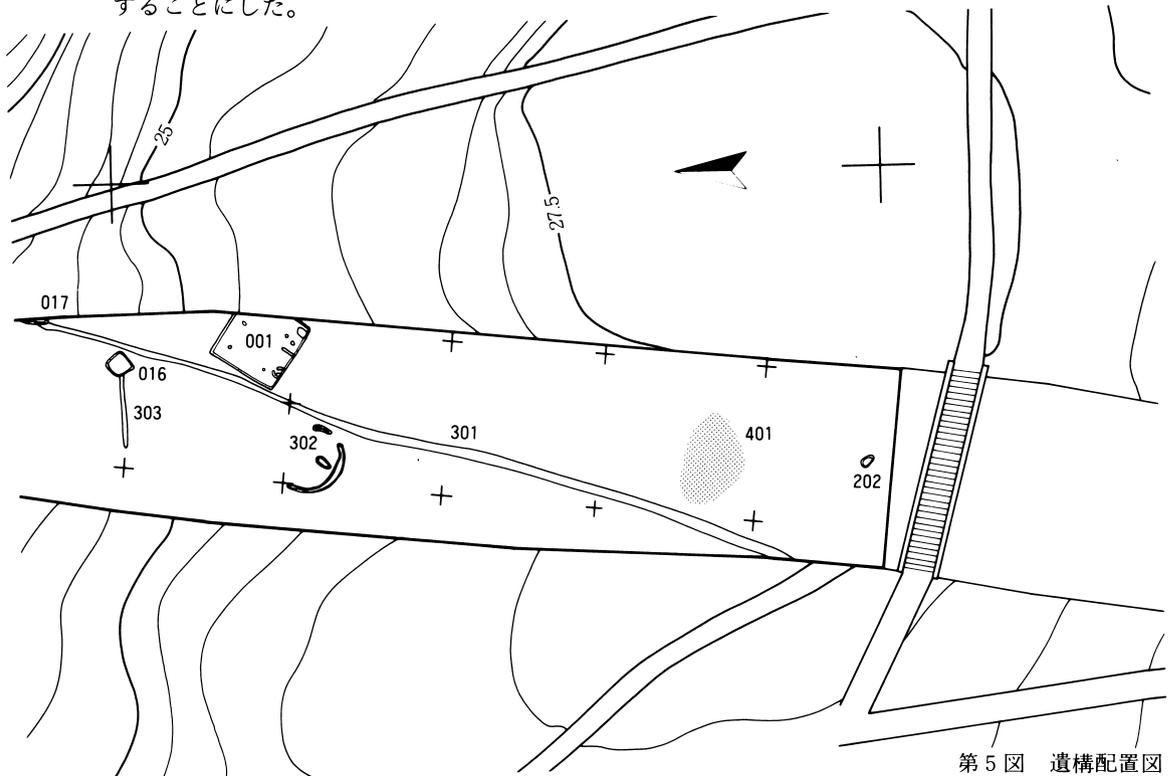
古墳時代後期 003・004・005・008B・009・010・011・012・013・014・015

土坑・溝状遺構の構築時期決定も遺物の僅少さから難しさを伴うが、遺物を出土した201土坑は、古墳時代前期の所産となるであろう。

調査区の北端で検出されたのが縄文時代の礫集中地点である。同じ層位から前期から後期にわたる縄文土器が出土しているが、いずれの時期の集石なのか断定できない。

先土器時代の石器集中地点（本文ではブロックと呼称）はハードローム層に検出され、ナイフ形石器7点を含んでいる。

以上簡単に調査概要についてふれた。なお、本書では現場でつけた遺構番号をそのまま使用することにした。



第5図 遺構配置図

II 検出遺構

1. 竪穴住居跡（第6図～第14図）

A 各竪穴住居跡の説明

遺構の分布は全体に谷津寄りの、調査区の北側に多く、台地中央部には少ないという傾向がある。台地全域にわたってこのような状況が展開されているのか、現状では速断できない。ただ、生実・本納線の道路工事に先だって調査を実施した部分でも、縁辺部から竪穴住居跡の検出をみているので、赤井谷津に沿うように集落が営まれていたことは確かなようだ。

001竪穴住居跡（第6図 図版5）

調査区の中央からやや南になる8Bに位置し、付近には016・017竪穴住居跡がある。1か所のコーナーが調査区外で完掘されていないが、平面形は正方形に近い形(9.23m×9.41m)で、検出した3か所のコーナー部は、それぞれに僅かな丸味がある。壁の遺存は良好で、検出面から36cmの壁高を測る。壁下には壁溝がめぐるが、北壁の一部のみ途切れている。壁溝の幅は20cm前後で一定し、深さは10cm程になる所が多い。溝底にピット等は伴わない。また南壁の中央からやや東に、いわゆる間仕切り溝が、2mの長さで内側まで延びている。柱穴は対角線上に4か所穿っていると考えられるが、1か所は調査区外の位置で確認することができない。各柱穴の床面での直径は40cm内外で、真直ぐに掘り込まれている。P₂(-130cm)、P₃(-94cm)、P₄(-90cm)はいずれもかなりの深さを有する。柱間間隔は5.1m前後である。P₅は外傾した状態となるので、おそらく入口に伴う梯子ピットとなろう。P₆・P₇は、いわゆる貯蔵穴である。P₆は直径60cmの円形で、周囲に土手状の高まりを設け、P₇は110cm×90cmの長方形に作っている。なお、P₇の覆土は、1・2層が黒褐色土で、3層がロームブロックを含んでおり、4層がローム細粒を含む土である。床面は特に攪乱も見あたらず、平坦に構築されているといってよいだろう。(P₁)とP₄との間に炉があり、主軸方向はN-35°-Eを指す。

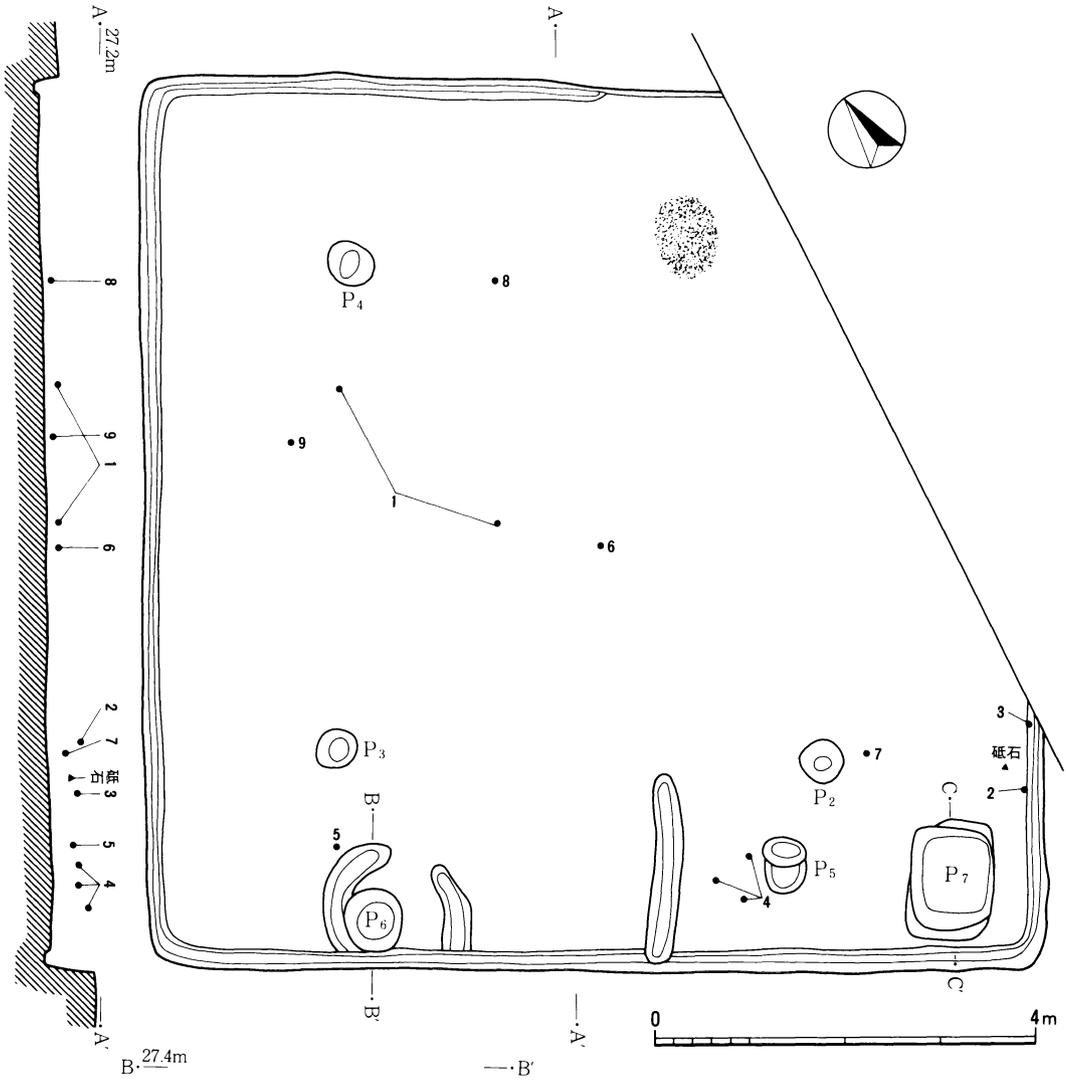
遺物は、床面からやや浮いた位置で出土し、量的には少ない。(出土遺物→34・55ページ)

002竪穴住居跡（第6図 図版5）

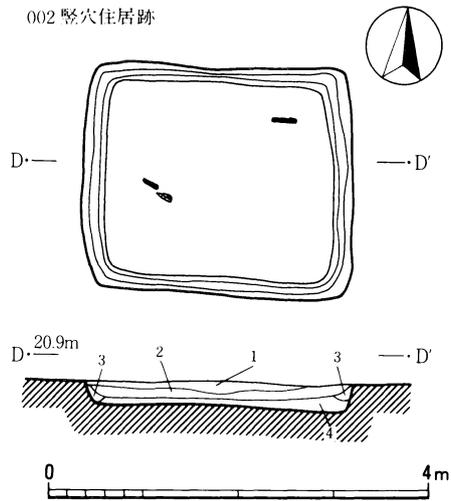
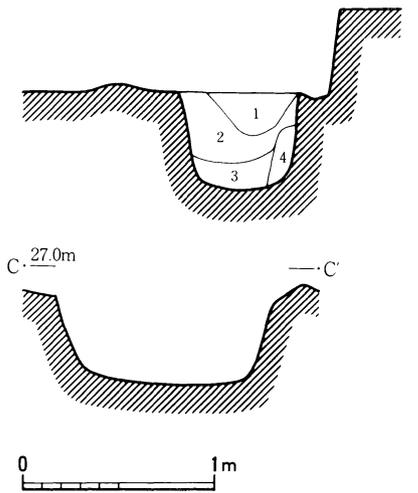
調査区の北側で、赤井谷津に面する台地の肩の位置で検出された。南側に003竪穴住居跡がある。平面形は隅に僅かな丸味がある長方形(2.80m×2.34m)で、東西方向が長辺となる。主軸方向はN-85°-Wである。壁高は26cmで、壁下に浅い溝が全周している。床面は全体に平坦であるが、南から北側に向かって徐々に低くなる。柱穴は検出されず、また、貯蔵穴等の付属施設も発見されない。床面に少量の炭化材が認められ、覆土中2層に炭化粒が散見される。覆土1層：ローム粒が混ざる暗褐色土層。3層：ロームブロックとソフトロームが混ざった暗褐色土層。4層：ローム粒を含み粘性のある黒褐色土層。

遺物は僅かな土器片と砥石1点が出土したのみである。(出土遺物→55ページ)

001 竖穴住居跡



002 竖穴住居跡



第6图 001·002 竖穴住居跡

003竪穴住居跡（第7図 図版5）

調査区の北側で、台地の肩部の位置に単独で検出された竪穴住居跡である。東側に004・005・007竪穴住居跡が検出されている。

カマドをもつ竪穴住居跡で主軸方向がN-1°-Wとほぼ北を指し、四壁に歪みが少なく4コーナーを直線的につなぎ、8.7m×8.8mの正方形に近いプランを呈する。検出面から床面までの深さは、50cm前後で、部分的には75cm程になるところもある。壁の遺存状況は良好で、壁下に溝がめぐっている。その溝の幅は25cmで割と一定し、深さは最大でも5cmと浅い。また、南壁壁溝中にP₁₁と、西壁下にP₁₂の楕円形の小ピットが発見されている。いずれも深さは20cmに達していないものである。床面は貼床で整えられ平坦に構築している。

柱穴は、対角線上に穿たれたP₁~P₄が支柱穴になり、P₁-P₂・P₃-P₄・P₄-P₁の各間に配されたのが、支柱穴を補う柱であったと考えられる。P₂に接しているP₈もP₅~P₇と同程度の40cmの深さを有しているが、その性格は明確でない。P₉はP₅と対向しているものの、P₂-P₃の上ののっておらず、入口の梯子ピットになると思われる。深さは、P₁(-75cm)、P₂(-104cm)、P₃(-83cm)、P₄(-104cm)となっている。カマドの東に検出されたピットは貯蔵穴(125cm×80cm)である。なお、床面精査後に床面を剥ぎ取ったところ、P₃と西壁の間に、いわゆる間仕切り溝の存在が明らかになった。

カマドは北壁の中央に設けられ、煙出し部は壁を20cm切り込んで、なだらかな傾斜で立ち上がっていく。天井部は遺存せず、両袖のみが検出されている。

出土遺物は床面から出土し、多量の炭化材や焼土(23ページ参照)も検出されている。遺物は、土器・土製品がある。(出土遺物→34・55ページ)

004竪穴住居跡（第7図 図版6）

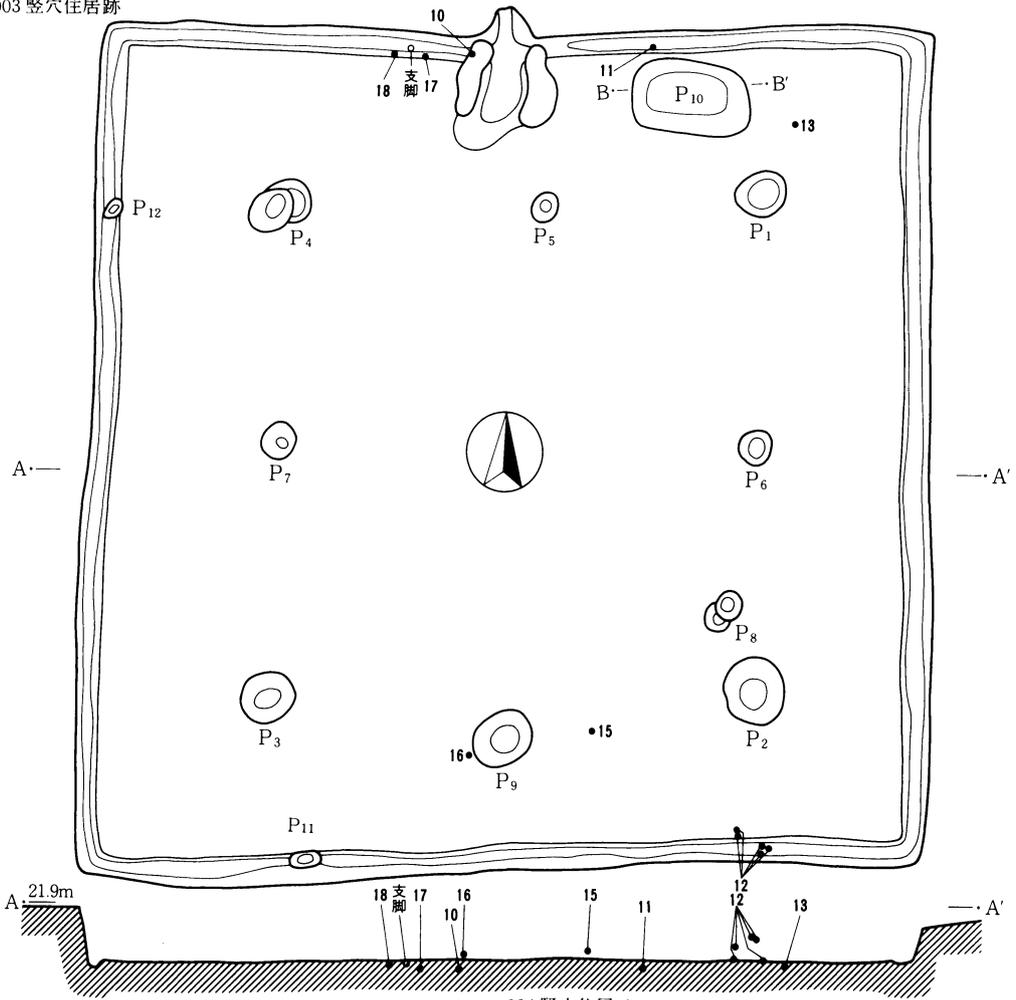
調査区の北側に位置し、005竪穴住居跡と切り合い関係を有している。東壁にカマドを設けており、主軸方向はN-83°-Eと東に偏している。平面形は4.87m×5.16mの方形である。壁は攪乱がなく、良好な箇所では38cmの壁高を示す。壁下に溝は検出されていない。

床面は平坦につくられるが北に若干傾斜している傾向が認められる。P₁(-32cm)・P₂(-52cm)・P₃(-57cm)・P₄(-48cm)が柱穴になると考えられる。P₁とP₃が住居跡の対角線上にのっていないため、四つの柱穴をむすんでも、それぞれのコーナーが直角を成していない。P₅・P₆・P₇のピットは配置から考えて柱穴にはならないと考えられる。P₈は80cm×80cm×45cmの規模を有する貯蔵穴である。

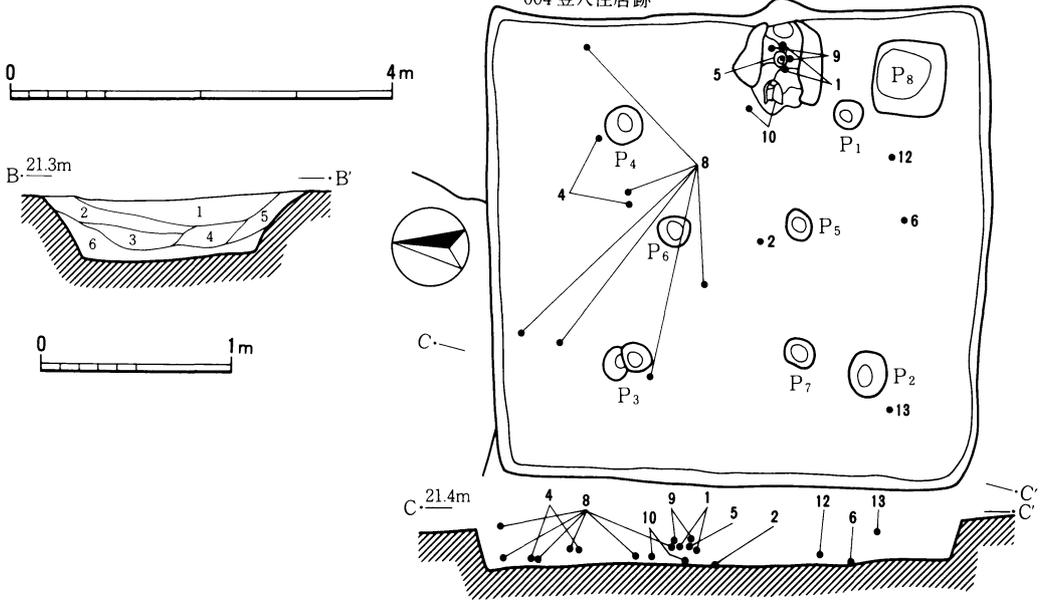
カマドは東壁の中央からやや南へ寄った位置に設けられる。煙道部の壁への切り込みは僅かで、「ハ」の字形に残る両袖が検出されている。

遺物はカマド内にまとまっていたほか、P₈の西側に完形の土器が出土した。また、北東コーナー部とP₂付近に貝の小ブロックが検出されている。(出土遺物→36・55ページ)

003 竖穴住居跡



004 竖穴住居跡



第7图 003·004 竖穴住居跡

005竪穴住居跡（第8図 図版6）

調査区の北側に位置し、004竪穴住居跡と切り合い関係を有している。東壁にカマドを設け主軸方向はN-105°-Eを指す。規模は5.35m×5.05mで、西壁に僅かに張りを認める。

壁の高さは53cmで、壁下には一部途切れてはいるが溝がめぐる。その壁溝のうちの北壁下に1か所小ピットを伴う。床面は貼床によって平坦に構築されるが、中央部が僅かに凹む。

柱穴は対角線上に4か所配置されている。P₁(-74cm)、P₂(-76cm)、P₃(-36cm)、P₄(-67cm)のピットのうち、P₃が他の3か所と比較し極端に浅くなっている。入口に附属する梯子ピットは存在しない。P₅は貯蔵穴で円形の平面形を呈する。60cm×70cmで深さは床面から76cmあり、P₁・P₂・P₄の柱穴とほぼ同程度の深度を示す。貯蔵穴内の埋土は9層に分けることが可能で、下層にいくにしたがってロームブロックを含むようになるが、7層は暗褐色土の中に多量の焼土粒を含んでいる。

カマドは東壁に設けられ、中央からやや南へ寄った位置にある。天井部は崩落するが、袖部は良好なところで35cmの高さを有して遺存している。

住居跡の覆土は4層に分かれ3層にブロック状に焼土が含まれる。また少量の炭化材の検出がある。遺物は須恵器・土師器・土玉が出土しており、南西コーナー部で貝ブロックが発見されている。土器類はいずれも床面からやや浮き、集中していない。(出土遺物→38・55ページ)

006竪穴住居跡（第8図 図版6）

調査区の最も北に位置し、201土坑がすぐ北に接する。主軸方向をN-42°-Wにとり、小型の楕円形(2.9m×2.5m)のプランを呈する。壁高は50cm強になるところがあり、遺存状態は良い。壁の下に溝は認められず、床面から僅かに傾斜して立ち上がっていく。床面は貼床構築であるが大変やわらかである。柱穴やピットは全く発見されず、炉やカマドの施設もない。調査者は床面の状態や炉が存在しないことから、竪穴住居跡と断定するに躊躇しているが、最終的に竪穴住居跡に含めている。しかしその根拠は必ずしも明確ではない。

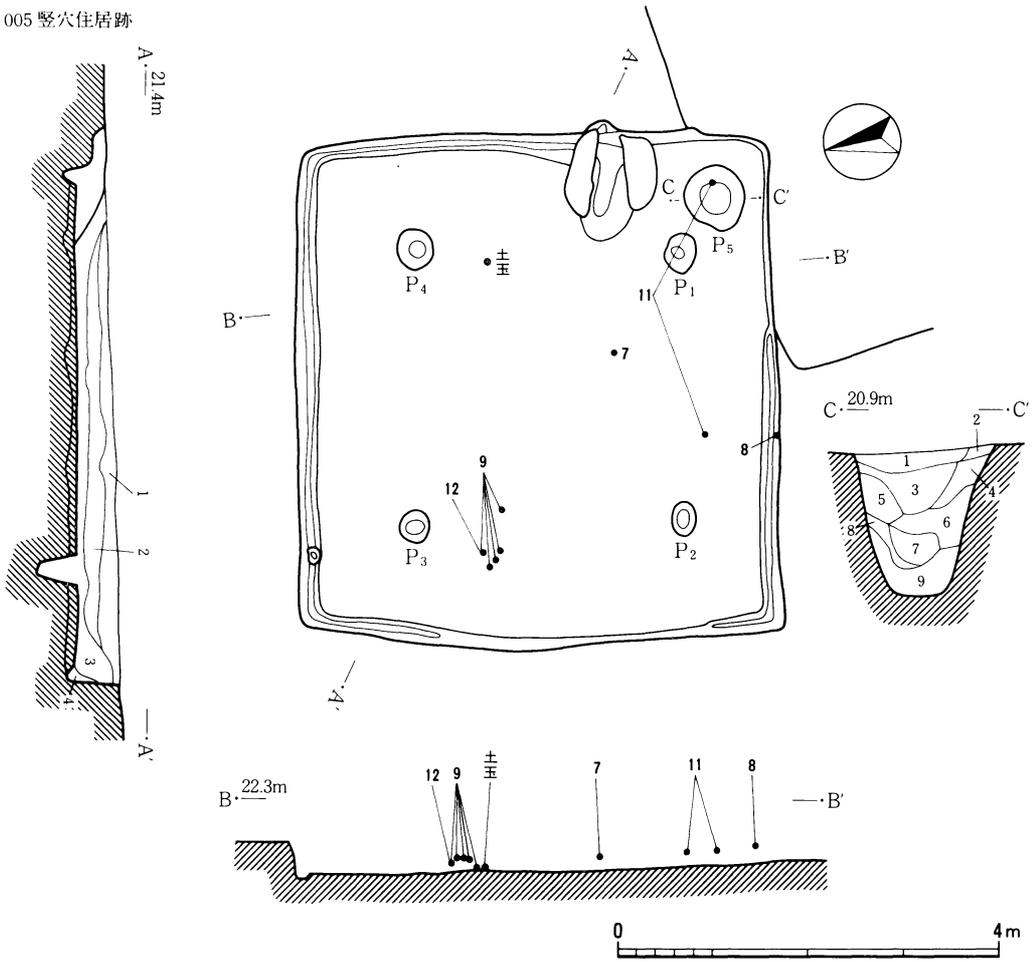
遺物は床面からやや浮いた位置で出土している。(出土遺物→38ページ)

007竪穴住居跡（第8図）

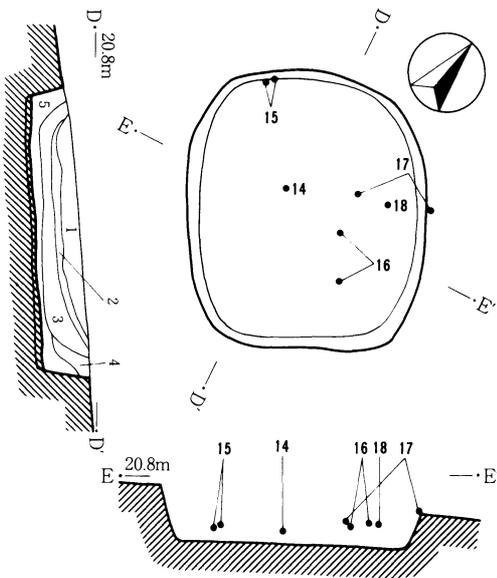
調査区の北側で006竪穴住居跡の南に位置する。主軸方向はN-24°-Wを示す。平面形は隅丸の方形で、3.0m×3.0mの小型な竪穴である。壁高は40cm程度を測るところがある。壁の下の溝はなく、ゆるやかな傾斜で立ち上がる。床面は、黒色土にローム粒を混ぜた土によって貼床構築される。床面のレベルは東が西側より2cm～3cm高く設定され、ベット状遺構のような形状をみせる。柱穴等のピットは1か所にも発見されず、炉等の施設の存在もない。

覆土は4層に分層される。暗茶褐色土層の2層は層厚が厚く、しまりをもっていない。下層にいくにつれてロームの含有量が増加するが、3層には砂を含む。出土遺物は僅かな土器片が散発的に出土したにとどまり、図示可能な遺物は皆無である。

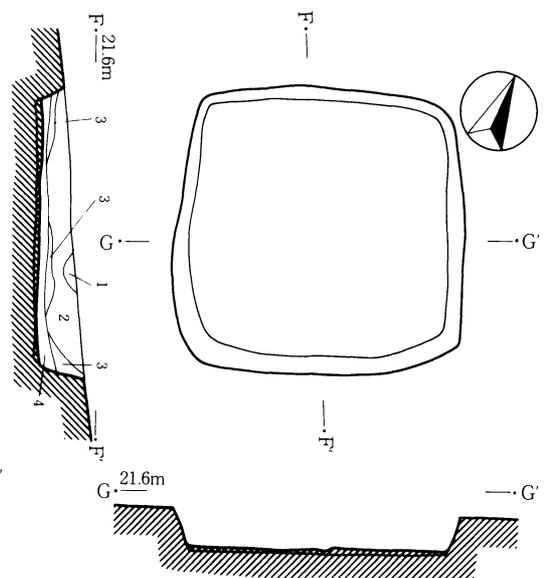
005 竖穴住居跡



006 竖穴住居跡



007 竖穴住居跡



第 8 图 005 · 006 · 007 竖穴住居跡

008A 竪穴住居跡 (第9図 図版7)

調査区の北側に位置し、008B 竪穴住居跡によって大部分が切られている。検出できたのは、南壁の半分と、東・西壁の一部である。南壁から推測すると一辺4 m前後の規模で、方形を呈していたと思われる。また主軸方向はN-9°-E前後になると考えられる。壁高は西壁で60cm強を残し、検出部分での遺存状況は良好といえる。壁下に溝は伴わない。

床面のほとんどを失っているが、柱穴と考えられる2か所のピット(P₁・P₂)を検出することができた。P₁(-54cm)とP₂(-58cm)の柱間間隔が1.8mなので、位置的にP₅(-55cm)、P₆(-71cm)も本跡の柱穴になる可能性がある。南東コーナー部にあるP₁₀(70cm×65cm×50cm)は貯蔵穴と考えたいが断定できない。炉・カマドの痕跡は全く残しておらず、遺物についても実測可能となるものは出土しなかった。

008B 竪穴住居跡 (第9図 図版7)

調査区の北側に位置し、008A 竪穴住居跡を切っている。4コーナーに僅かに丸味を有するが、平面形は4.16m×4.58mの正方形に近く、主軸方向をN-17°-Wにとる。壁高は30cm~80cmで、攪乱が入らないため状態は良い。壁下には幅20cmで深さ5 cm前後の溝がめぐる。床面は5 cm程度の貼床が施され、そう目立った様子でないものの、住居跡中央が周辺部よりやや低くなっていることに気がつく。ピットはP₃~P₅・P₇~P₉が発見されている。P₅については008A 竪穴住居跡の柱穴の可能性があり、P₃(-10cm)、P₄(-30cm)は柱穴としては浅いように思われる。ほかのピットも20cm前後の深さで、その性格は明確でない。したがって本住居跡には、明らかに柱穴として穿ったと断定できるピットが存在しないことになる。

カマドは北壁の中央に設けられる。天井部は残存していない。袖は焚口で狭まり、火袋部で拡がるといった作り方を呈している。

遺物はカマドの西側に完形品があるほかは、床面からやや浮いた状態で、地点を異なって出土したものが接合している。なお本住居跡は焼失住居跡で、床面から、ある程度の長さを持った炭化材や焼土が出土している。(出土遺物→40・55ページ)

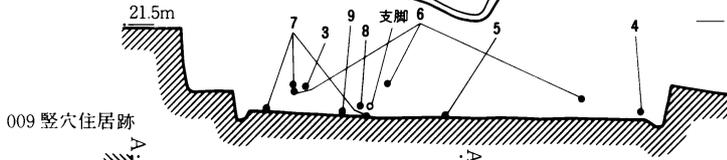
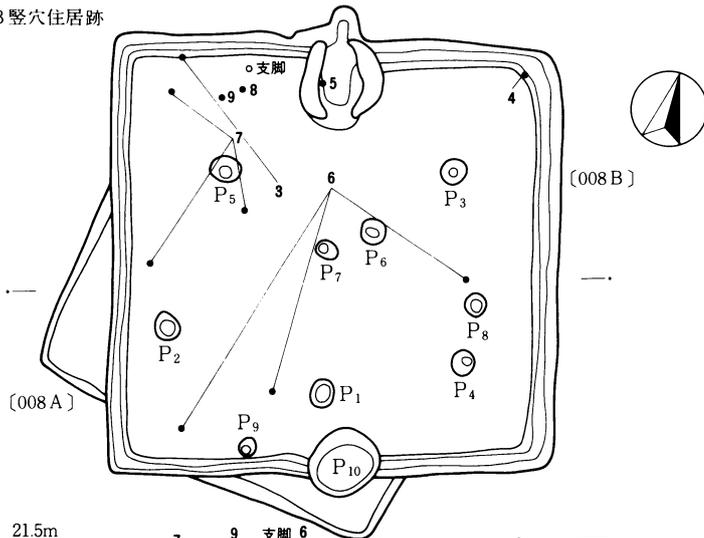
009竪穴住居跡 (第9図 図版7)

調査区の北側に位置し、東側は調査区外へ続く。調査区内で検出できた部分も東半分はすでに削平されてしまって遺存状況が悪い。カマドを北壁に設け、全掘した西壁は7.2mの規模をもっている。壁高は南東コーナー部で50cmを残している。壁下に溝はない。床面は貼床構築であるが、やや波うった状況を呈する。ピットは、P₁(-37cm)・P₂(-51cm)・P₃(-18cm)・P₄(-40cm)を検出している。位置から考えて、いずれも柱穴とはならないであろう。

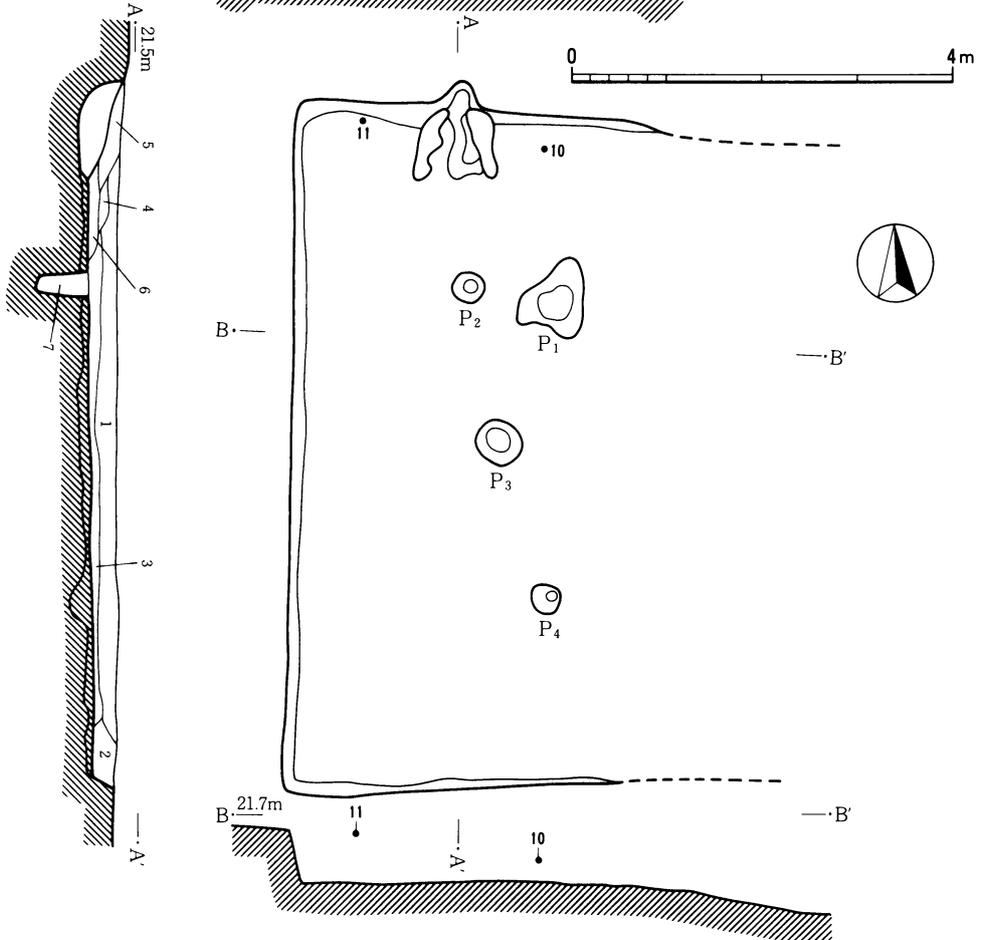
カマドは北壁の北西コーナー寄りに設けられる。天井部は崩落し全く遺存せず、両袖部が「ハ」の字形に、床面から約30cmまで残る。

遺物は図示可能な遺物が僅かに2点と乏しい状況である。(出土遺物→40ページ)

008 A · 008 B 竖穴住居跡



009 竖穴住居跡



第 9 图 008 A · 008 B · 009 竖穴住居跡

010竪穴住居跡（第10図 図版8）

調査区の北側で、西はすぐに路線の外になる。011竪穴住居跡と重複関係にあり、本跡が切られている。その011竪穴住居跡は西側に位置する。

主軸方向は、N-66°-Eで、平面形は西壁に僅かに張りを認める4.45m×4.70mの方形である。西壁を除く他の壁の遺存状況は良好で、南壁の中央部で66cmの壁高を測る。東・南・北の壁下には溝がめぐり、断面図を見る限りにおいては西壁下にも溝が存在していた可能性は高い。床面は、暗褐色土にローム粒を混ぜた土で貼床構築され、かたくしまっている。ただ中央部が周辺より僅かに低くなる傾向が認められる。

柱穴は四隅をむすぶ対角線上に、P₁（-70cm）・P₂（-63cm）・P₃（-64cm）・P₄（-65cm）の4ピットが配されている。柱穴の掘り方の深さはいずれも同程度である。P₅（-54cm）は梯子ピットになる。カマドの南で、コーナーに接してつくられているP₆（75cm×65cm×87cm）は貯蔵穴である。柱穴に比較してもかなり深く掘られた貯蔵穴であることがわかる。

カマドは、東壁の中央からやや南に寄せた位置に設置される。煙道部は、比較的急角度に傾斜し、壁をあまり切り込まないでつくられる。天井部は崩落し、袖の遺存度も低い。

遺物は土師器の杯を主体に出土している。出土状況で特徴となる点は、カマド内に甕・杯・高杯がまとまっていた点（27ページ参照）と、貯蔵穴の周辺に集中し、他所からは完形となるような土器が出土していないことである。（出土遺物→42ページ）

011竪穴住居跡（第10図 図版8）

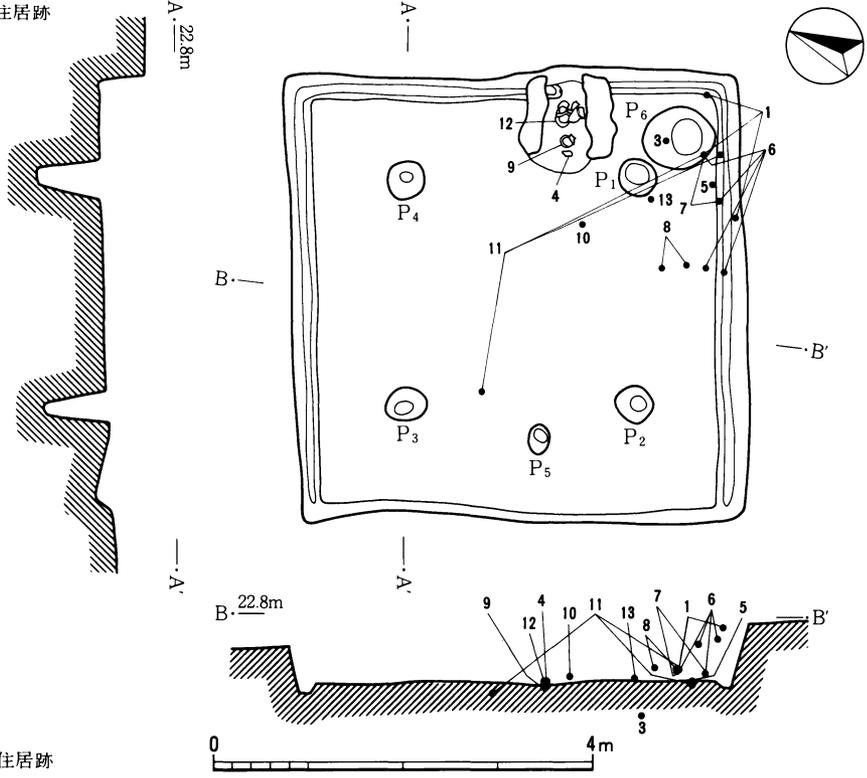
調査区の北側で、西限の範囲内にかろうじて全掘できた。010竪穴住居跡と切り合い関係にあり本跡が新しい構築遺構となる。主軸方向はN-18°-Eである。平面形は方形で、北壁（5.7m）・東壁（5.5m）・南壁（5.3m）・西壁（5.3m）に僅かずつ規模の違いが認められる。また、検出面での上端が直線的に結ばれておらず若干の歪みが生じている。壁溝はなく、壁高は南東コーナーで50cmを残している。

柱穴は、P₁（-70cm）・P₂（-68cm）・P₃（-64cm）・P₄（-75cm）であるが、必ずしも四隅を結ぶ対角線上にのっているわけではない。P₅はカマドの前に検出されたピットで掘り返しが行われたように見える。しかし、その性格については判然としない。カマドの両脇に掘られているP₆（70cm×60cm×60cm）とP₇（70cm×60cm×50cm）は貯蔵穴である。P₆がカマドと接し、P₇がやや間隔を置いて穿たれている。両貯蔵穴に使用目的の違いや、時期差が存在していたか否かについては検討の余地もあるだろう。

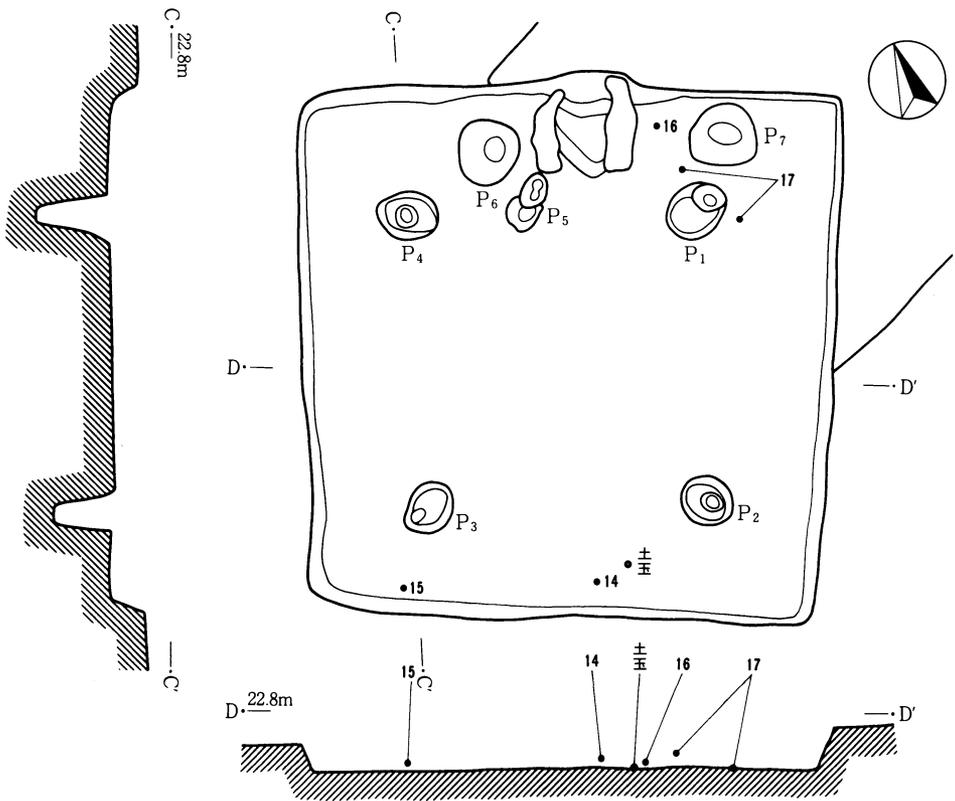
カマドは北壁のほぼ中央に設置されている。天井部は崩落し、両袖部が遺存する。袖の内壁は火熱によって赤変し硬化しているが、右袖の方が顕著である。また火床の中央部分は、床面から15cmほど凹んでいる。

遺物は土器・土製品が散発的に出土したにとどまる。（出土遺物→42・55ページ）

010 竖穴住居跡



011 竖穴住居跡



第10图 010·011 竖穴住居跡

012 竪穴住居跡 (第11・12図)

調査区の北側に位置する。検出時点ですでに東側の大半が削平されてしまった状況で、明らかになったのは西壁と、北・南壁のそれぞれ一部である。西壁の方向はN-10°-Eを示し、長さは約4.8mである。壁の下に溝は検出されない。壁高は南西コーナー付近で25cm前後を測る。床面は厚く貼床構築されるが遺存部分は僅かである。ピットはP₁(-58cm)・P₂(-41cm)・P₃(-49cm)・P₄(-23cm)の4か所に発見されているものの、柱穴にはならないであろう。カマド・炉等はみつかっていない。

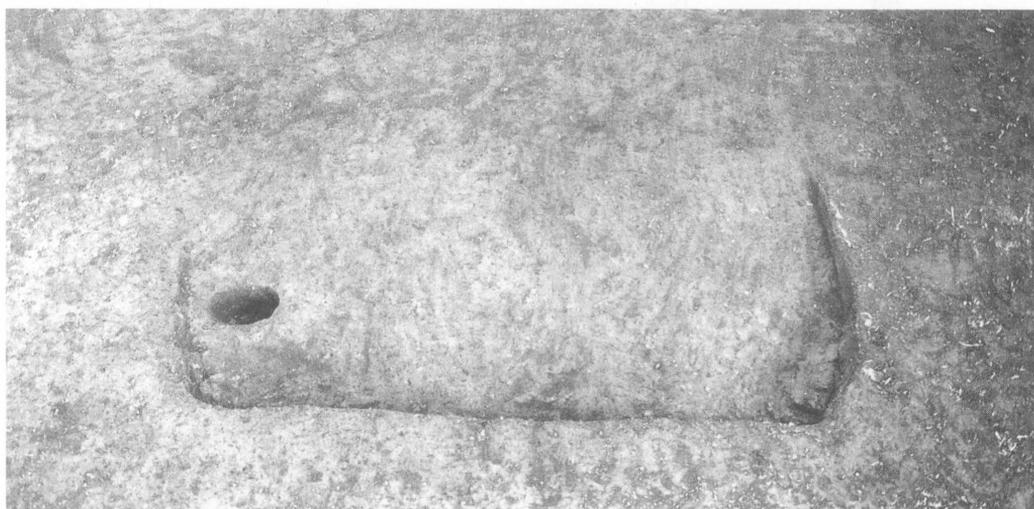
土器は2点が図示可能であったにとどまる。(出土遺物→44・55ページ)

013 竪穴住居跡 (第12図 図版9)

調査区の間中よりやや北に位置し、014 竪穴住居跡と切り合い関係にある。主軸方向をN-13°-Wにとり、6.6m×6.0mの長方形の平面形を呈する。壁下には一部切れる箇所のあるものの、溝がめぐっている。床面は5cm程の貼床によって構築される。この貼床を剥がすことによって、本住居跡が拡張されていたことが確実にされた。

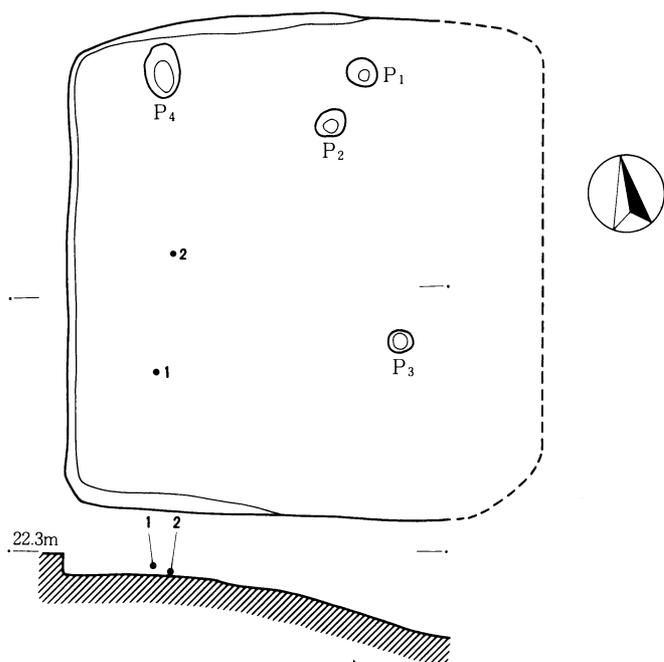
はじめの床面の精査で発見できた柱穴は、P₁(-84cm)・P₂(-82cm)・P₃(-91cm)・P₄(-80cm)の4か所で、ほかにP₇(-52cm)とP₈(-82cm)の小ピットが2か所である。その後に床面を剥がしたところ、P₅(-82cm)・P₆(-82cm)の2か所を検出した。これにより、P₁・P₂・P₅・P₆を柱穴とする住居跡が、南側に拡張されたことがわかる。また、壁溝も明らかになったので、これから推測すると、3.4㎡前後の拡張が実施されたことになる。P₉は貯蔵穴(65cm×45cm×87cm)で拡張後の住居に使用されていたことは確かである。

カマドは北壁中央からやや東の位置に設置されている。天井部は崩落し遺存しない。遺物は、床面から土玉が出土し、土器類はやや浮いた位置から散発的に出土している。また床面に焼土や山砂・ロームが集中して検出されるところが5か所にある。(出土遺物→44・55ページ)

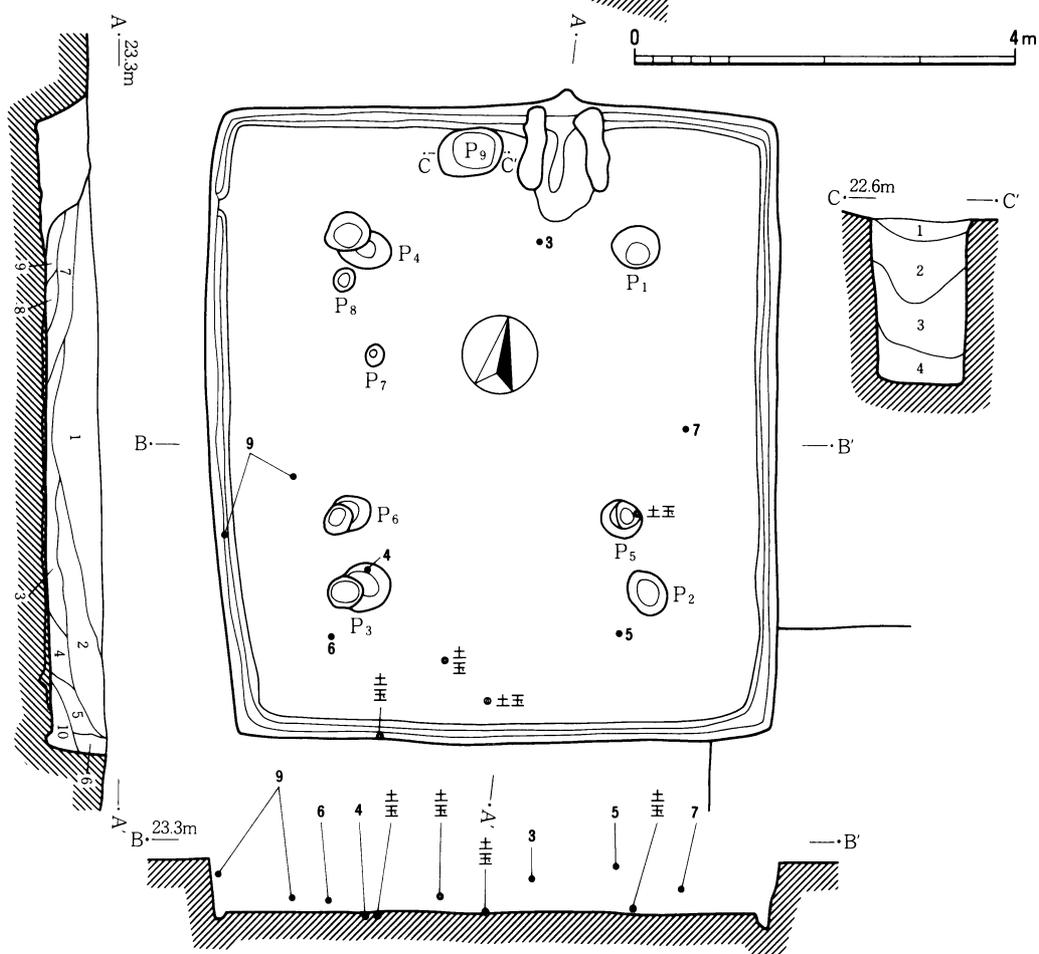


第11図 012 竪穴住居跡の全景 (西から)

012 竖穴住居跡



013 竖穴住居跡



第12图 012·013 竖穴住居跡

014竪穴住居跡（第13図 図版9）

調査区の中央からやや北側に位置し、013竪穴住居跡が部分的に重複している。東壁にカマドがあり、南壁に張り出し部をつくっている。一応カマドを設けている壁と直交する方向を主軸とすると、 $N-85^{\circ}-E$ を示す。張り出し部を除けば、 $5.9m \times 5.9m$ の規模で正方形の平面形を有する。壁の下の溝は東壁と北壁それに南壁の大半の部分に検出されている。壁高は $26cm \sim 43cm$ で南西のコーナー部あたりで最も高くなる。

柱穴は四隅を結ぶ対角線上に、 $P_1(-54cm) \cdot P_2(-62cm) \cdot P_3(-58cm) \cdot P_4(-58cm)$ の4か所が穿たれる。柱間間隔は、 P_3-P_4 間が $3.2m$ で、ほかは $3.4m$ 前後を測る。カマドの右脇にある $P_5(70cm \times 70cm \times 71cm)$ は貯蔵穴である。また南壁の張り出し部にも $P_6(70cm \times 80cm \times 60cm)$ が伴う。調査時の所見によれば、この P_6 は貼床を剥がして検出できたものとなっているので、住居廃棄時にはすでに使用が停止されていたピットということになる。ただ性格としては貯蔵穴としてよいと考えられる。このほか入口の梯子ピットに該当する掘り込みはみつかっていない。床面は貼床構築で、約 $5cm$ の厚さに施される。

カマドは東壁中央からやや南に寄せて設置される。煙道は壁を僅かに切り込んで作られる。天井部は遺存せず、袖の残りも不良である。

遺物は床面に近い位置で出土しているが集中はしていない。 P_3 の柱穴の周辺において甑が破片となって出土している。(出土遺物→44ページ)

015竪穴住居跡（第13図 図版9）

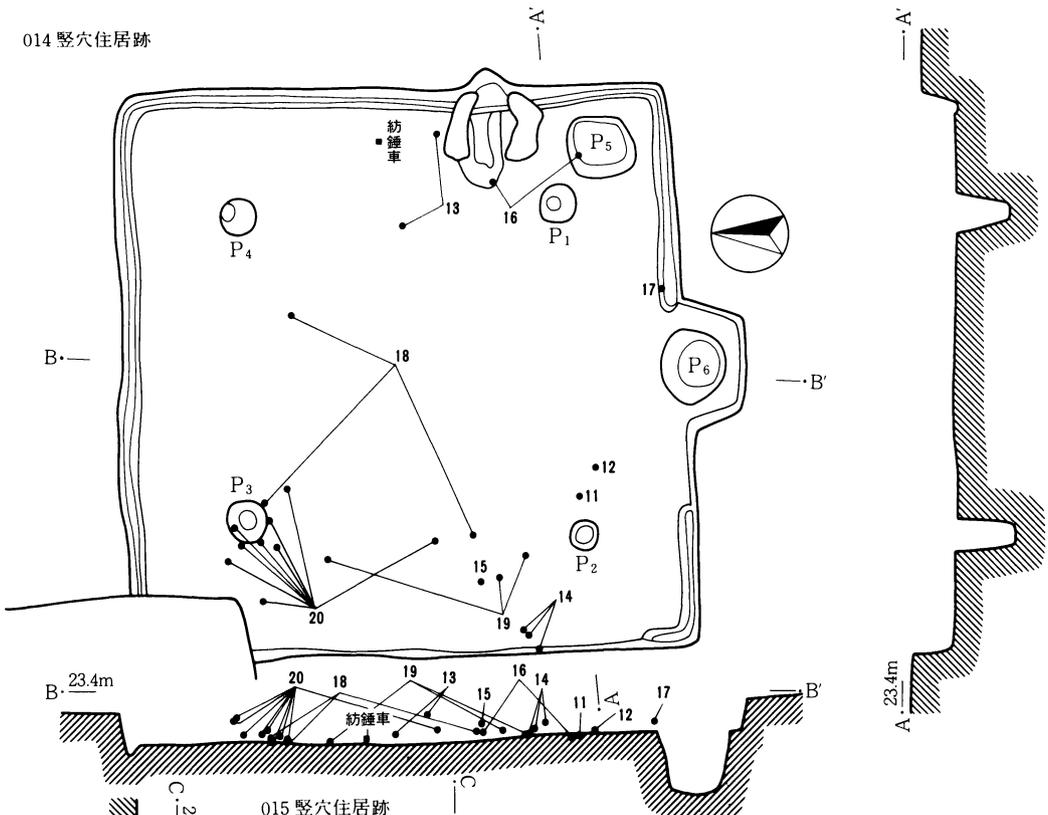
調査区の中央から北側で、西はすぐに今回の境界という位置に検出された。すぐ北側に013・014竪穴住居跡がある。主軸方向は、 $N-62^{\circ}-E$ を指す。平面形は多少の違いは認めるものの一边 $6.7m$ の整った正方形を呈している。壁高は $25cm \sim 45cm$ で、壁下に溝が全周する。床面は、かなり凹凸状態となっている掘り方の上に、粘性のある暗褐色土で貼床して設定される。全体に平坦で、かたさを保った状態を示す。

$P_1(-63cm) \cdot P_2(-73cm) \cdot P_3(-70cm) \cdot P_4(-65cm)$ は、四隅を結ぶ対角線上に穿たれた主柱穴である。主柱穴の柱間間隔は、主軸方向に $4.0m$ で直交方向に $3.9m$ を測り、それぞれ中間に $P_5(-39cm) \cdot P_6(-27cm) \cdot P_7(-39cm) \cdot P_8(-42cm)$ の補柱穴を配置している。ただし P_6 はほかの補柱穴と異なり、 P_2 と P_3 を結ぶ線上からやや外れていたり、掘り方に違いがあることなどを考慮して、梯子ピットになる可能性がある。南東のコーナー部で、カマドの右脇にある $P_9(80cm \times 70cm \times 53cm)$ は貯蔵穴である。

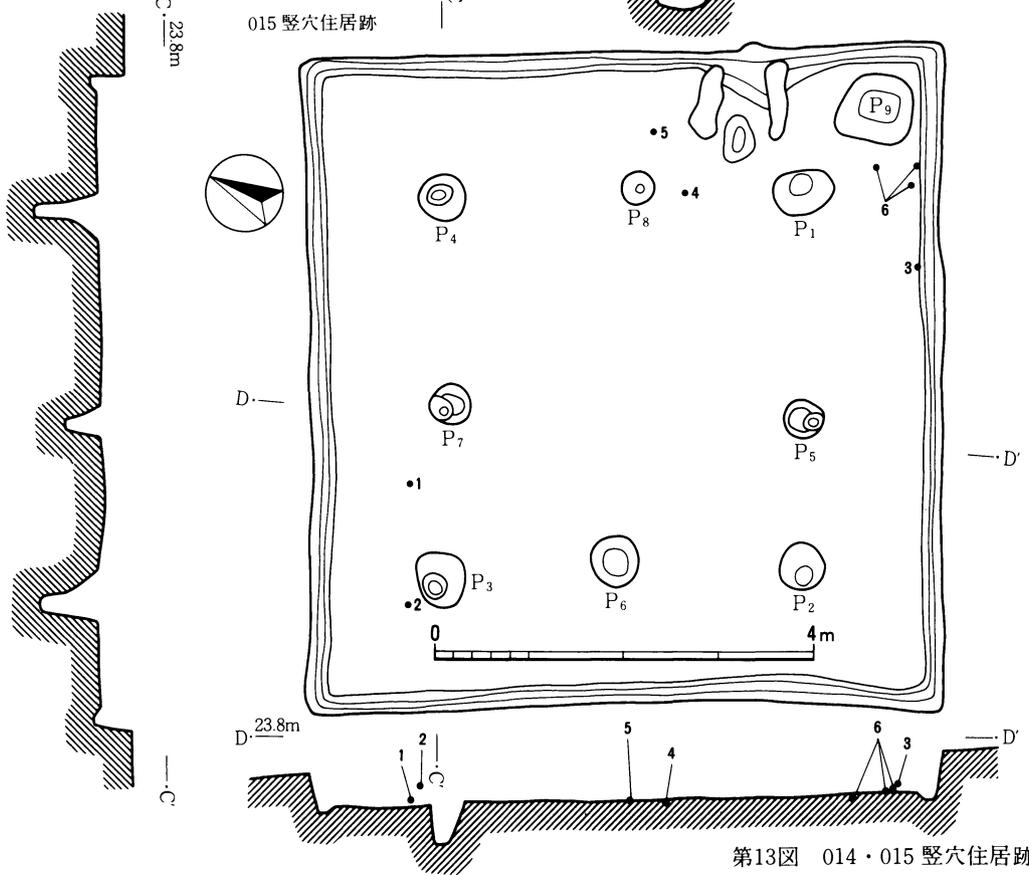
カマドは東壁にあり、中央からやや南に寄っている。天井部は遺存しない。

遺物は住居跡の東半分を主に完形に近い土器が出土しているが量的には少なく、あとは散発的に出土しているにすぎない。また南西コーナー付近、 P_6 と西壁の中間にまとまりのある焼土の堆積が発見されている。(出土遺物→46ページ)

014 竖穴住居跡



015 竖穴住居跡



第13図 014・015 竖穴住居跡

016竪穴住居跡（第14図 図版10）

調査区のほぼ中央で路線のセンターからやや東に寄って位置する。他の竪穴住居跡との切り合い関係はないが、303溝状遺構が本跡から西に延びて検出されている。また東側に301溝状遺構が南北にとおっている。

平面形は各壁に張りがあり、四隅に丸味をつける不整の方形で、主軸方向をN-27°-Wにとる。壁の長さは北壁が最も短く2.4m、他の3壁も2.5m~2.9mなのでかなり小型な部類に入るのであろう。検出面からの壁高は7.5cm~13.5cmと遺存度がかなり低い。壁下に溝は検出されていない。床面は貼床構築ではないが平坦な状況を呈する。ただし、南西方向に僅かずつ傾斜している様子が認められる。床面および周辺からピットや附属施設は発見されていない。

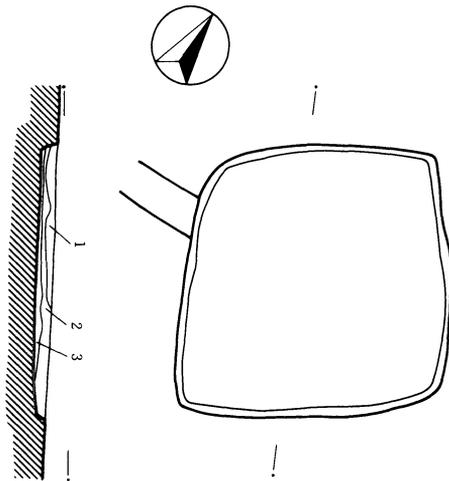
覆土の堆積は薄く、粘性のある黒色土を主としている。この覆土中や床面から図示可能となる遺物の出土は認められなかった。

017竪穴住居跡（第14図）

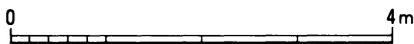
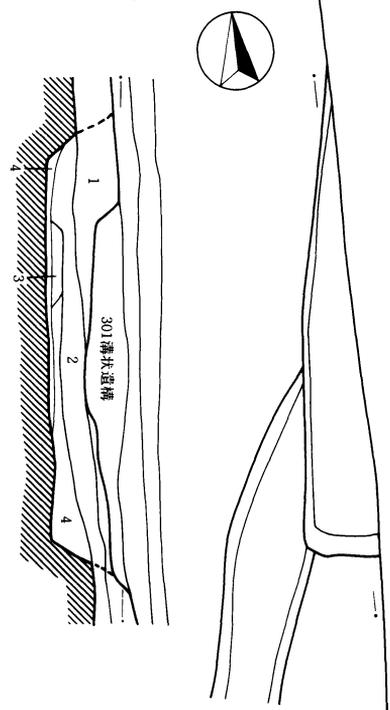
調査区の中央で今回の路線部の東限の境界で検出した。1コーナーと西壁の一部を発掘したにすぎず、大部分が調査区の外に存在する。また301溝状遺構が本跡を切っている。一応検出した西壁の方向は、N-10°-Eを示す。壁高は僅かに検出した南壁で44cmを測る。発掘可能であった壁下に溝は伴っていない。

面積的に僅かな調査であったこともあり、図示可能な遺物の出土はみななかった。

016 竪穴住居跡



017 竪穴住居跡

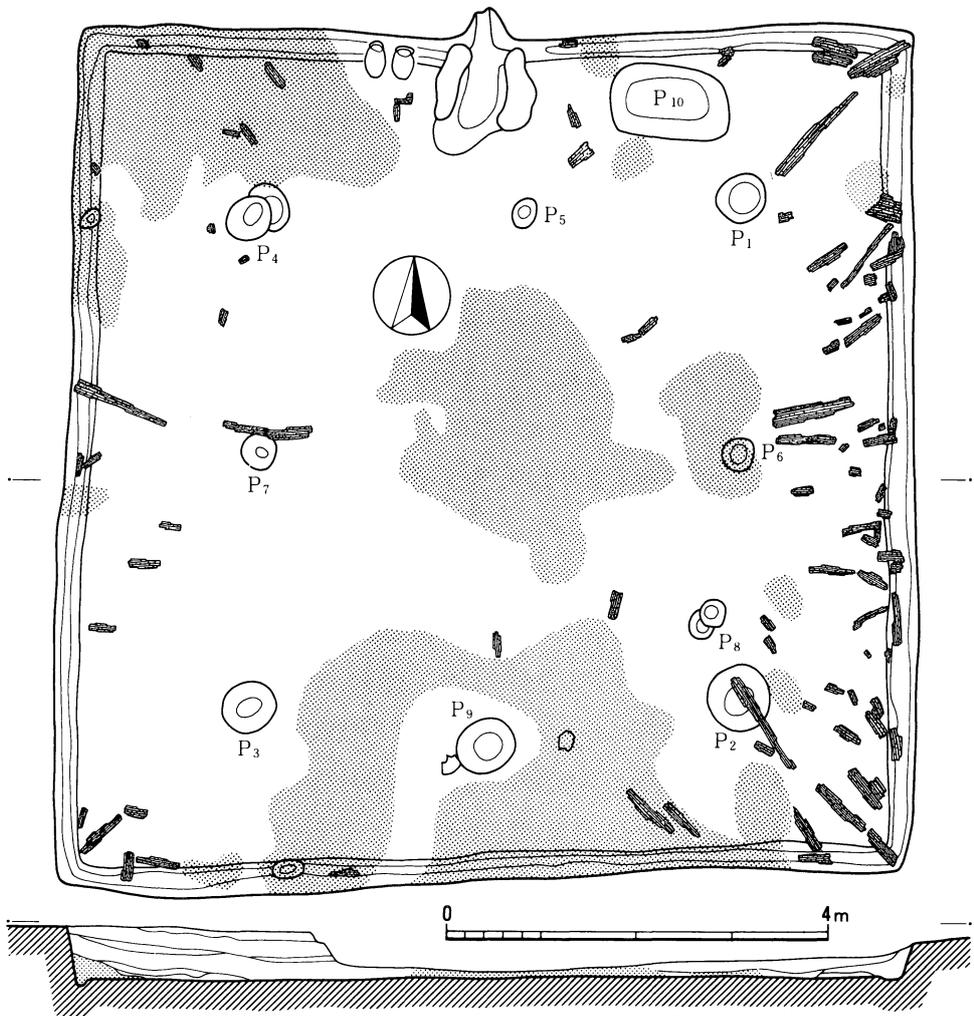


第14図 016・017 竪穴住居跡

B 焼失住居跡と遺物を出土したカマドについて

検出した18軒の竪穴住居跡のなかに焼失住居跡が2軒存在していた。またカマド内に完形の土器が検出される例があったので、これらについて、個々にとりあげておきたい。

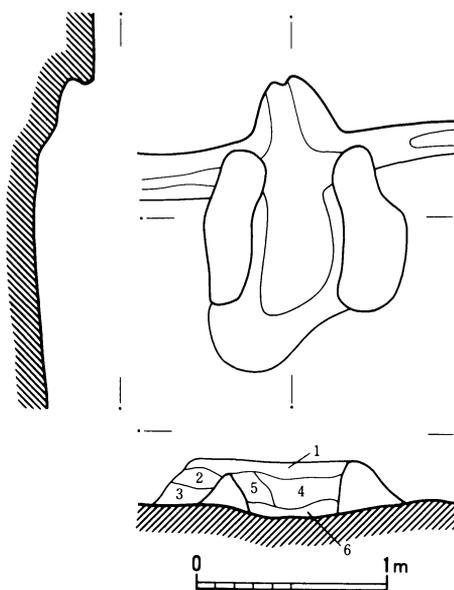
003焼失竪穴住居跡（第15・16図） 床面から多量の炭化材と焼土が出土している。はじめに炭化材の分布状況から見ておこう。まず気がつくことは、炭化材の検出量が住居の中央部よりも壁寄りで多いことと、西側よりも東側で密な分布状況を示していることである。その東側の炭化材は比較的大型のものが多く、住居の中央から放射状に広がるように出土していることが特徴として挙げられる。P₁と北東コーナーの間、およびP₂と南東のコーナーをむすんだところからは、長めの炭化材が良好な保存状態をとどめて検出されており、壁下にもままとまった出土が認められる。西側での炭化材の分布は希薄であり、20cm～40cmの短いものが中心となっている。しかしその短い炭化材の出土方向も、やはり放射状を呈しているということができよう。南側の様子を見ると、コーナー寄りに炭化材があるだけで、入口の梯子ピットと考えられるP₉。



第15図 003 竪穴住居跡の炭化材と焼土の検出状況

より南の壁寄りからは全く発見されていない。主柱穴は対角線上に4か所穿たれ、主柱穴を補なう柱穴も主柱穴の中間の3か所に位置しているが、いずれのピットにも柱材と考えられる炭化材は残っておらず、柱が倒れたような状況も認められない。さらに構築材の部材でいうと、壁と並行する横方向の炭化材が残ってないので、梁材に相当するものが見あたらないことになる。また壁溝に伴う材料もない。

焼土は、住居跡の中央部と北西コーナーのところ、それに入口と考えられる側の大きく3か所に分かれて検出されている。あとは小範囲に散って分布し、堆積も薄い。壁際の焼土はいわゆる三角堆積を示しており、その下には堆積が認められない。



第16図 003 竪穴住居跡のカマド

次にカマドと貯蔵穴についてふれておきたい。覆土の堆積内容から焼失時におけるカマドと貯蔵穴の状態が、ある程度推測可能となるからである。カマドは北壁の中央にあり、調査時点では天井部の遺存は認められず、両袖部が明らかになっただけである。カマド内の覆土4層は赤褐色土で、焼土ブロック、火熱を受けたロームを主にし、5層は焼けた山砂である。6層もかたくしまった山砂の堆積となっている。このようにカマド内の3層は火熱の認められる山砂が入っており、カマド構築材と見なすことができる。ただし、カマドの周辺においても炭化材の出土があるものの、カマド内にはこれが全く含まれていない。一方カマドの右側に設けられている貯蔵穴があるが、これを埋める覆土は6枚に分層可能であった(第7図)。このうち1～5層については炭化物や焼土粒を多く含む土で、最下層の6層が粘性のあるローム粒を主としており、炭化物や焼土粒を含んでいない。

この住居跡の遺物には土師器の杯・鉢・小型甕・甕・土製支脚がある。土器は北壁寄りと南壁寄りに分かれて出土しており、杯に比べて甕類の出土量が多い。甕のなかで大型の完形品が2点あるが(34ページ)、これはカマドの左側に並べて置いたような状態で発見されている。またこの2点の甕の間に土製支脚があった。カマド内や貯蔵穴内からの出土遺物はない。

008B 焼失竪穴住居跡(第17・18図) 003竪穴住居跡では住居の中央部で炭化材が検出されなかったが、本跡の場合は壁寄りに少なく、前者と対照的な出土状況を示している。炭化材の多くは壁から50cm内外の間隔を置いて出土し、住居内にただ単に散乱しているかのように見える。しかし、数は少ないものの40cm～50cm前後の比較的長めのものに注意すると、放射状に分布している様子が見られる。検出した炭化材の直径は10cmに達しないものが大半を占め、柱材と認められる炭化材はないといってよいだろう。本跡に確実に伴うといえる柱穴が発見され

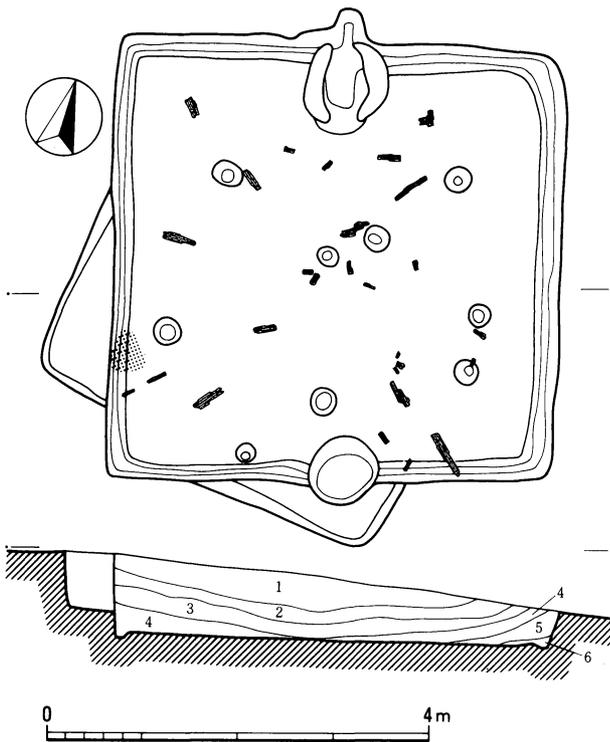
ないので、敢えて大型の材にこだわらなくともよいのかもしれない。断言できることは、炭化して遺存していた材が、梁にせよ垂木にせよ、上屋を構築していた部材の一部でしかないということである。これは出土量が提示する事実である。

焼土については、まとまった出土が観察されず、西壁の南寄りに1か所、径40cmのブロック状の堆積が確認されたにすぎない。

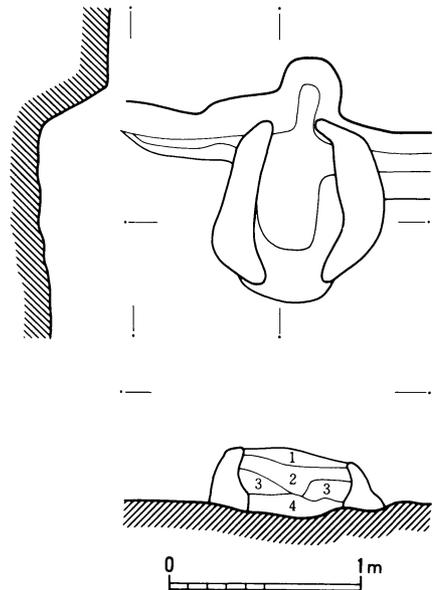
北壁の中央に設置されているカマドは、両袖が遺存するものの天井部は全く形をとどめていない。袖内の第3層が天井構築材と考えられ、その上を覆う土は焼土粒・小ロームブロックを主体にしている。カマド内の埋土中に顕著な炭化材は認められず、甕の口縁部破片(41ページ5)の出土をみている。竪穴住居跡全体の覆土は、いわゆるレンズ状の堆積を呈し、1層：中央に焼土が混入する黒色土層。2層：ローム粒の多い暗褐色土層。3層：細粒の黒色土を含む暗褐色土層。4層：ロームを主とし粘性があり、炭化粒を少量含む暗褐色土層。5層：細粒のロームを主とし、しまりが弱く炭化粒・焼土粒を含む暗褐色土層。6層：暗褐色土に細粒のロームが混ざる暗黄褐色土層。以上の分層所見を得ているが、4層はカマド覆土の第2層と同一と考えられ、炭化粒・焼土粒を含有しない第一次堆積土の6層の存在に注目しておきたい。

出土遺物は、土師器の杯・高杯・甕・甑(40ページ)・土製支脚(55ページ)がある。杯・高杯は欠損品で、甕類の出土が卓越する。出土レベルは完形の甕類の多くが床面から出土し、カマドの西側にややまとまりが認められる。土製支脚は完存し、カマドの左袖隣に取り出されており、すぐ南に逆位に置かれた甑と、

横位になっている甕が並んで出土している。



第17図 008B 竪穴住居跡の炭化材と焼土の検出状況

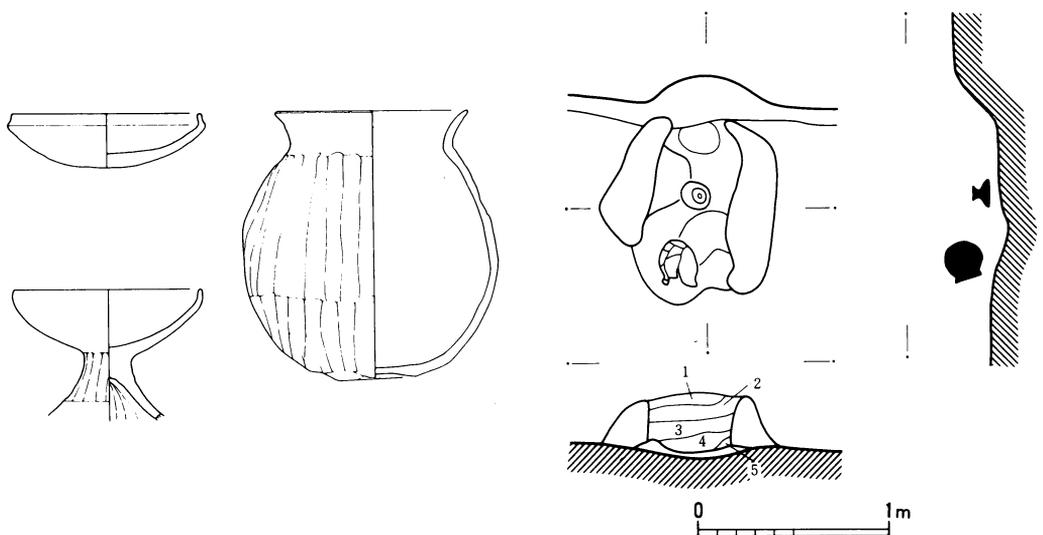


第18図 008B 竪穴住居跡のカマド

004 竪穴住居跡のカマド内遺物出土状況 (第19図・図版12) この竪穴住居跡からは土師器の杯・高杯・小型甕・甕・甑が出土しており、その数も豊富である。遺物は住居跡の各所から検出され、カマド内からも土器が出土している。カマド内から発見された土器は3点あり、復元の結果いずれも略完形となった。その3点は杯・高杯・甕が各1点ずつで、出土状況は次のようである。最初に高杯からみると、これは火床部中央からやや煙道部に寄った位置で、杯部を下に伏せた状態の逆位で出土している。出土レベルはカマド底面から6cm 浮いており、4層中に口縁を置いている。この高杯の上から破片で出土したのが杯である。破片は近接して出土し、状況からすれば、はじめから破片であったのか、完形であったものがその後何らかの要因で破片となったのかは検討を要するところである。しかし、高杯の上に存在していたことから、置かれたとするなら完形品であったと考えることが妥当である。なお高杯の裾部は、全周にわたって欠損し、本来の高杯の姿からすれば完全なものとはいえない。明確な被火熱は認められないが、欠損が支脚としての使用があったことを示唆する痕跡になろうか。

もう1点の出土遺物である甕は、カマドの前面である焚口付近から、口縁部を手前に向け、横位になった状態で発見されている。検出レベルは底面から浮いた位置で、ちょうど4層の上に置かれたような形である。口縁部がやや下向きになっていて、胴部最大径と同レベルで接地していたものと考えられ、4層形成直後にこのような状態になっていたことが明らかである。以上が完形で出土した土器で、ほかにカマド内に検出したものは、土器片が2点ある。

カマドは両袖を残すのみで、天井部は遺存しない。カマド内覆土の所見からは、山砂を主体にする層が確認されておらず、焼土ブロックが多いと記載されている3層を比定してもよいかもしれないが、天井部構築材の行方が不明である。火床の上面に堆積する4層は焼土粒が全く含まれない黒褐色土層である。



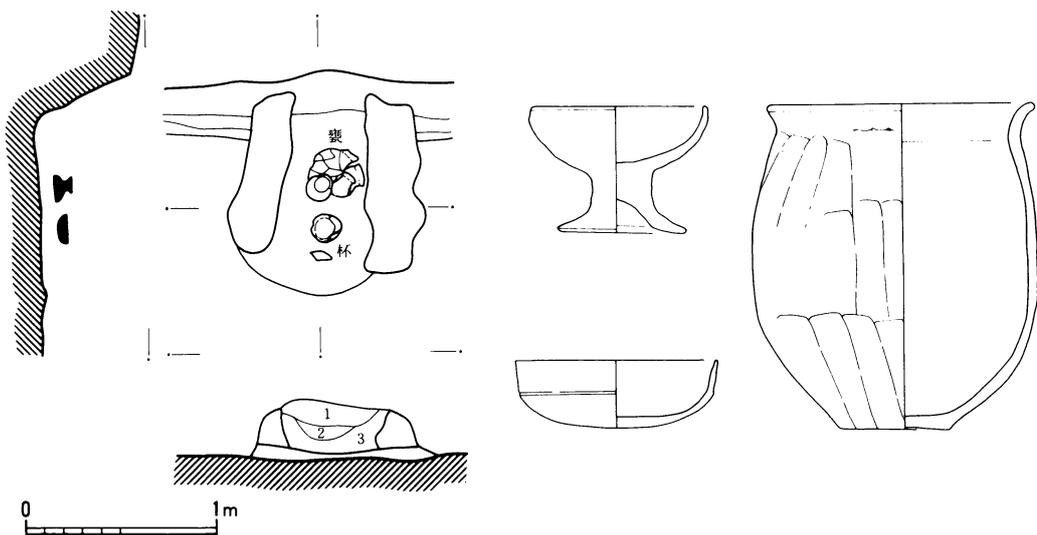
第19図 004 竪穴住居跡のカマド内遺物出土状況

010 竪穴住居跡のカマド内遺物出土状況 (第20図 図版12) 竪穴住居跡全体の出土遺物は、土師器の杯を主体に高杯・鉢・甕・壺がある。カマド内からは、杯・高杯・甕の各1点、合計3点が出土した。このうち高杯は、カマド中央部の火床面から10cm 浮いたレベルで逆位で検出され、杯部が3層に食い込んでやや斜位になっていた。甕は高杯の上から割れて出土した。検出時の状況から、逆位の高杯の上に正位で置いたというより、はじめから横倒しの状態で置いたと考えられる。破片の出土が高杯の食い込んでいる3層中までは及んでいないので、この甕が破損した時点ですでに3層の堆積は終了していたと解釈できる。杯は高杯と甕よりも焚口寄り正位に出土した。高杯と同様カマドの主軸線上に位置し、カマド内覆土の3層上面に底部を接地させ口縁部を水平に置いた状態を保っている。

カマドは両袖のみの遺存で、天井部は残存しない。カマド内覆土の2層が山砂を主にするので、これが天井構築材であった可能性が高い。

以上述べてきた4事例については、今回の種ヶ谷津遺跡の調査で検出した竪穴住居跡のなかでは、いわば特殊な状況で検出されたものである。しかし、東日本の古墳時代集落の竪穴住居跡の調査では、焼失住居跡にしばしば遭遇するし、カマドの中に遺物が存在することも決してめずらしいことではない。逆に稀でないことが、発見される焼失住居跡が単に偶発的な理由で焼失に至ったのではなく、そこに人の意志の介在があったことをうかがわせ、カマド内の遺物に意味があったことを物語るのではないだろうか。

竪穴住居跡内に炭化材や焼土が残されていることが、火を受けて焼失したと断定する条件になることはいうまでもない。例えば、一度は焼失した住居でも、それを復旧して住み続け、その後廃棄されることがあっても焼失住居跡とは区別されるだろう。炭化材や焼土が焼失後の



第20図 010 竪穴住居跡のカマド内遺物出土状況

原位置を保っており、焼失によって住居としての機能が完全に終了し、二度と使用されることがなく発掘されたものを焼失住居跡と呼びたい。

ところで、003竪穴住居跡と008B 竪穴住居跡それぞれの検出炭化材と焼土の量に多寡が認められたように、焼失住居跡には遺物の出土状況等に様々な違いが認められる。寺社下博氏は、古墳時代後期の焼失住居跡の分類を、発見される遺物の有無との関係から試み、住居内から遺物が一括出土する場合と、遺物が出土しない場合に想定される7通りの可能性を呈示している¹。そのなかで住居が火を被る要因として、過失と故意が考えられるとし、「過失によるものか、故意なのかといった問題は、集落全体の中での一地点の占める性格として重要なもの」ととらえ、「故意の火災は、竪穴住居を焼き払うことに意義を有する」ことを指摘する。しかし、過失か故意かという判定は、1軒の焼失家屋のみの検討だけでは無理で、総合的な分析が必要になることを述べている。一方、群馬県村主遺跡の奈良時代の焼失住居跡の、炭化材と焼土の検出状態、遺物の出土状況を詳細に検討した中沢悟氏が、「1遺跡1焼失住居調査例の観察で考えられたこと」と断わりながら、竪穴住居が焼けて埋まるまでの経過を復元し、焼失が住居の引越し後に行われたことを説明し、焼失の時期について具体的な見解を示されたことは注目される²。特にこわれたカマド内に落ちている焚口天井石の上に炭化材が被うようにかぶさっていたことに着目し、住居が焼失した以前にカマドがこわされていたとする見方は、実際引越しという行為が行われていたかどうかは別にして、焼失が住居放棄後であったことをよく裏づけていると思われる。さらに住居が放棄された後の焼失ならば、それが故意的である根拠にもなりえるだろう。それ故、炭化材や焼土の出土状況の細心の観察は、1軒ごとのたどった過程を解く糸口であり、現場での取り扱い方が重要となってくることはいうまでもない。以下いくつかの焼失住居跡と比較しながら003・008B 竪穴住居跡について検討を加えたい。

中沢氏の報告にあるような、焼失が住居放棄後であったと考えられる例が、千葉市の荒久遺跡で検出した古墳時代後期の竪穴住居跡2軒でも確認された³。1軒は村主遺跡と同じように、カマド覆土上に炭化材が検出されて、覆土中には全く炭化材を含んでいなかったもので、カマド使用中（カマドがカマドとして使えるようになっている状態）の焼失とは考えられず、貯蔵穴に炭化材があったことから、竪穴住居廃棄後余り時間がたっていない時期に火を受けたことが推測され、もう1軒はカマドの構築材が焚口の前面に散在し、これに焼失時に被った火熱が認められたため、住居使用中の不意の火災ではないことが明らかになった。ここで焼失時が住居廃棄後とする決め手になったのは、カマドの使用が停止されていた点である。カマドが使用可能な完全な形の状態であれば、掛口が塞がれていないかぎり、上屋の焼失に伴って炭化材が火

1. 寺社下 博 「古墳時代住居の廃棄に関する問題点」『先史』12 駒沢大学考古学研究室 1981

2. 中沢 悟ほか 『大原II遺跡 村主遺跡』（助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986

3. 小林清隆 山口典子 「千葉市荒久遺跡の焼失住居の調査について」『研究連絡誌』 第22号（助千葉県文化財センター 1988

袋部まで落下することは十分考えられるし、住居が燃えている最中にカマドを破壊することなどは想像し難い行為である。003竪穴住居跡は、炭化材・焼土とも多く検出され、カマド周辺にもその分布は確認されたが、カマド内からは全く炭化材がみつからなかった。このことだけでは、たまたまカマド内には炭化材が入り込まなかったとも考えられるが、カマドの右側にある貯蔵穴内覆土の炭化物や焼土を含む層の下層に、それ以前に堆積していた土層が存在していたことが、住居使用停止後の焼失ということを補強すると思われる。貯蔵穴が日常的に使用されていた施設であるならば、その中に土が入れば普通は取り除いて使用することが考えられるからである。008B 竪穴住居跡も同様に、カマド内に炭化材の検出がなく、壁際に炭化粒・焼土粒の含まれない第一次堆積土が形成されていたので、住居放棄後程無く燃えたものと考えられる。

炭化材や焼土の検出状況の観察によって、003・008B 竪穴住居跡の焼失が住居廃棄後であったことが明らかになってきたが、出土している炭化材から焼失前の住居の状態が想定できないだろうか。炭化材は当り前のことながら、住居構築材が炭化したものなのだから、上屋構造の復元資料を提供しているといえる。ところが出土している炭化材の量は、構築材の一部としか思えないほどの少なさである。構築材は炭化しなければ目にすることができないので、焼えてきて灰と化してしまった場合や、逆に生焼けの状態であった場合は、形をとどめた炭の形で発見できる可能性はなくなる。それともう一つ考えられることは、焼失時に構築材の一部がすでに住居の外に運び出されていた場合である。どんなに炭化するに必要な好条件が整っていたにしても、はじめからないものは何も残らないのである。003・008B 竪穴住居跡では、炭化材の出土状況が放射状であったことがとらえられたが、この炭化材を屋根の垂木材と考えてよいだろう。003竪穴住居跡には比較的大型の炭化材が残っていたにもかかわらず、垂木よりさらに大きな材料を用いたと思われる柱材や梁材は検出されなかった。千葉市大道遺跡002号住居跡では、柱穴間の距離よりも長さのある梁材が4本発見されているが、柱材は1本も確認されていない。先にふれた千葉市荒久遺跡の2軒の例でも、柱穴の上に柱材を検出したが、柱が倒れたと考えられる状況は全く見出せず、1本の柱材には、床面から10cm上のところで斜めに切断されたような痕跡が認められている。このように、残っても良いであろう柱材が発見できないのは、焼失時すでに柱は外に持ち出されていたことを意味するのではないだろうか。

住居を廃棄する際に柱を抜き取ったと思われる例は、焼失住居跡以外でも確認されている。東葛飾郡沼南町の大井東山遺跡の竪穴住居019の柱穴内からは、意図的に埋置されたと考えられる甕が出土しており、柱を抜き取った後の行為であることから、廃棄に伴う上屋構造の解体があったことを今泉潔氏が確認している²。火を受けていない住居の抜柱行為が建築部材の継続的

1. 報告書では、主柱穴に付属する柱材あるいは上部構造の梁材としているが、出土状況から判断すると梁材の可能性が高い。『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』（助千葉県文化財センター 1983）

2. 今泉 潔ほか『大井東山遺跡・大井大畑遺跡』（助千葉県文化財センター 1987）

な使用を目的としているならば、焼失住居跡に欠落する柱材や梁材も、同様な目的で住居外へ移動させられていた可能性は大きい。しかし、残りの部材に火をつけるか否かの行為の違いはどこから派生するのであろうか。それには焼失させるに至った要因の究明が必要になってくるが、決してたやすい問題ではないし、住居廃棄後の焼失であれば、火をつけた主体者がその住居の構成員でなくともよいことになり、その特定はさらに難しくなる。

003・008B 竪穴住居跡の出土遺物をみると、杯類が少なく、煮沸・貯蔵用の甕・鉢等の大型土器の出土が目立つ。住居の廃棄が住居構成員の死亡、それが疫病などであれば、使用土器を住居内にそのまま放置しておくと思われる。大型土器だけが多いというのは、残す土器を選択した結果であると考えたい。想像を進めるならばこの住居に生活していた人達は住居の放棄後、新しい住居をここから離れた場所に構築し、持ち運びが容易である小型土器だけを選んだのではないだろうか。また、住居廃棄後、僅かの期間をおいてから焼失しているので、必要な部材を取り出して火をつけたのは、かつての住人以外の人であったと推測しておきたい。これはあくまでも状況からの可能性の一つで、焼失住居跡をめぐる問題はこれからの研究課題である。

003・008B 竪穴住居跡のカマドがそうであったように、関東地方の古墳時代後期以後のカマドの調査で、完全な形のカマドを検出することはめったにない。こうした状況のカマドがこわられるだけでなく、こわされていたとの見地から、人間の意志によって行われたカマドに対する祭祀行為とする指摘がある¹。また破壊とは別にカマド内から遺物が出土することも、カマド祭祀の現れとみなす考えもある²。今回の種ヶ谷津遺跡で検出したカマドは10基で、いずれも袖部のみの存在を呈し、天井部を明らかにできた例はなく、そのなかの004・010竪穴住居跡の2基のカマドの内に土器が残されていた。この出土した土器の意味を類例から考えたい。

沼南町大井東山遺跡では、今泉潔氏がカマドの検出状況をA～Cの3タイプに分類している³。A：カマド内に何も残さず、土製支脚を抜いてカマドの脇に放置する。B：カマド内に支脚を立てたまま放置するか、カマド内の土器が出土していても土器の使用状態でない場合。C：カマド内に煮沸容器を残すが、支脚をとりはずしカマドの傍らに放置する。この分類に004・010竪穴住居跡例を対比してみるとCタイプに近いが、2軒のカマドとも煮沸容器である甕のほか、土師器の杯と高杯を伴出している点で若干の違いがある。他の遺跡ではどうであろうか。

種ヶ谷津遺跡の県道生実本納線工事部分の調査で検出した9軒の竪穴住居跡では、6軒のカ

1. 中沢悟氏は28ページ注2のなかで、カマドに対しての破壊行為を引越しに伴い火を移す際の基本的な作業としカマドに対する信仰心の存在を述べ、桐原健氏は、カマドの廃絶状態やカマド内の支石抜去からカマド信仰を説明している。桐原 健 「古代東国における電信仰の一面」『國學院雑誌』第78巻第9号 1977

2. 寺沢知子 「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学』第16号 1986

3. 29ページの注2に同じ

4. 『千葉市種ヶ谷津遺跡』(助千葉県文化財センター 1985

マドで遺物が出土し、カマド内に遺物が出土する割合がかなり高くなっている。各住居跡からの出土遺物は、1号住居：甕2点。3号住居：支脚・手づくね土器。6号住居：甕。7号住居：高杯・支脚。8号住居：甕・高杯。9号住居：杯・高杯。というように様々でそこには器種の一定性は認められない。個々の出土状況に注意してみると、1号住居の甕2点は、底面より若干浮いた位置から横位で出土し、支脚はカマドの外に置かれ、6号住居ではカマドの左袖の上部からというように、通常での甕の使用状態とは異なっていることがわかる。特に1号住居のように2個の甕を同時にカマドに掛けることが日頃あったとしても、支脚なしでは熱効率が悪くなるので支脚が取り出されているのは不自然であるし、火床の上に堆積土が存在して底面から浮いた状態なもの使用時の状態とはいえない。3号住居で検出した支脚は縦に2つに割れて出土し、その直下から手づくね土器が発見されている。出土レベルが火床の上の黒褐色土の上なので、支脚が火床に立てられて使用されていたものならば、一度取り出して黒褐色土の堆積の後に手づくね土器といっしょに置いたと考えられ、縦に割れているのも偶然の所産とは思えない。7号住居と8号住居の高杯は、杯部の口縁部を欠損している7号住居の例では火熱を受けていることが観察され、支脚への転用が考えられたが、8号住居の場合は被火熱の認められない完形品であった。9号住居の杯と高杯は重なっており、出土位置も右袖に接したところなので高杯の支脚への転用は否定され、杯との組み合わせに意図が感じられる。

古墳時代後期の竪穴住居跡59軒を検出した、印旛村駒込遺跡¹での例も興味もたれる。この遺跡では12軒の竪穴住居跡のカマドに遺物の出土が認められた。12軒のカマドの遺物の内訳をみると、高杯を出土したカマドが3基、杯を出土したもの2基、甕を出土した例1基、支脚のみが残っていたもの5基、立った支脚の上に破片となった甕があったもの1基となっている。支脚を除けば、杯と高杯の単独出土例が多く、複数の器種の組み合わせが少ないという特色がある。支脚はすべてカマドの主軸線上の火床中央部からやや煙道に寄った位置で、立ったまま検出されている。しかしそのなかの数例は、明らかに火床からかなり浮いたレベルに立っており、3点の高杯もまた支脚と同位置で逆位で出土している。高杯に火熱を受けた痕跡はないものの、これだけであつたら支脚への転用も考えられるが、杯の2点も全く同じ位置で発見されているので、遺物を置く位置が特定されていたと考えることができる。

以上のような類例から、004・010竪穴住居跡のカマド内の遺物は、桐生直彦氏のいうような「放置された」状態²とはとらえにくく、意識的に置いたと考えた方が説明しやすくなった。また故意と考えれば、それはカマドの廃棄に伴うカマド祭祀の一端³を示すことになり、今後は、地域差・年代差を検討し、カマド祭祀の実態を明確化していく作業が必要になるだろう。

-
1. 村山好文ほか「駒込遺跡の調査」『平賀』平賀遺跡群発掘調査会 1985
 2. 桐生直彦「カマドを有する住居址を中心とした遺物の出土状態について(素描)」『神奈川考古』第19号 神奈川考古同人会 1984
 3. 小林清隆「カマド内出土遺物の意味について」『研究連絡誌』第24号 (財)千葉県文化財センター 1989

2. 土坑・溝状遺構・礫集中地点 (第21図)

201土坑

調査区の北側に位置し、006竪穴住居跡に近接する。平面形は円形を呈し直径2.6mの規模を有する。検出面からの深さは9cm～28cmで全体に浅い。底面は平坦であり、特に踏みかためられた様子はない。立ち上がりはゆるやかで、底面の下端は明瞭でない。規模は006竪穴住居跡と大差なく、遺構の性格は断定できない。

遺物は006竪穴住居跡と同時期に比定できる甕が2点出土している。(出土遺物→46ページ)

202土坑 (図版10)

検出した遺構のなかで最も南に位置している。周辺に遺構の存在がなく単独で検出されている。長径190cm、短径95cmの長楕円形の平面形を呈し、検出面からの深さは70cmを測る。長軸の方向はN-26°-Wである。上端が崩落して掘り方が拡がり気味となっているところが北西壁に認められるが、約70°の傾斜で底面に向かう。底面は平坦で、小ピットは穿たれていない。覆土は10枚に分層可能で、3・4・9の3層は、しまりのある黒色土が主体である。遺物を全く含んでおらず明確な時期を決し得ないが、形態からすれば、縄文時代のいわゆる落し穴とするのが最も蓋然性が高い。

301溝状遺構

調査区の南半分を斜めに長く横切るように検出されている(第5図参照)。検出部の全長は100mで、さらに調査区外へと続くことは明らかである。幅は100cm～135cmで、深さ50cm前後を測る。断面形は不整なVの字を呈し、覆土の中間に固い層があり、二度にわたる使用がうかがえる。遺物は土師器の破片等で、明確な時期を比定できないが、017竪穴住居跡を切っている。

302溝状遺構 (図版10)

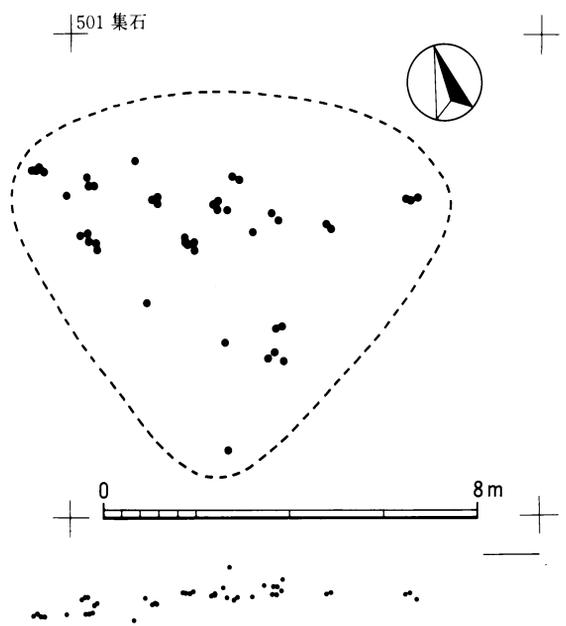
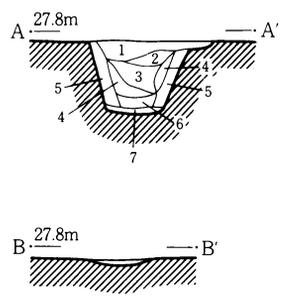
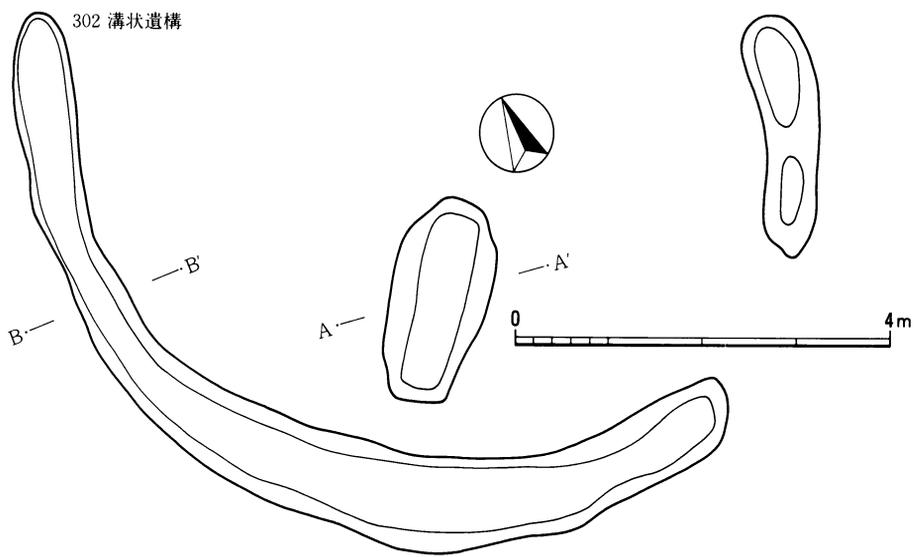
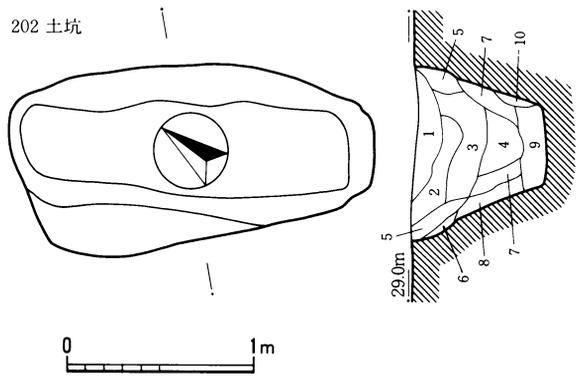
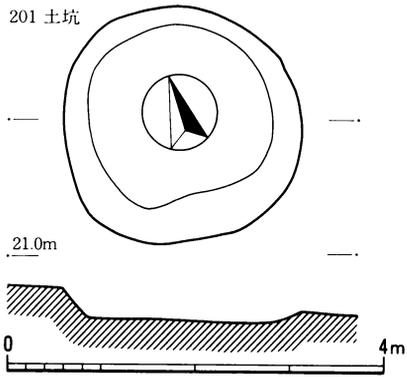
調査区の南側で検出された半円を描く溝と、その弧内に位置する土坑を含めて302としている。仮に、この溝が円形周溝状遺構のように一周するものならば、外径で9m前後の規模になると考えられる。溝は50cm～100cmの幅を有し、深さは15cm程度にとどまる。土坑は長軸長210cm、短軸長105cmで、その方向はN-46°-Eを指し、深さ78cmを測る。溝と土坑いずれからも出土遺物がなく、時期は不明といわざるを得ない。溝と土坑を一体とらえ墳墓とする見方も可能であるかもしれないが、断言はさけない。

303溝状遺構

016竪穴住居跡に接し、そこから西に10mの長さを確認した。幅50cm内外で、深さ10cmである。断面はU字形を呈し、しまりのない黒色土を覆土とする。時期的には新しいと思われる。

501礫集中地点

調査区の最も北に位置する。表土下の第II層を主に、東西8m、南北6mの範囲から44点の礫が発見された。集石というには散漫だが、縄文時代の人為的な遺構と考えたい。



21.0m

第21図 201・202土坑、302溝状遺構、501集石

Ⅲ 出土遺物

1. 土器 (第22図～第30図)

A 竪穴住居跡出土土器

001竪穴住居跡出土の土器 (第22図 1～9 図版13)

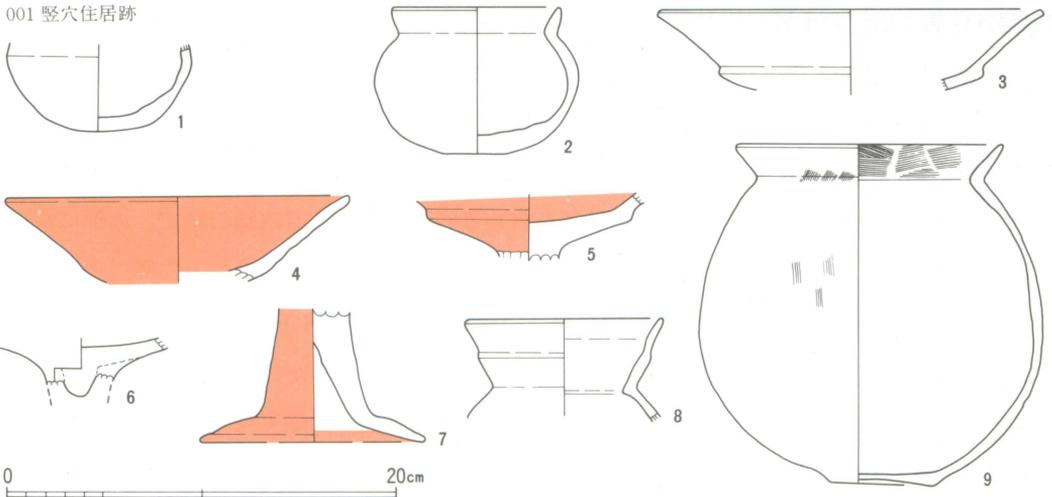
土師器の埴・高杯・甕がある。1・2・8が埴になる。1は丸底をもつもので、胴部下半のみ遺存する。外面は粗略なヘラ磨き調整で、内面は比較的丁寧ななでが施される。2は口縁部が短く外反する。一部欠損し、口径8.6cm、器高7.8cm、底径3.3cmである。8は開きながら立ち上がる口縁部の中位に段をつけるもので、1・2より大型となる。口縁部だけが残り、調整は横なでで、口径10.0cm。高杯(3～7)は、それぞれ杯部(3～5)、接合部(6)、脚部(7)の断片資料である。杯部は下端に段を有するもの(3・5)と、丸味を有しそのまま開くもの(4)が認められる。脚部(7)は、下端で大きく開き、底径は11.4cmである。なお4・5・7には赤彩が施されている。9は甕で胴部下半に最大径を設け、口縁部は「く」の字に折れて立ち上がる。胴部外面の調整はヘラ磨き、内面はヘラなで、いずれも完璧でない。口縁の外面は横なでとみられ、内面はハケ目痕がつく。口径13.6cm、器高16.9cm、底径5.1cm。

003竪穴住居跡出土の土器 (第22図10～18 図版13・14)

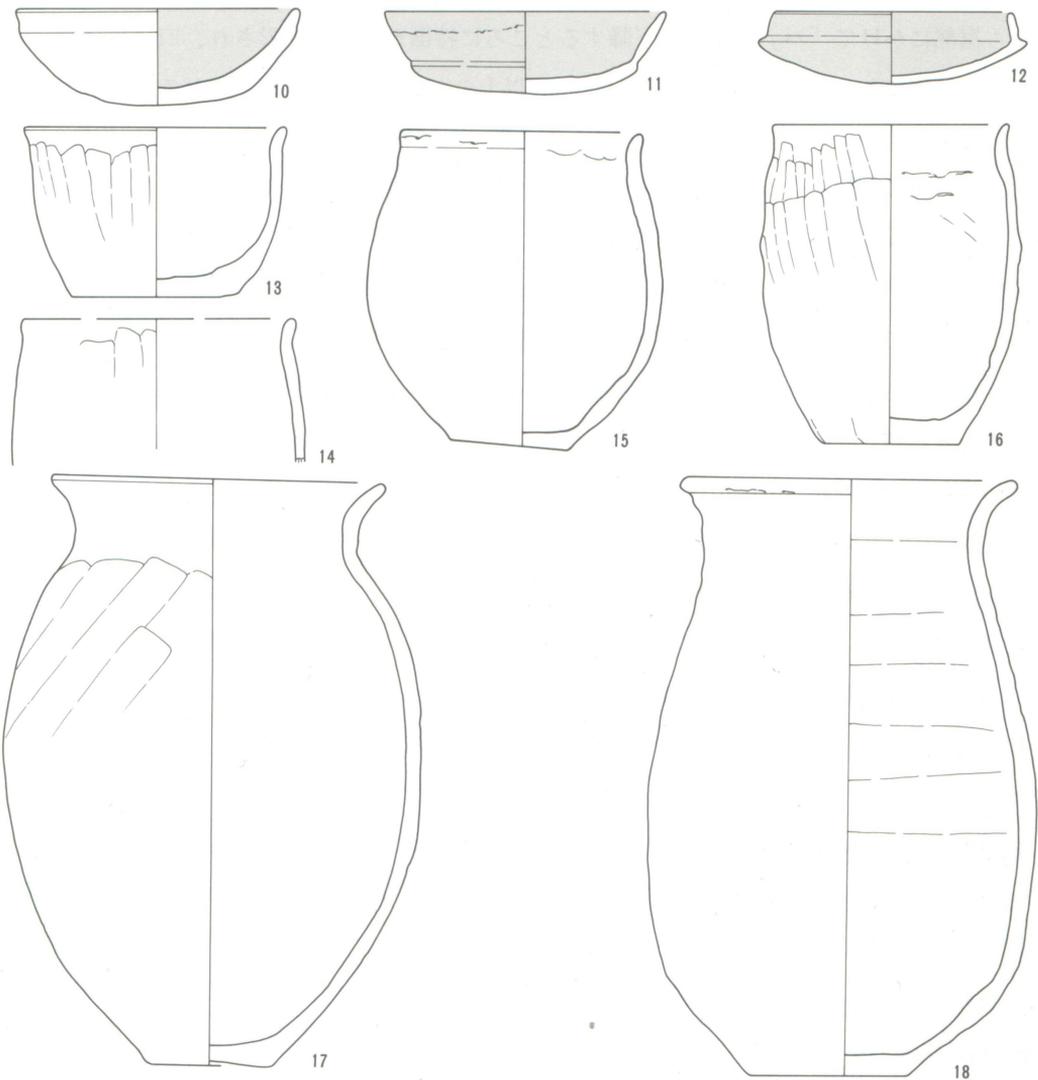
土師器の杯・鉢・小型甕・甕がある。10はいわゆる素縁口縁となるもので、体部と口縁部との境に稜をつくらない。全体に器厚が厚く重い感じを受ける。外面調整は、ヘラ削りの後に雑な磨きを施し、内面はヘラ磨きに黒色処理が加わる。口径14.2cm、器高4.9cm。11は外反口縁の杯で、口縁部高が体部高より高い。内外面ともに黒色処理が施されていたと思われるが、保存状態が悪く一部に遺るにすぎない。完形で、口径14.1cm、器高5.2cmである。12は体部と口縁部との境に明瞭な稜をもち、口縁部が内傾する。内外面とも黒色処理したと考えられるが、11と同様、保存状態が不良で所々にその痕跡がある。口径12.1cm、器高3.7cm。

13は鉢である。完形で口径13.3cm、器高8.7cm、底径7.6cmを測る。外面は大胆なヘラ削りの後も無調整で、内面はヘラ当て痕を残すヘラなでである。胎土はやや砂質で、色調は暗褐色を示す。14～16を小型甕とした。14・16は、胴部に張りをもたない寸胴を呈し、口縁部の外反も大変弱い。外面を縦方向のヘラ削りで調整し、内面はヘラなでで仕上げている。16は口径12.1cm、器高16.2cm、底径7.0cmになる。15は胴部に幾分張りをつけ口縁部は直立気味になる。外面はヘラ削りの後でなでているとみられ、16などよりは平滑になっている。口径12.3cm、器高16.3cm、底径6.0cm。17・18は甕である。17が胴部中位に最大径があるのに対し18は下半部に最大径を置いて、ずんぐりとした器形となっている。両者とも、外面はヘラ削りで調整してから、ヘラなでを施している。また口縁部はゆるやかに外反して、端部を丸く納める。17は、口径17.2cm、器高30.1cm、底径6.3cm。18は口径16.6cm、器高30.6cm、底径7.9cm。

001 竖穴住居跡



003 竖穴住居跡



第22图 001・003 竖穴住居跡出土土器

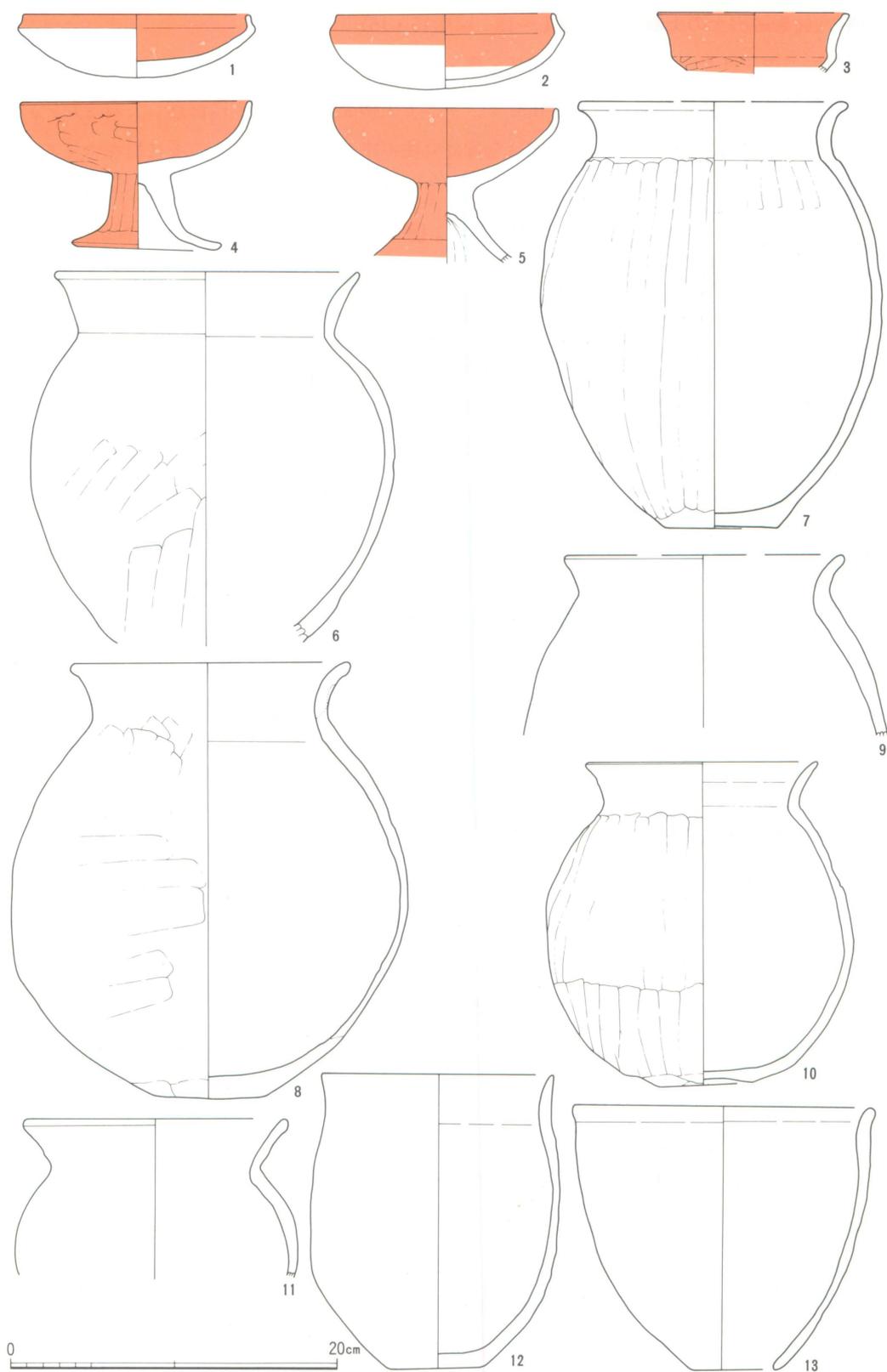
004竪穴住居跡出土の土器（第23図1～13 図版14・15）

土師器の杯・高杯・甕・小型甕・甑がある。数量的には甕類が多く出土し、杯は少ない。1～3は杯である。1は口縁部が稜部から短く内傾し、体部が扁平で浅めに作られている。口径は13.4cm、器高は3.9cmである。体部の外面は粗雑なヘラ磨きなので、粘土紐の接合痕が一部に残る。内面は全体に横なでで、外面口縁部を含め赤彩される。2も内傾口縁で、体部については丸形を呈する。内外面とも最終的な調整はなでと思われる。外面口縁部と内側に赤彩が施されるが、内面の底部はこれを行っていない。口径13.3cm、器高4.6cmで、焼成は良好である。3は稜部から口縁部が外反するものである。遺存部全面に赤彩が認められ、焼成も良い。

4・5は素縁口縁で丸底の杯部をもつ高杯である。4の脚柱部は短く立ち、裾部を水平方向に広げている。外面と杯部内面は赤彩であるが保存状況は不良である。杯部の口径は13.8cm、全体の器高9.4cm、裾部の径9.1cmを測る。5の杯部は口縁部が短く立って終わる点と、脚柱部から裾部にかけて「ハ」の字状に下降するところに特徴がある。赤彩され、口径13.5cm。

6～9は甕である。一応ここでは、器高20cm以上のものを甕、それ以下になるものを小型甕と呼ぶことにした。先に当住居跡から出土した土器では甕類が多いことは述べたが、器高30cm以上となる特に大型となる類は含んでいない。6・7は胴部上半に最大径がくる甕である。口縁部は、6が徐々に開いていくのに対し、7は一度直立気味に立って、それから外反して口唇部を肥厚して納めている。調整についてみると、6の胴部外面は、上半で斜め方向、下半で斜めから縦方向のヘラ削りで器肉を削ってから、磨きに近い様なヘラなでを丁寧に加えていることがわかる。内面はヘラなでで、口縁部は横なでが施される。7の胴部外面は縦方向のヘラ削りを主たる調整とし、その上に軽いなでを与えている。6の口径は18.5cmで底部を欠く。7は復元口径16.5cm、器高26.0cm、底径6.6cmを測る。8・9は胴部の中位に最大径を有している。8は球胴に近い胴部から口縁部へと移行し、ゆるやかに外反して口縁端部を丸く終わらせる。胴部の中程は横方向のヘラ削りの後にヘラなでであるが、他は斜め方向に削った後にヘラなでが施されている。内面は使用によるためか器表面が荒れて、所々剥がれ落ちている。口径16.7cm、器高21.3cm、底径6.7cmになる。

10～12を小型甕とした。10・11の胴部は球状となり最大径が中位にきている。10は完形で、全体にバランスのとれた器形を示す。胴部は、なでやヘラ削りを施した上にヘラ磨きして、先の調整痕を消している。口径14.0cm、器高19.6cm、底径5.7cm。11も10と同様な器形になると考えられるが遺存度が低い。12は寸胴で、口縁部が直立する。胴部の外面は上半で縦方向のヘラ削りで、下半では斜め方向に行っているが、その上にヘラなでを施しているようである。内面には粘土紐の接合痕が認められ、調整は丁寧でない。口径14.1cm、器高18.0cm、底径5.5cm。13は砲弾形を呈する甑である。最終調整は内外面ともヘラなでとみられるが、保存状態が良くない。外面の胴部に黒斑がつく。口径19.0cm、器高16.0cm、孔径4.9cm。



第23图 004 竖穴住居跡出土土器

005竪穴住居跡出土の土器 (第24図1～13 図版15・16)

須恵器の蓋・杯身、土師器の杯・高杯・甕・甑がある。器種からみるとセットを構成していると思われるが、完形品が一点も存在せず、すべて欠損品であることに留意しておきたい。

1・2は須恵器の蓋である。天井部は全体に丸味を帯びて、口縁部との境に稜をつくらず、なだらかなカーブを描いて移行している。ただ2は天井部と口縁部との境に弱い凹線が認められる。天井部の回転ヘラ削りの範囲は2分の1弱である。1の復元口径は12.9cm、器高3.0cm。3の杯は復元器高4.4cmとやや深いつくりで、口縁部は短く内傾して端部を丸く仕上げる。体部の3分の1の範囲に回転ヘラ削りが施される。色調は青灰色で1とよく似る。

4・5は土師器の杯で、外内面とも黒色処理が行われている。両者とも体部と口縁部との境に稜を有するが、4の口縁部は直立し、5は外傾する。

6～8は高杯である。6の裾部は脚柱部の途中から直線的に外に開いて安定している。裾部は全体に横なでが施される。7は脚柱部で直線的に下降する部分は短い。8は裾部の破片。

9～12は甕である。12は底部のみなので判断できないが、他は球胴形を呈するもので、最大径が胴部の中位にきている。9は大きく膨らんだ胴部から頸部で絞って、口縁部を僅かに直立させてから外反している。外面は斜め方向のヘラ削りを全面に施した後に、部分的にヘラなでを行っている。復元口径は16.2cmになる。10は絞られた頸部から口縁部が直線的に外傾する。復元口径は16.8cmである。外面は丁寧にヘラなでされるが、内面は雑で、成形も手抜きだったのか接合痕がはっきり残る。11は9・10より胴部が細くなる。復元口径は13.6cm。胴部を調整した際のヘラ当て痕が頸部に鮮明についている。13は甑の口縁部と考えられる。

006竪穴住居跡出土の土器 (第24図14～18 図版16)

土師器の罎・高杯・甕がある。14・15は小型丸底罎である。14は小さな丸底の体部から弱く境を設け、口縁部は大きく外に開きながら、かつ内彎気味に立ち上がる。器厚は各部とも4mm前後で薄くつくられる。外面調整は、底部がヘラ削り後にヘラなで、他所はヘラなでを実施している。内面は全体はヘラなでを行って仕上げている。口径14.0cm、器高5.6cm。色調は明るい橙褐色を示す。15は径1.9cmという小さな底面をつくり、その中央部は凹状を呈する。体部は丸味をもち、頸部から口縁部は長く立ち上がる。外面はヘラなでによって磨きに近い成果をあげ、内面は体部がヘラなで、口縁部がハケ目をつける調整のうえにヘラなでを施している。口径10.3cm、器高1.9cm。色調は茶褐色を示す部分が多い。

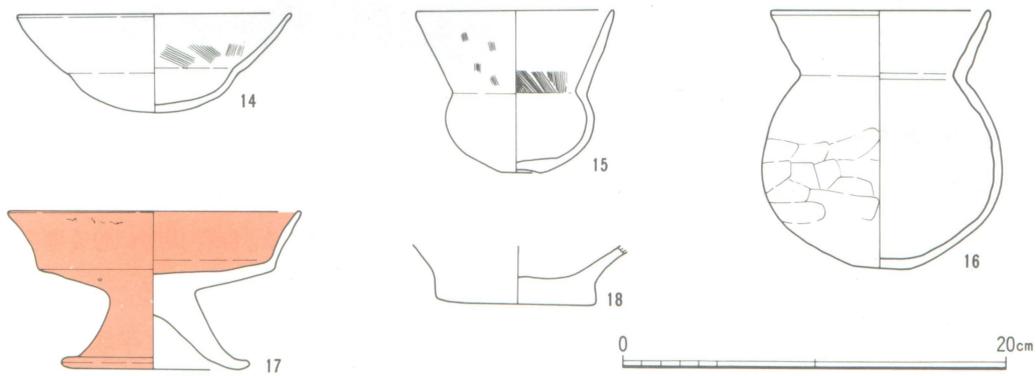
16は罎である。胴部は球形を呈するが、最大径は中位からやや下に位置する。口縁部は「く」の字形に外傾する。胴部外面調整は横方向のヘラ削りで、内面はヘラなでが施される。口径11.2cm、器高13.3cm、底径2.9cm。色調は茶褐色を示し、胎土に砂を含む。

17は内外面に赤彩が施されている高杯である。杯部は箱形で、脚部は接合部から「ハ」の字形に下降する。口径14.9cm、器高8.2cm、底径10.2cm。18は甕の底部と思われる。

005 竖穴住居跡



006 竖穴住居跡



第24图 005・006 竖穴住居跡出土土器

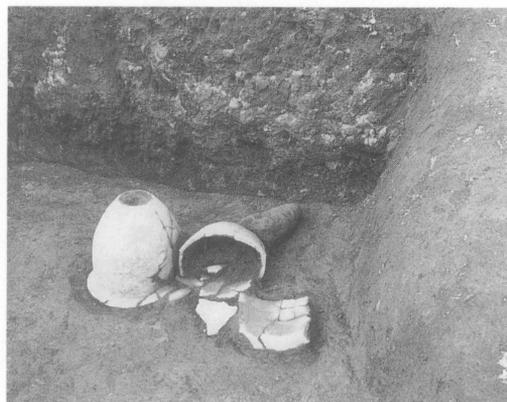
008B 竪穴住居跡出土の土器 (第26図1～9 図版16・17)

土師器の杯・高杯・甕・甑がある。甕は数が多く、しかも完形であるもの(4・7)を出土しているのに対し、杯は欠損品が出土したにとどまっている。

1・2は体部と口縁部との境に弱い稜を設け丸底となる杯である。口縁部は1が直立し、2は僅かに外反している。2点とも内面は全体に赤彩で、外面は1が口縁部のみで、2が体部に及んで赤彩が施される。1の復元口径は13.4cmである。3は高杯の脚柱部である。脚長8.3cmで円柱形を呈する。器表面の保存状態が悪く、赤彩されていたか否か判然としない。

4～8は胴部の略中位に最大径がくる甕である。5・6の全体は不明であるが、胴部が膨らんで球状となるもの(4・6)と、やや長めの長胴形を呈する(7・8)が存在する。4は、やや胴部下半に重心がきてどっしりとした形となる。頸部の絞りは弱く、口縁部は短く外反する。胴部外面の調整は、上半部で斜め方向、中位で部分的に横方向、下半部で縦方向のヘラ削りである。また内面は丁寧なヘラなでが施されている。色調は外内面とも黒色である。口径17.4cm、器高25.5cm、底径8.6cm。6については4の胴部下半と類似しており、同様な形態であった可能性が高い。7はやや長胴傾向を示すもので、胴部外面のヘラ削り調整が口唇部から行われているところに特徴がある。内面をみると胴部がヘラなでで、口縁部が横なでであるが、器面の状態、特に口縁部の保存状態が不良である。口径は15.7cm、器高27.0cm、底径6.6cm。胎土に砂が多く混和され色調は暗褐色である。8は7よりも明確に長胴を呈している。頸部の絞りは弱く、口縁部は小さく外反して端部は若干肥厚して丸く終わる。胴部外面は、ヘラ削り調整され、方向は下半部で縦方向、中位で横方向、上半部で斜め方向と変化している。内面は良好なヘラなでで、口縁部は横なでが施される。口径16.7cm、器高28.9cm、底径6.0cm。

9は胴部の中位に張りつけて、口縁部が外反する甑である。胴部外面は斜め方向のヘラ削りで、内面はヘラなでであり、調整は丁寧である。口径23.5cm、器高23.1cm、孔径8.0cm。胴部外面の2か所に黒斑がある。



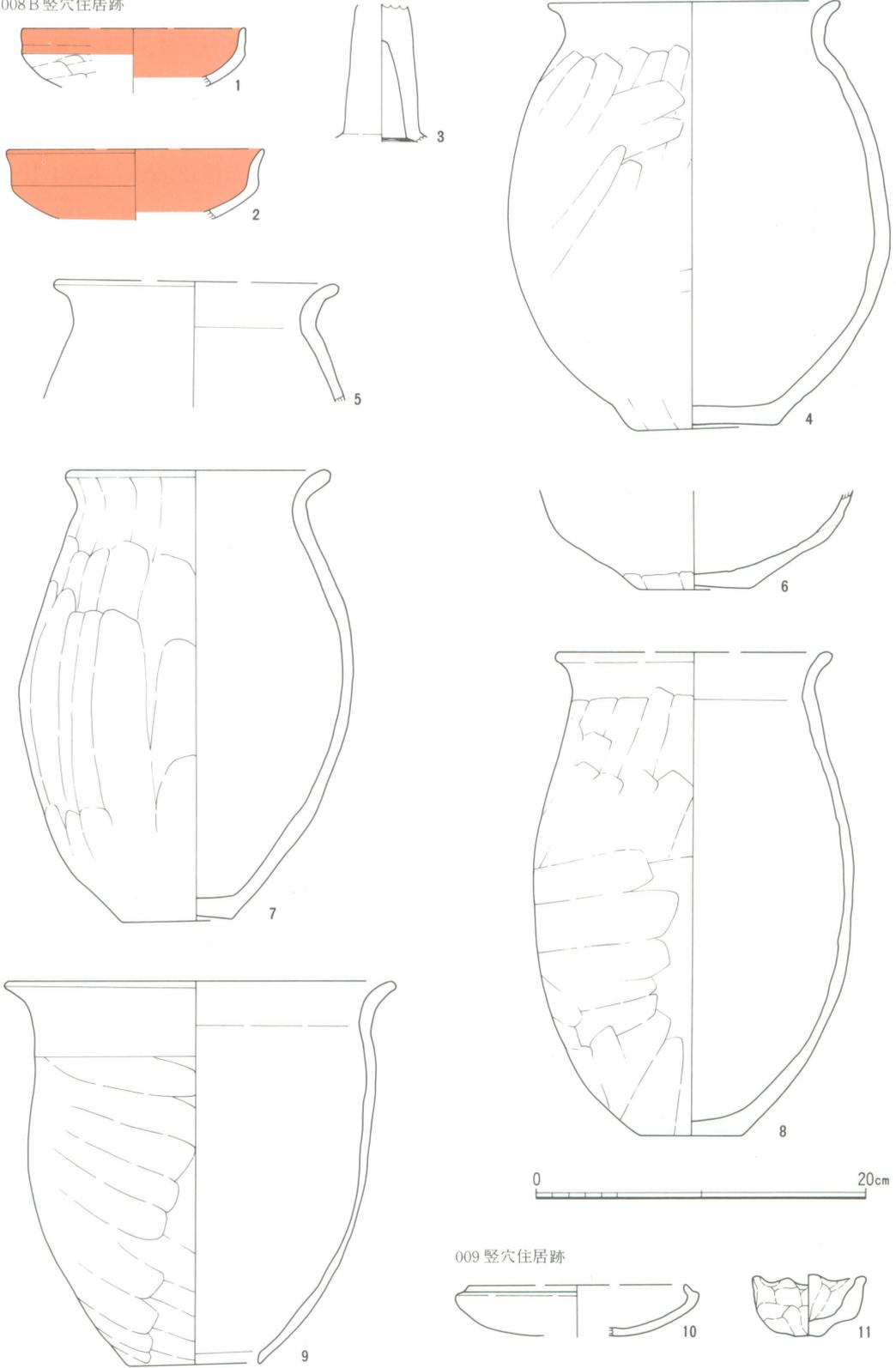
第25図 008B竪穴住居跡遺物出土状況

009竪穴住居跡出土の土器 (第26図10・11)

土師器の杯・手づくねが各1点ずつある。図示不可能な破片が少量で、遺物総量は僅かに1045gにすぎない。10の杯は体部は扁平で稜を設け、口縁部が短く内傾する。保存状態が悪く器表面が擦れたようになっている。復元口径13.0cm、器高2.9cm。色調は明褐色である。

11は手づくね成形で、まったく調整をせずに焼成している。一応碗形のように半球状につくられているが、外内面とも指頭でつけた凹凸が著しく残存する。

008B 竖穴住居跡



009 竖穴住居跡

第26图 008B・009 竖穴住居跡出土土器

010竪穴住居跡出土の土器 (第27図 1～13 図版17・18)

土師器の杯・高杯・椀・甕・壺がある。土師器の杯(1～8)は大きく分けて、素縁口縁(1・2)と、体部と口縁部との境に稜を設けるもの(3～8)がある。素縁口縁のうち1は、底部が意識されているかと思う程に体部下半が扁平で、上半から内彎して口縁部に至る。外面調整はヘラ削りの後ヘラなどで、内面はヘラなどが行われ、赤彩される。口径13.6cm、器高4.1cm。2も体部のつくりは1と近く、口縁部がそのまま開くように終わっている点に違いが認められる。口径15.6cm、器高4.6cm。内外面赤彩であるが、器表面の保存状態は大変悪い。3は丸味を帯びる体部から口縁部が短く外反する。内外面ともヘラなどでされ、赤彩が施される。口径13.3cm、器高5.1cm。4・5は口縁部が比較的長く外傾するものである。口縁上端部は、4が尖り気味に、そして5が丸く納められる。4は口径14.8cm、器高5.0cm。5の口径は14.8cm、器高は5.5cm。両者とも外内面赤彩である。6・7は丸形の体部で口縁部が内傾するものである。6は口径13.8cm、器高5.7cmで、7は口径14.6cm、器高3.2cmになる。8は、範囲が不明瞭であるものの平底をもっている。体部は内彎し、口縁部が内傾する。口径11.8cm、器高4.9cm。器表面の保存は良くないが、外内面に赤彩の痕跡がある。

9・10は高杯で外内面が赤彩されている。9は完形で、腕形の杯部の口径が12.8cm、器高9.3cm、底径9.4cmとなり、脚柱部分は短く、裾部は水平方向へと広がる。10の裾端部は僅かにめくれ上がって終わり、径は9.2cmである。

11は杯より深めで、杯とは区別されるものと考え椀とした。器表面が磨滅しているが、成形、調整とも丁寧であったとみられる。外内面とも底部を除き、赤彩が施されている。口径16.2cm、器高7.3cmである。

12は下位に位置する最大径と口径との差が小さい甕である。胴部外面のヘラ削りは縦方向に一定し、内面のヘラなども丁寧である。口径19.2cm、器高23.7cm、底径8.0cm。

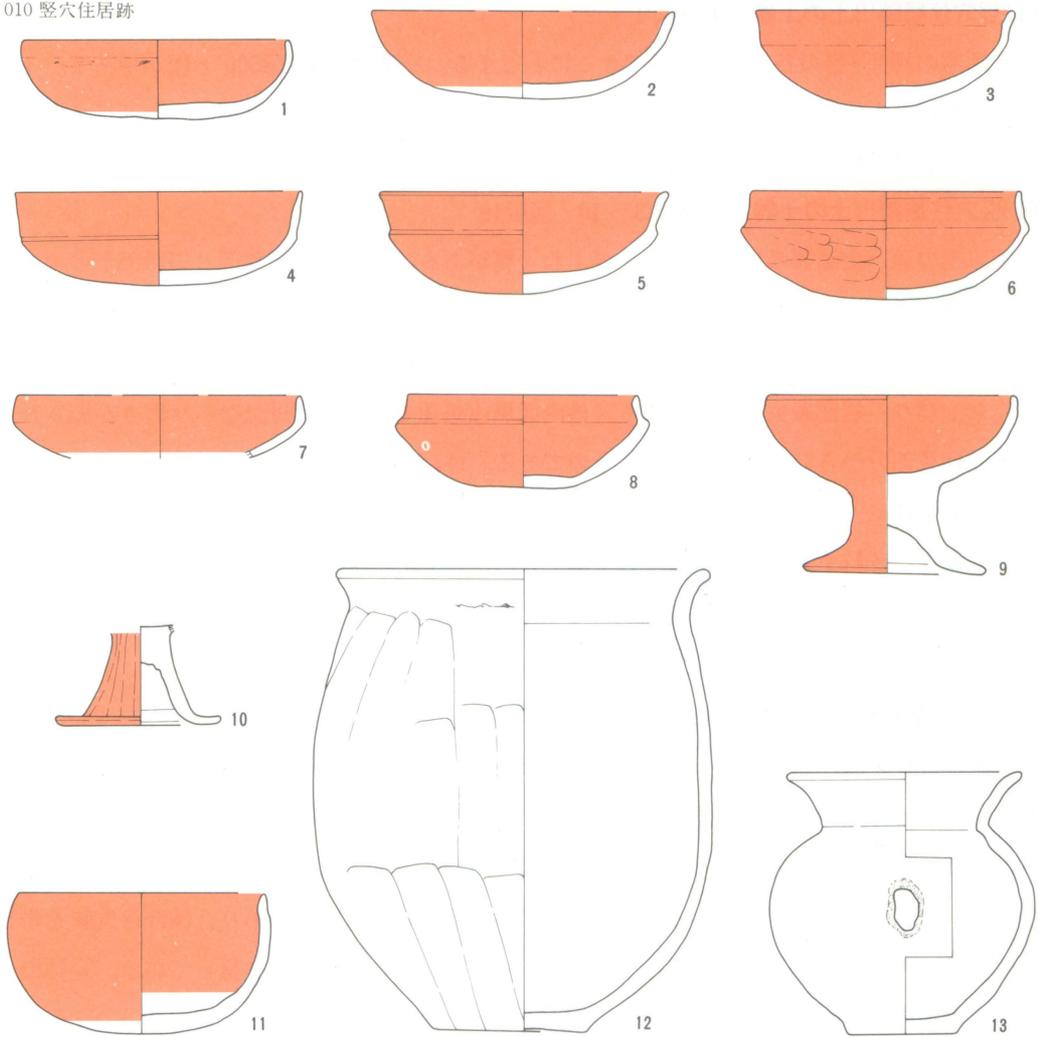
13は壺であろう。肩部をつくるかのように胴上半部に張りを有し、口縁部は長く外傾する。胴部最大径の位置に、焼成後の穿孔(23.7mm×16.4mm)があるが、その目的は明確でない。口径12.0cm、器高13.5cm、底径5.4cm。色調は暗褐色である。

011竪穴住居跡出土の土器 (第27図14～17 図版18・19)

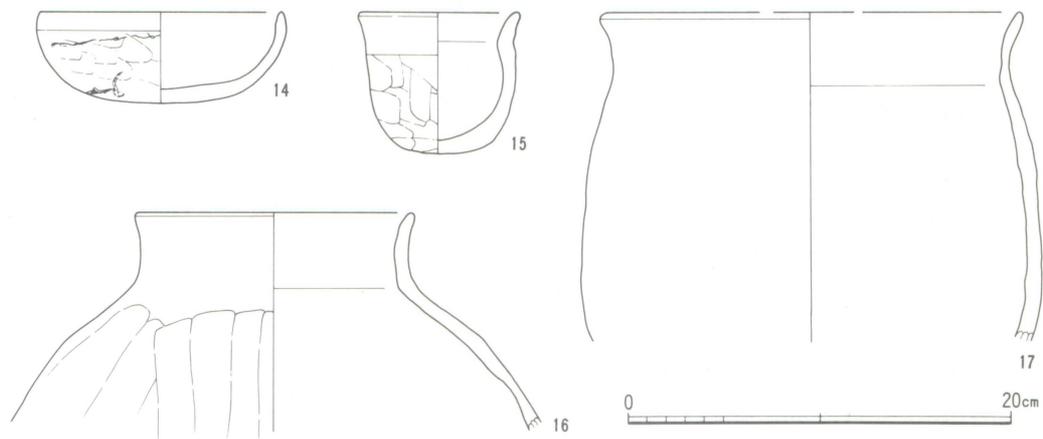
土師器の杯・小型鉢・甕がある。14は腕形の素縁口縁の杯で、内外面に赤彩が認められる。外面調整はヘラなどを全面にかけているにもかかわらず、粘土紐の接合痕が残っているので、成形が手抜きであったと思われる。口径12.4cm、器高4.8cm。15を小型の鉢とした。底部は丸味があるので安定せず、口縁部は胴部より外へ外反する。口径8.4cm、器高7.3cm。

16・17は甕である。16の胴部は球状を呈すると考えられるが、上半部しか遺存していない。口縁部は絞られた頸部から直立し、上端部で僅かに外反する。口径14.1cm。17は口縁部径が大きく21.9cmを測る。プロポーションは010竪穴住居跡12の甕に近いであろう。

010 竖穴住居跡



011 竖穴住居跡



第27图 010・011 竖穴住居跡出土土器

012 竪穴住居跡出土の土器 (第28図1・2)

土師器の高杯・甕の各1点が図示できるとどまる。総遺物重量は850gと僅かである。1は球状の胴部をもつ甕で、口縁部がゆるやかに外反する。胴部外面はヘラ削り、内面はヘラなどでされる。2は高杯の脚柱部で、遺存部の痕跡から杯内面は黒色処理されていたとみられる。

013 竪穴住居跡出土の土器 (第28図3～10 図版19)

須恵器の蓋、土師器の杯・高杯・手づくね・甕がある。3の蓋は天井部と口縁部との境に凸線状の稜があり、口縁部が短く下降し、端部は尖り気味になる。天井部の3分の1の範囲に回転ヘラ削りが施される。口径12.6cm、器高4.2cm。4は扁平な体部から口縁部は幾分内彎気味に立ち上がり、端部を尖らせて納める。外内面黒色処理で、内面は丹念なヘラ磨きが施される。5・6は稜部分から口縁部が内傾するものである。体部の作りは5が浅く、6は丸味をもつ。5は内面全体に、そして6は外内面のすべてにヘラ磨きがおよぶ。7は高杯の脚柱部で、短く立って裾部へ移行する。8は手づくね土器で、口径7.5cm、器高2.3cm、底面6.6cm。

9は球形の胴部から頸部で一度立ち上がり、口縁部が大きく外反する甕である。口径20.0cm。10も甕で底部となるが9とは別個体である。

014 竪穴住居跡出土の土器 (第28図11～20 図版19・20)

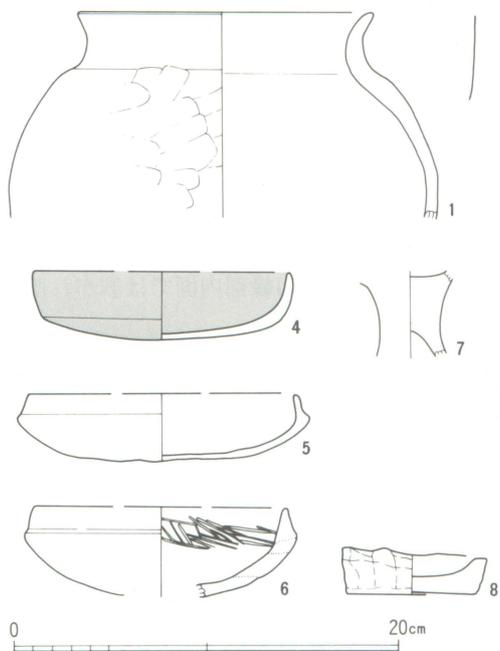
土師器の杯・高杯・椀・甕・甑がある。杯は丸底で明瞭な稜をもたないもの(11・12)と、稜をつくるもの(12～15)がある。また、11・13の内外面には赤彩が施される。さて、個々に特徴となる点について述べると、11の口縁上端部が内側にまき込まれるように終わっている等、それぞれにみいだすことができる。12は内面の口縁部に斜放射暗文があり、体部は丸味を帯びてすわりが大変不安定となっている。色調は赤彩していないが橙褐色を呈している。全体の4分の1が遺存し、そこから復元すると、口径11.4cm、器高4.8cmになる。13も3分の1程の遺存で、口径は15.4cm前後になり、器高は4.5cmに復元される。内面の調整は全体に横なである。14の杯は口縁部の高さと体部高がほぼ等しく、口縁部が直立する。須恵器の蓋をよく模倣しており、口縁端部に鋭さがあり、その内側には稜がめぐる。成形・調整とも丁寧で、内面は全面にヘラなでを行う。口径12.7cm、器高5.5cm。15も須恵器蓋の模倣であるが、口縁部のつくりは14と比較すると雑である。16の高杯は裾の広がり部分をすべて打ち割っている。赤彩は内面全体に施したと考えられるが、底部で器面の剝落が目立つ。

17は椀と考えたが、杯の部類に入るのであろうか。内外面ともヘラなでされ、赤彩が施される。口径13.0cm、器高6.5cm。

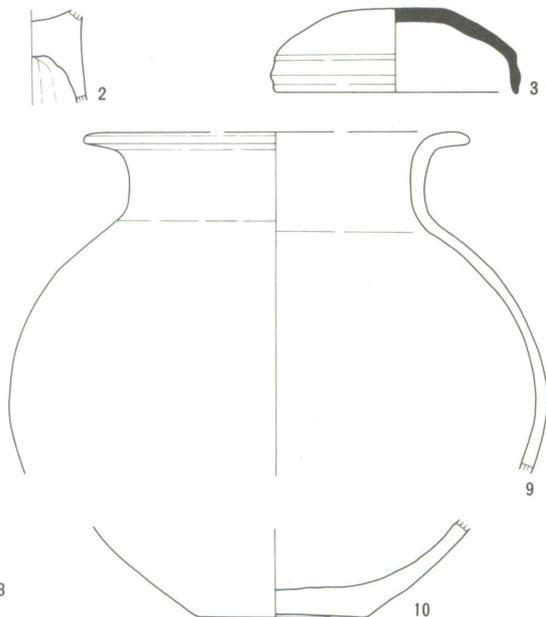
18・19は甕で、口縁部は外傾(18)とゆるく外反するもの(19)になる。胴部の形態は18が球胴形で、19が長胴を呈すると考えられる。口径は18が14.7cm、19が17.2cmである。

20の甑は口径27.9cm、器高27.8cmの大型品だが、これと組み合うような甕は出土していない。胴部調整は、外内面ともヘラ削りが認められるが、内面はヘラ磨きで仕上げている。

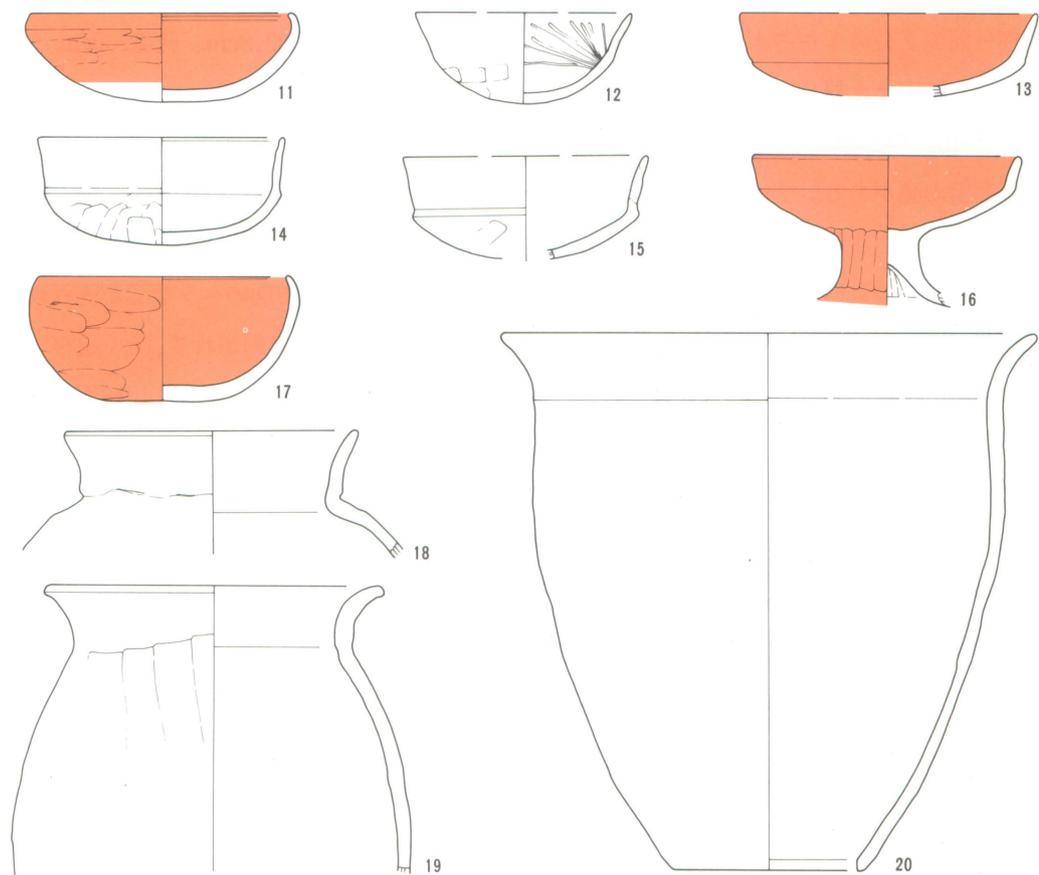
012 竖穴住居跡



013 竖穴住居跡



014 竖穴住居跡



第28图 012·013·014 竖穴住居跡出土土器

015 竪穴住居跡出土の土器 (第29図 1～6 図版20)

土師器の杯・小型甕・甕・甑がある。1は調整の違いによって体部と口縁部が区別され、それほど明瞭な稜をもたない。外面の体部はへら削りの後になでて、口縁部から内面は横なでされ、その範囲に赤彩が行われる。口径13.2cm、器高4.5cm。2は須恵器の蓋を模倣し、口縁端部の内側に弱い段をつけている。胎土に小石が混ざり、赤彩したかのようなレンガ色に焼かれている。口径11.7cm、器高5.0cm。3は丸底の椀形のもので、口縁部が外反して開く。復元口径13.1cm、器高5.5cm。外面の底部を除き赤彩が施されるものの、口縁部内面では剝がれ落ちてしまっている。

4は精選されたとみられる胎土でつくられた小型甕である。球状を呈する胴部は、均整のとれた形に成形され、中位を横方向を主とするへらなでによって調整する。内面は丁寧なへらなで仕上げられたと思われるが、下半部の器壁の剝落が著しい。口径19.2cm、器高17.5cm、底径5.3cm。色調は明橙褐色である。5は胴部の中位がほんの僅か絞られているために、最大径が若干肩部寄りにくる甕で、口縁部は外反し、端部を丸く納める。胴部の器面調整は、最終的にはへらなでである。口径16.6cm、器高24.3cm、底径7.6cm。底面に木葉痕が残る。

6の甑は、胴部が直線的に外傾し、頸部で一度弱くくびれ、口縁部がゆるやかに外反する。胴部外面の2分の1を占める範囲に黒斑がある。口径22.7cm、器高22.8cm、孔径7.0cm。

B 土坑出土土器

201土坑出土の土器 (第29図 7, 8 図版20)

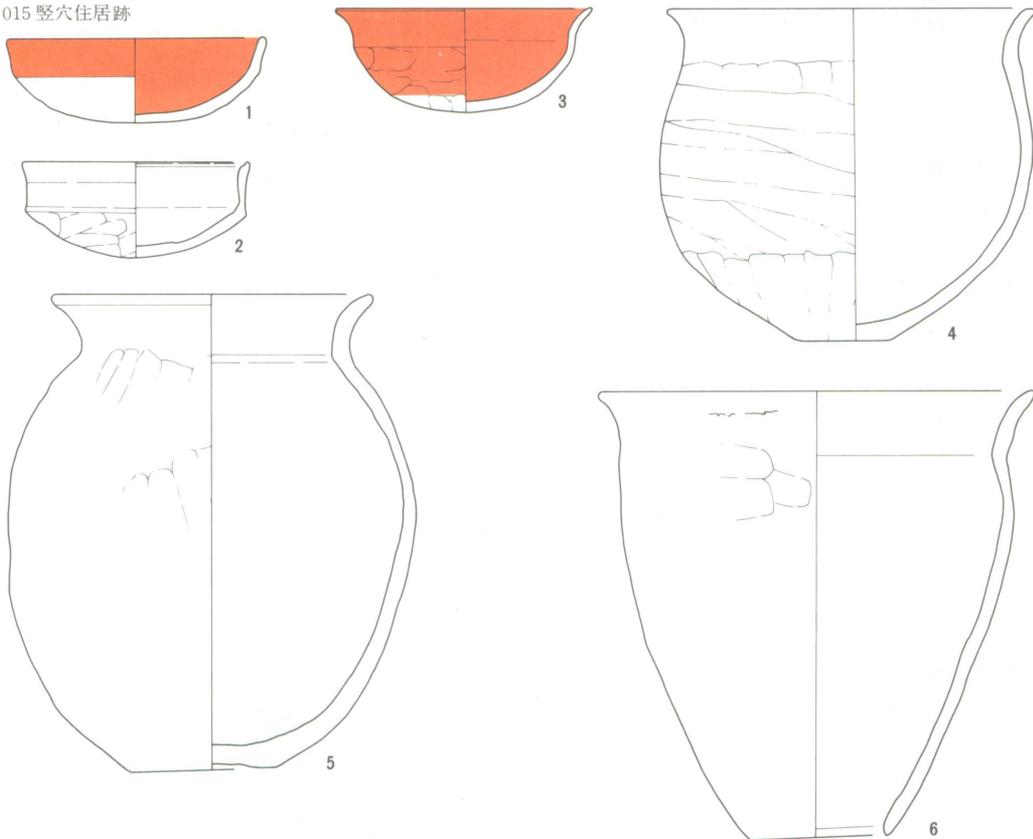
土師器の甕がある。7は底部と口縁部の2分の1を欠損する。球胴で胴部上半部に最大径をおく。胴部外面にはハケ目がつけられているが、器壁が荒れているため鮮明でないところもある。また遺存の良い部分では煤状の付着物が認められる。内面は横方向のへらなでが施される。口径15.8cm。器厚は5mm前後で薄い。8の口縁部は胴部との接合部で剝がれて、全く遺存していない。その接合面にもハケ目が残るので、成形・整形は胴部で一工程、そして口縁部でもう一工程あったと考えられる。胴部高は16.6cm、底径4.8cm。

C グリッド出土土器

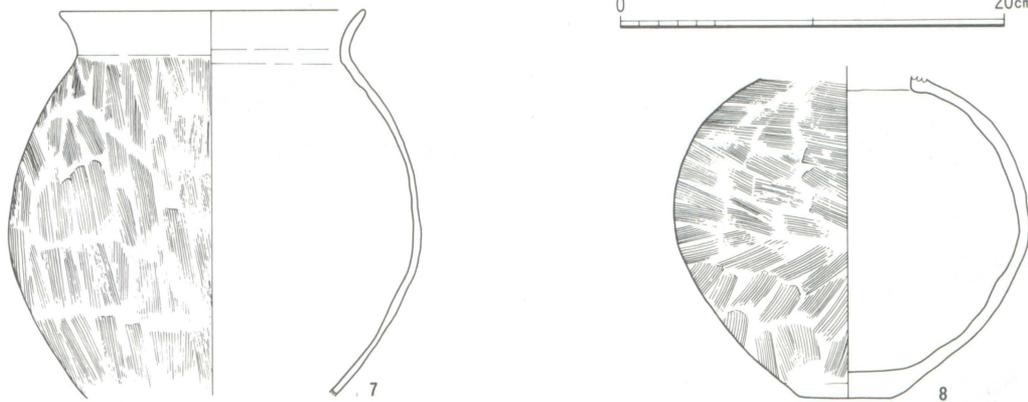
確認調査中、および遺構精査中に出土し、遺構に伴う可能性の低い土器をグリッド出土として扱う。土師器・縄文土器があるが、数量的には僅かである。

a 土師器 (第29図 9～14) 古墳時代の土師器 (9～11・13・14) と、奈良・平安時代の土師器の杯(12)がある。9は底部が尖り気味になっている椀である。完形で口径13.4cm、器高6.1cm。10・11は丸底の杯で、10は素縁口縁、11が有稜外傾口縁となる。11の口径は14.8cm、器高4.3cm。13・14は埴である。小さな丸底から長く外傾して開く口縁部をもつ13と、球胴と、僅かに上端で内彎する口縁部をつくる14の2点が図示可能であった。12はロクロ調整で仕上げられた杯で、底部は回転糸切りで周辺をへら削りしている。

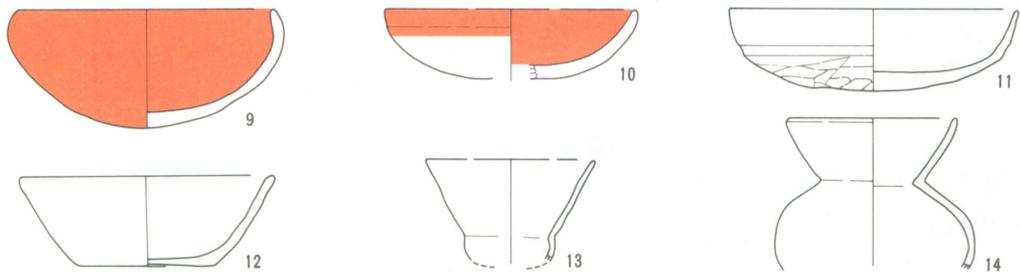
015 竪穴住居跡



201 土坑



グリッド



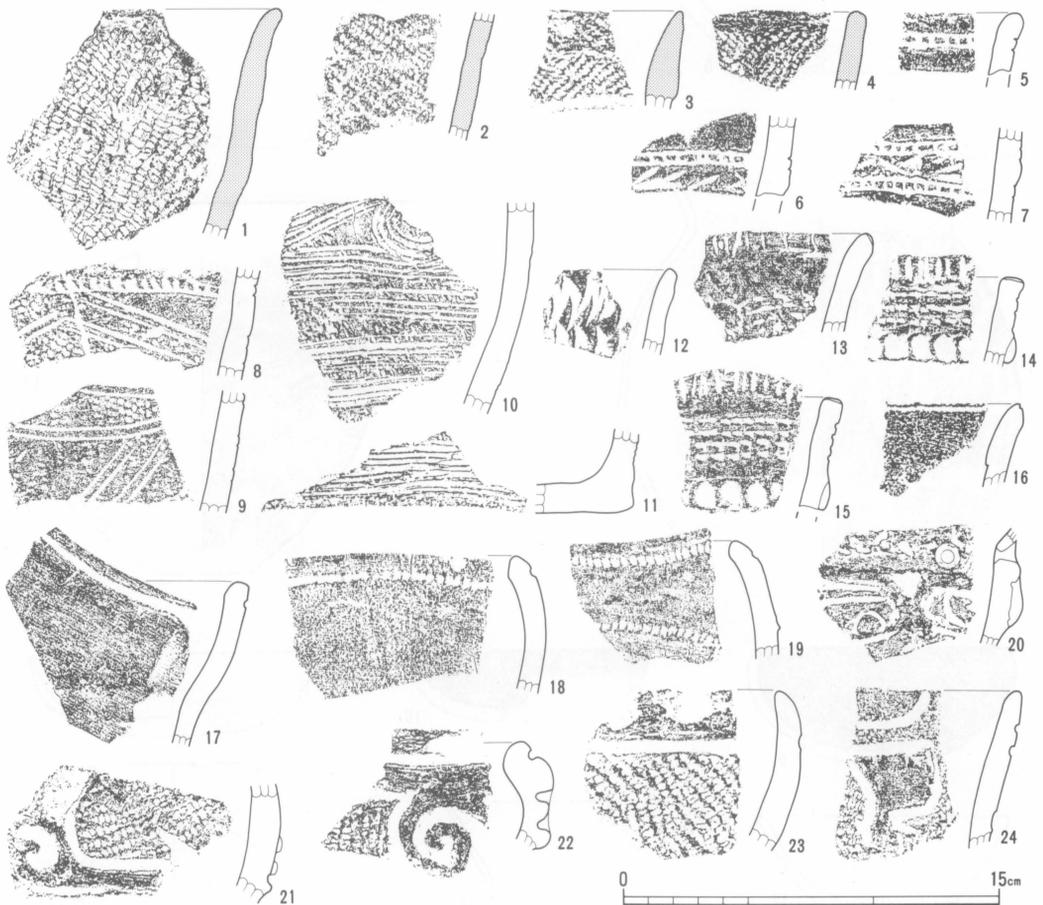
第29図 015 竪穴住居跡・201 土坑・グリッド出土土器

b 縄文土器 (第30図) 501礫集中地点の周辺、堅穴住居跡の覆土中、あるいは表土中から少量の縄文土器が出土している。出土点数は174点で、このうち71点が調査区の北側の礫集中地点周辺で検出されたものである。これらを以下の3群に大別して説明したい。

第1群土器(1~15)：前期の土器である。1~4は、胎土に繊維を含むもので、前期前半の黒浜式に比定される。文様は縄文以外に施文されていない。5~11は前期後半の諸磯式である。5~7には爪形文が施文され、6・7は爪形文間の低い隆帯上に刻みがつく。8~11は縄文を地文とし、平行沈線文が加えられたものである。12~15は浮島式から興津式に対比されよう。12は波状貝殻文が施された口縁部で、13~15は口唇部に刻み目が入る。

第2群土器(16~23)：中期の土器である。16は胎土に雲母を含み暗褐色を呈し、口唇部に一条の有節沈線文が認められる。17は沈線文が施文された波状口縁である。18・19は角押文が、20には杵状の隆起線文が施される。以上は阿玉台式の古い部分になる。21~23は中期後半の加曾利E式で、21・22の口縁部には隆帯による渦巻き文があり、23は一条の沈線文により口縁部に無文帯を設定している。23は中期末に比定される。

第3群土器(24)：後期の土器である。沈線文の区画内に縄文を充填する称名寺式である。



第30図 グリッド出土縄文土器

2. 石 器

A 先土器時代石器集中地点の石器 (第32図～第34図 図版21・22)

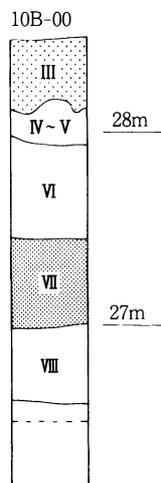
調査区内全域を対象として行った試掘調査の結果、2か所で石器が発見され、拡張したところ1か所は単独の出土であったが、もう1か所についてはまとまりをもって出土することが判明した。ここでは調査区の南、11B-66グリッドを主に検出された401ブロックについて説明することとし、単独出土はグリッド出土で扱うことにする。

はじめに種ヶ谷津遺跡の層位についてふれておかなければならないだろう。調査が実施された年が昭和56年度ということから、層序区分は佐倉市星ヶ谷津遺跡¹を基本に行われている。調査時点での区分は、III層がいわゆるソフトロームで、その下層の軟化の著しい硬質ロームから第1黒色帯相当のロームをIV～V層と呼んで、始良 Tn 火山灰を含む層をVI層としている。第2黒色帯がVII層の1枚で、VIII層が立川ローム層の最下層である。以上のような区分であるが、現時点では、黒色帯が不明瞭という地域性を考慮に入れても、第2黒色帯よりも厚くなるVI層の50cmという層厚は、あまりにも厚いのではないかと思われる。第1黒色帯相当の下部、および第2黒色帯の上層部近辺が曖昧だったと考えられるが、調査時の所見にしたがって記述を進めたい。

石器は11B-66グリッドを中心に、長径12m、短径8mの範囲に分布が認められる。合計点数40点を数え、33点については4m×3mの範囲内で検出され、他はその周辺にまばらに散っている。出土層位は、IV～V層の下位からVII層に及び垂直分布のレベル差は、最大で90cmとなっているが、VI層上部に中心分布がある。

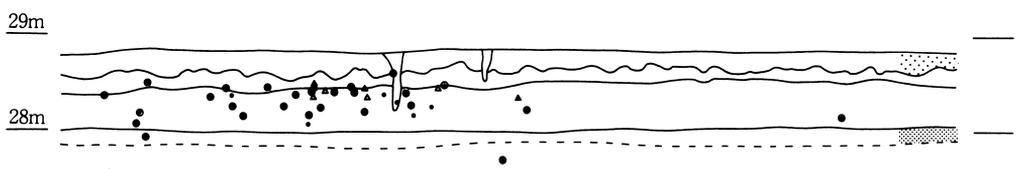
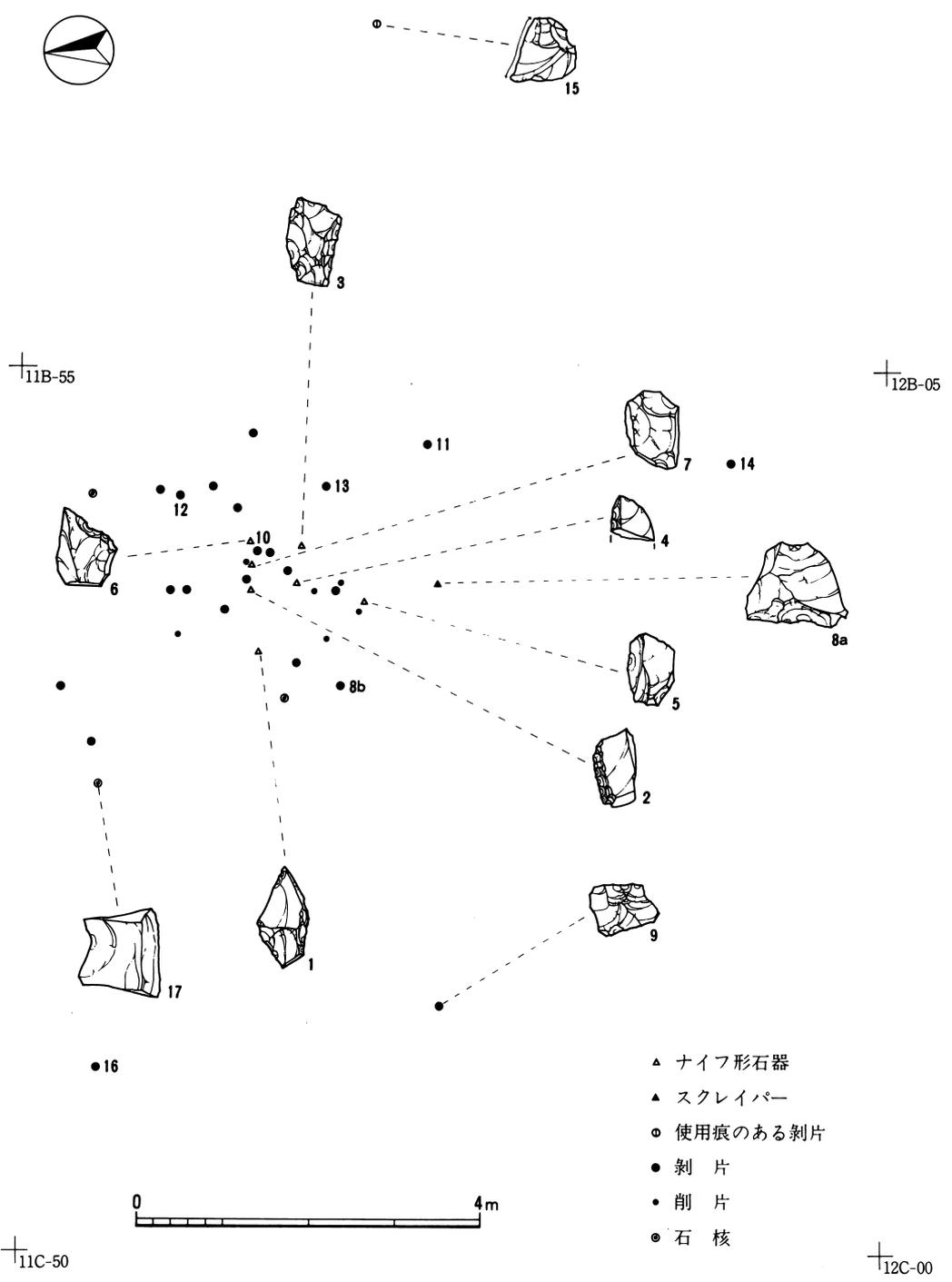
検出された40点の石器組成は、ナイフ形石器7点、スクレイパー1点、剝片・削片29点、石核3点である。第34図1～7をナイフ形石器とした。いずれも横長剝片を素材としており、切出形石器と呼ぶ方が適切であるかもしれないものを含んでいる。1～3は打面を残しているもので、1は2側縁加工、2は左側縁のみに加工が認められ、3は右側縁にブランティングが施され、刃部に使用痕がつく。石材は1・2が珪化岩、3が黒曜石である。4は欠損品であるが左側にブランティングが施されていることがわかる。5～7は側縁、あるいは基部に加工が施されているもので、その調整は1～4と比較し粗い。4～7の石材は細粒凝灰岩である。8aは簡単な調整を加えたスクレイパーであろう。8b～16は剝片で、15の黒曜石製剝片の左側縁には使用痕が認められる。17は石核になるろう。

本ブロックを構成する石材は、細粒凝灰岩、珪化岩、メノウ、黒曜石、安山岩の5種類である。ナイフ形石器は細粒凝灰岩4、珪化岩2、黒曜石1で分布位置の中心部で出土しているが、それらを石材とする石核は検出されていない。



第31図 層序

1. 大原正義ほか 『佐倉市星ヶ谷津遺跡』 (財)千葉県文化財センター 1978



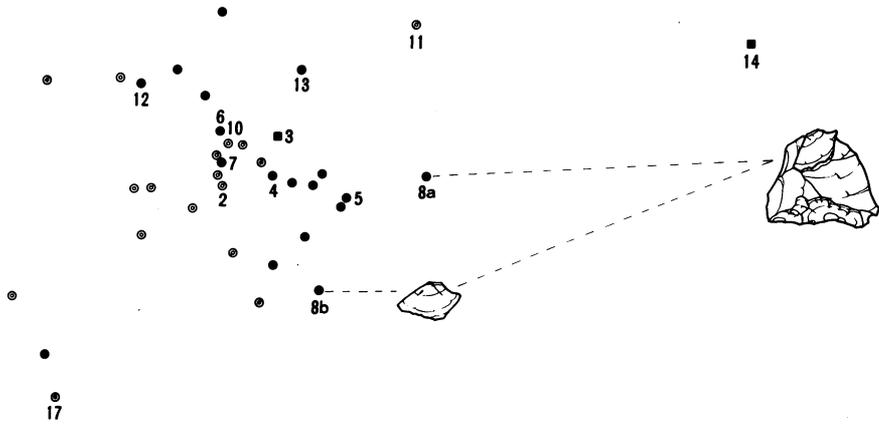
第32図 401ブロック①



△ 15

11B-55

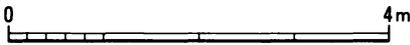
12B-05



16

9

- 細粒凝灰岩 1
- ◎ 珪化岩 1
- メノウ 1
- 黒曜石 1
- △ 黒曜石 2
- 安山岩 1

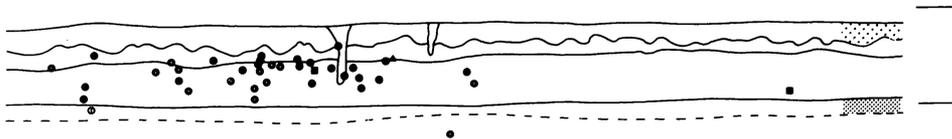


11C-50

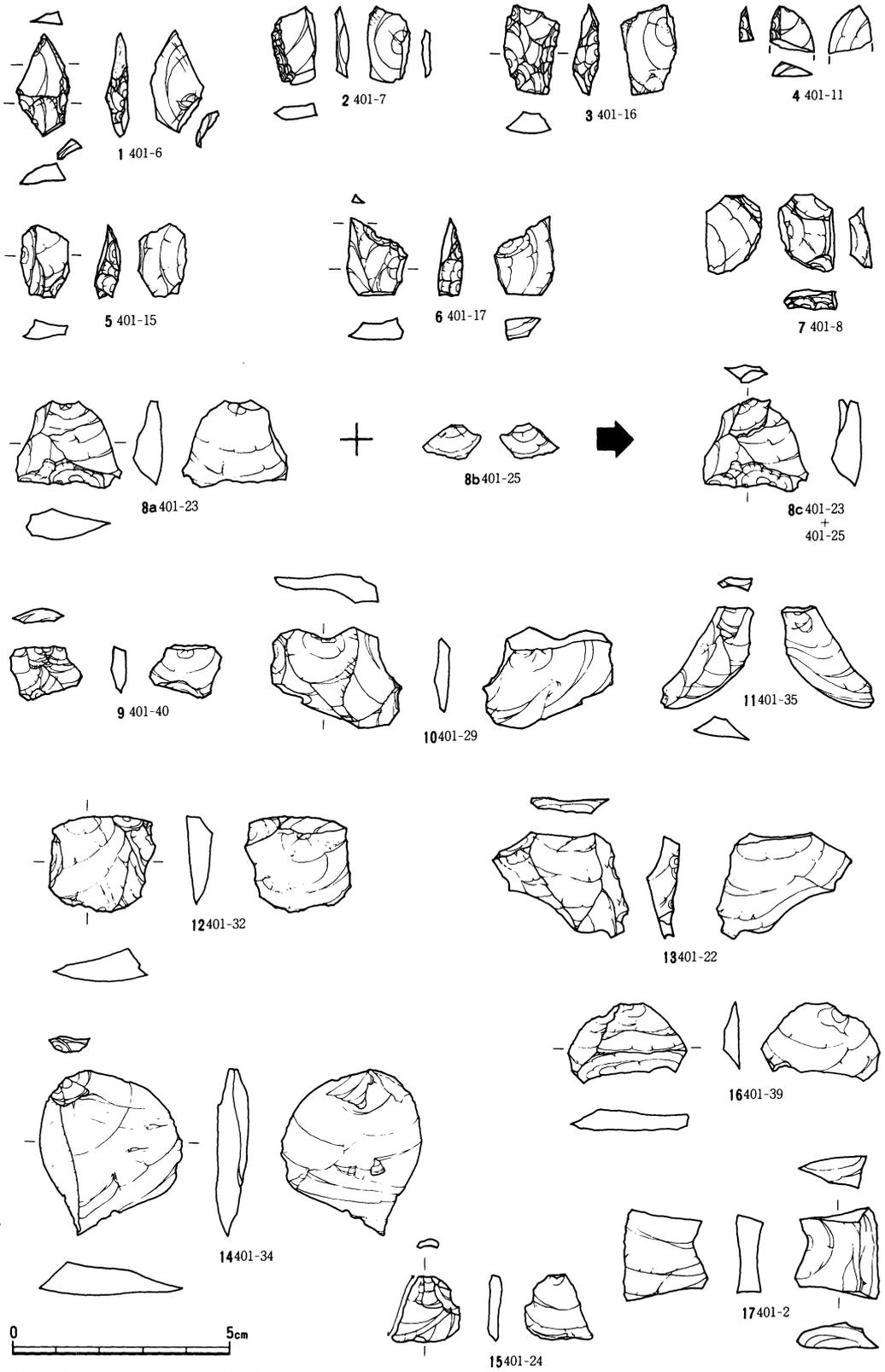
12C-00

29m

28m



第33図 401ブロック②



第34図 401ブロック出土石器

第1表 401ブロック出土石器観察表

No	遺物No	挿図No	母岩番号	分類	長	幅	厚	重量	備考
1	401-1		珪化岩1	剥片	10.4	16.0	2.8	0.40	
2	〃-2	17	メノウ1	石核	20.3	19.3	7.5	2.81	
3	〃-3		珪化岩1	削片	9.0	10.6	1.4	0.17	
4	〃-4		〃	剥片	25.3	19.1	7.1	2.79	
5	〃-5		メノウ1	石核	18.2	25.9	11.3	3.19	
6	〃-6	1	珪化岩1	ナイフ	23.7	12.1	4.8	1.15	
7	〃-7	2	〃	ナイフ	18.3	10.1	3.4	0.86	
8	〃-8	7	細粒凝灰岩1	ナイフ	17.5	12.6	4.6	1.62	
9	〃-9		珪化岩1	剥片	11.0	11.3	3.3	0.33	
10	〃-10		メノウ1	剥片	10.3	10.0	2.6	0.20	
11	〃-11	4	細粒凝灰岩1	ナイフ	10.5	8.2	3.4	0.24	
12	〃-12		〃	削片	11.3	7.9	3.5	0.23	
13	〃-13		〃	剥片	15.5	18.8	8.4	1.72	
14	〃-14		〃	削片	8.3	8.0	2.8	0.19	
15	〃-15	5	〃	ナイフ	17.3	11.5	4.5	0.91	
16	〃-16	3	黒曜石1	ナイフ	19.1	17.3	5.6	1.36	
17	〃-17	6	細粒凝灰岩1	ナイフ	20.3	14.4	5.0	1.49	
18	〃-18		珪化石1	剥片	14.3	27.8	4.3	1.80	
19	〃-19		細粒凝灰岩1	剥片	20.08	16.7	5.1	1.31	
20	〃-20		〃	剥片	15.3	6.2	4.2	0.37	
21	〃-21		〃	剥片	14.8	27.1	3.5	1.10	
22	〃-22	13	〃	剥片	27.4	22.7	5.8	3.17	
23	〃-23	8a	〃	スクレイパー	23.9	23.7	7.5	2.91	8bと接合
24	〃-24	15	黒曜石2	剥片U	17.3	15.2	2.7	0.65	
25	〃-25	8b	細粒凝灰岩1	剥片	8.0	13.6	2.5	0.21	8aと接合
26	〃-26		〃	剥片	11.3	9.6	3.7	0.38	
27	〃-27		〃	削片	8.2	6.3	2.6	0.09	
28	〃-28		〃	削片	10.5	7.4	2.7	0.24	
29	〃-29	10	珪化岩1	剥片	20.4	32.7	6.5	3.58	
30	〃-30		〃	剥片	8.3	16.0	1.8	0.27	
31	〃-31		〃	剥片	17.0	13.9	4.9	0.76	
32	〃-32		細粒凝灰石1	剥片	26.8	24.8	9.0	4.69	
33	〃-33		メノウ1	石核	13.8	16.6	9.5	2.01	
34	〃-34	14	黒曜石1	剥片	34.7	33.5	6.7	6.36	
35	〃-35	11	珪化岩1	剥片	29.7	11.3	8.1	2.13	
36	〃-36		〃	削片	5.5	10.3	2.2	0.09	
37	〃-37		〃	剥片	9.1	19.1	6.1	0.63	
38	〃-38		細粒凝灰岩1	剥片	20.7	22.6	9.7	2.35	
39	〃-39	16	安山岩1	剥片	17.8	27.8	4.0	1.93	
40	〃-40	9	珪化岩1	剥片	14.4	16.7	3.6	0.71	

(単位はmm・g)

B グリッド出土石器 (第35図)

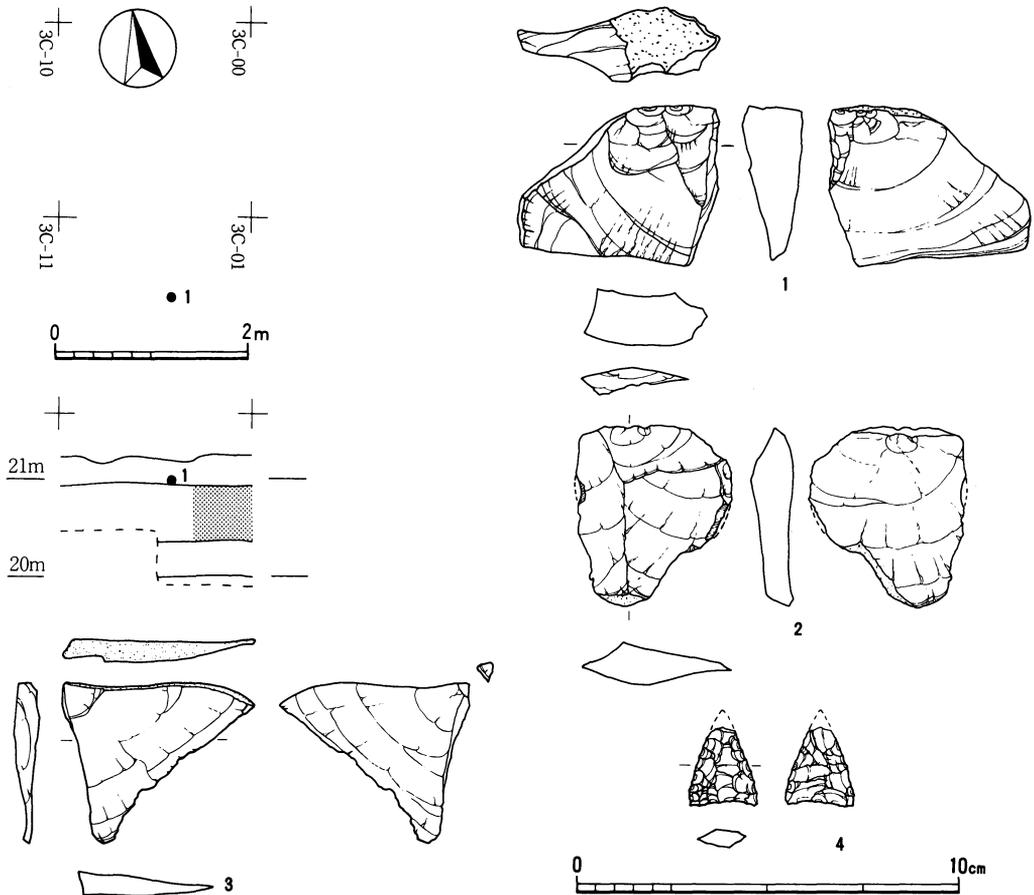
単独で出土した4点の石器について説明しておきたい。

1は調査区の北側になる3C-01グリッドの先土器の試掘調査で出土した剝片である。周辺を拡張した結果、この剝片以外に石器の出土は認められず、ブロックを構成するものではないことがわかった。003竪穴住居跡の構築下であったためにVI層の厚さが明確でないが、出土層位はVI層下部からVII層上面となっている。石材は珪化岩で、長さ41.2mm、幅51.0mm、厚さ17.7mmである。自然面を打面とし、剝離角は89°である。重量は34.99g。

2は安山岩製の剝片である。015竪穴住居跡の覆土中から出土し、おそらく3と同一母岩になるものと考えられる。一部に欠損するところが認められ、長さ47.3mm、幅46.6mm、厚さ11.2mmを測る。剝離角は135°前後になる。先土器時代の所産と考えられる。重さは19.48g。

3は2と同じ母岩から作出されたと考えられる安山岩製の剝片で014竪穴住居跡の覆土中から出土している。自然面を残し、長さ42.1mm、幅47.2mm、厚さ6.0mm、重さ9.55gを測る。

4は石鏃である。先端部が欠損し、現存長20.3mm、幅17.5mm、厚さ4.3mm、重さ1.46g。基部の挟りが弱いもので石材はチャートである。唯一の縄文時代の石器である。



第35図 グリッド出土石器

3. 石製品・土製品 (第36図)

出土遺物のなかで量的に少なかった石製品・土製品について説明を加えたい。

石製紡錘車(1) 014堅穴住居跡のカマドの左側で、床面に着いた状態で出土した。直径45.7mm、厚さ10.2mm、孔径7.0mm。重量38.74g。石材は滑石を用いている。

石製模造品(2) 301溝状遺構の覆土から出土した有孔円板である。両面に調整痕が認められ双孔であることはわかるが約半分を欠損する。石材は滑石で残存部の最大径22.8mm、厚さ2.8mm。直接遺構に伴う可能性は低いと考えられる。

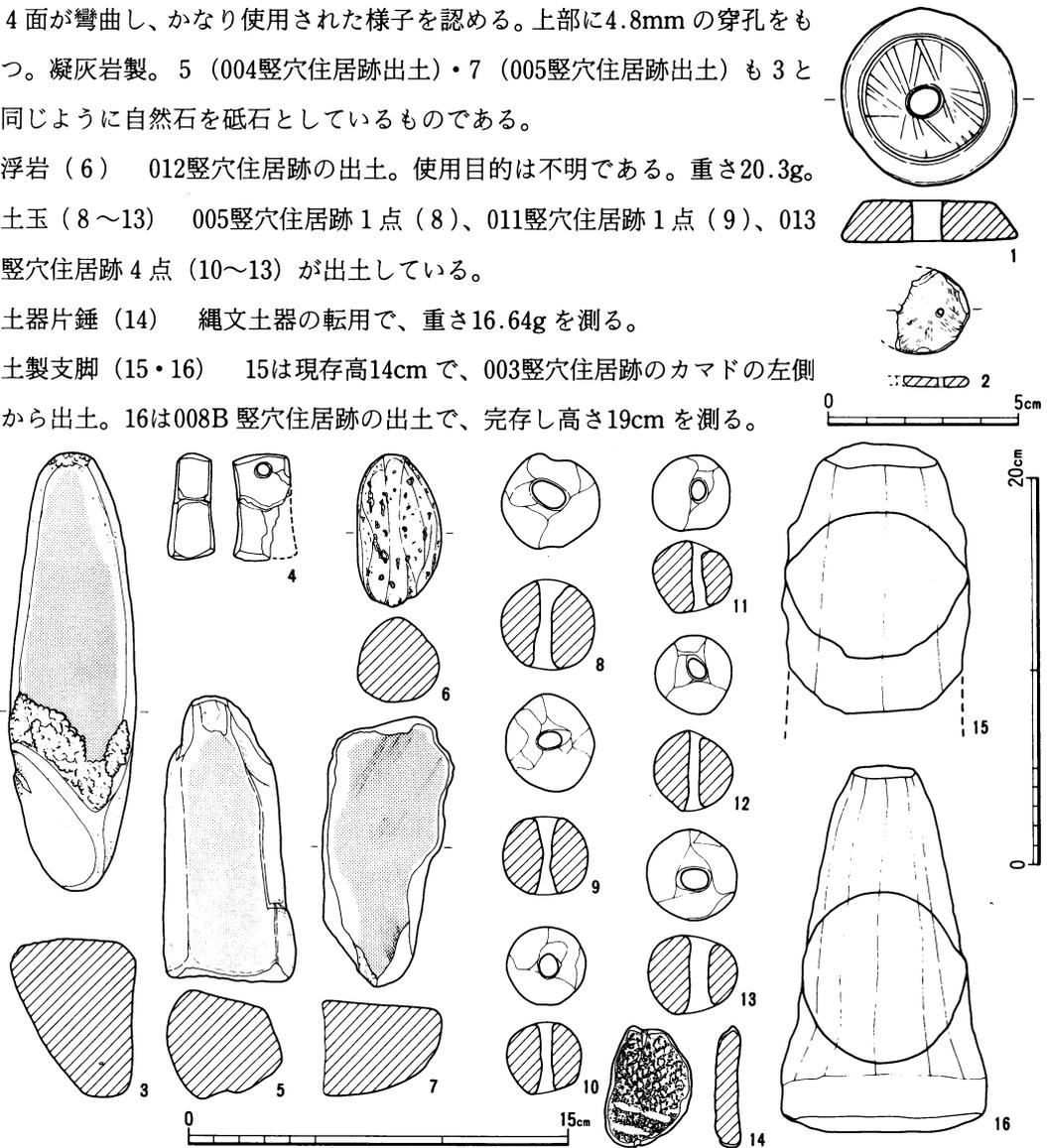
砥石(3~5・7) 3は001堅穴住居跡の出土。砂岩の自然石の平坦面を使用しているもので、長さ171mm、幅60.9mmを測る。4は002堅穴住居跡の出土。約4分の1が欠損するものの4面が彎曲し、かなり使用された様子を認める。上部に4.8mmの穿孔をもつ。凝灰岩製。5(004堅穴住居跡出土)・7(005堅穴住居跡出土)も3と同じように自然石を砥石としているものである。

浮岩(6) 012堅穴住居跡の出土。使用目的は不明である。重さ20.3g。

土玉(8~13) 005堅穴住居跡1点(8)、011堅穴住居跡1点(9)、013堅穴住居跡4点(10~13)が出土している。

土器片錘(14) 縄文土器の転用で、重さ16.64gを測る。

土製支脚(15・16) 15は現存高14cmで、003堅穴住居跡のカマドの左側から出土。16は008B堅穴住居跡の出土で、完存し高さ19cmを測る。



第36図 石製品・土製品

IV ま と め

1. 遺物について

今回の種ヶ谷津遺跡の調査は、千葉急行線建設予定地内という限られた範囲であったが、竪穴住居跡18軒をはじめとする遺構を検出し、多くの知見を得ることができた。発掘で出土した遺物には、先土器時代の石器、縄文土器、土師器などがある。なかでも出土遺物の主体を占める古墳時代後期の土器群は、今後この地域の土器研究に供されることにもなるだろう。近いうちには、赤井谷津をはさんで北に立地する榎作遺跡の成果も公表できる予定なので、比較のうえから今回の出土土器を分類し、その位置づけについて検討しておきたい。

出土土器の器種には、土師器の杯・椀・高杯・鉢・壺・小型甕・甕・甑・手づくね土器、須恵器の杯身・蓋がある。須恵器については、比較する程の出土量を得ていないので、分類は土師器について行っておく。

杯A 丸底で体部と口縁部との境に稜をもたない、いわゆる素縁口縁となるもので、次のI～IIIに細別される。

杯A I 口縁部が僅かに内彎するものである。010・011・014竪穴住居跡から1点ずつ出土しており、赤彩されたものと、赤彩されないものがある。

杯A II 口縁部がそのまま開いて終わるものである。010竪穴住居跡から赤彩が施されたものが1点出土している。

杯A III 体部のつくりが扁平となっているものである。013竪穴住居跡から内外面に黒色処理されたものが1点出土している。

杯B 丸底で、調整の違い、あるいは稜によって口縁部と体部が分明となり、口縁部が外反または外傾するものである。I～IVに細別される。

杯B I 半球状の深い体部を有し、口縁部が外反するものである。014・015竪穴住居跡から1点ずつ出土している。

杯B II 体部と口縁部との境に稜を設け、口縁部が短く（体部高より低く）外反するもので、003・008B・010・015竪穴住居跡から合計6点出土している。

杯B III 体部と口縁部との境に稜を設け、口縁部が外傾ないし外反するもので004・010・014・015竪穴住居跡から合計5点出土している。

杯B IV 扁平な体部で、口縁部との境に稜を設け、口縁部が長く外傾するものである。003・014竪穴住居跡で1点ずつ出土している。

杯C 丸底で体部と口縁部との境に稜を設け、口縁部が内傾するもので、I・IIに分けることができる。

杯C I 体部に丸味を有するもので、深いつくりになり、口縁部は内傾し、端部を尖り気味に

納める。004・010・013 竪穴住居跡から合計 4 点出土している。

杯 C II 体部が扁平になるため、全体に浅いつくりになり、口縁部が短く内傾するものである。003・004・009・010・013 竪穴住居跡から各 1 点ずつ、合計 5 点が出土している。

椀 全体に半球状を呈し、杯よりもつくりが深い。体部と口縁部との境には稜がなく、いわゆる素縁口縁となる。和泉式土器の椀からの系統上にあると考えられるもので、内外面に赤彩が施される。010・014 竪穴住居跡から 1 点ずつ出土している。

高杯 A 杯部に素縁口縁である杯 A がのり、脚柱部が短く、裾部を「ハ」の字形に広げるものである。004 竪穴住居跡に 2 点、010 竪穴住居跡に 1 点認められる。

高杯 B 杯部が体部と口縁部との境に稜を設けるもので、脚柱部が短く下降して裾部を「ハ」の字形に広げるものである。005・014 竪穴住居跡で 1 点ずつ出土している。

高杯 C 杯部および裾部の形態は不明であるが、脚柱部が長くつくられるものである。008B 竪穴住居跡で 1 点出土している。

鉢 A 平底から底部下端に丸味をもち、体部に僅かの張りを有して口縁部が小さく外反するもので、器高が低く、底径と口径の差が小さい。003 竪穴住居跡で 1 点出土している。

鉢 B 底部に丸味をもち、口縁部が僅かに外傾する小型のもので、011 竪穴住居跡で 1 点出土している。

壺 胴部上半部に張りをもち、頸部で絞られて口縁部が「く」の字形に長く外傾するものである。010 竪穴住居跡で 1 点出土している。

小型甕 A 胴部の張りが弱く、寸胴形を呈し、口縁部が僅かに外反するものである。胴部最大径と口径の差が小さい。003 竪穴住居跡で 3 点、004 竪穴住居跡で 1 点出土している。

小型甕 B 胴部に張りを有するいわゆる球胴形となるもので I・II に分かれる。

小型甕 B I 球胴から一度頸部で絞られ、口縁部が外反するものである。004 竪穴住居跡から 1 点出土している。

小型甕 B II 頸部の絞りが弱く、口径が胴部最大径よりも大きくなるものである。015 竪穴住居跡から 1 点出土している。

甕 A 器形は小型甕 A と同じく寸胴形で、器高が 20cm 以上になるものである。010・011 竪穴住居跡から 1 点ずつ出土している。

甕 B 球胴形の胴部を有するもので最大径の位置で I・II に分かれる。

甕 B I 胴部最大径が中位から上にくるものである。004・013・015 竪穴住居跡等から出土している。

甕 B II 胴部最大径を胴部中位におくものである。004・005・008B 竪穴住居跡等から出土している。

甕 C 長胴を呈するもので、最大径の位置から I・II に分かれる。

甕C I 胴部最大径が、胴部の中位に位置するもので、口縁部がゆるやかに外反して端部は丸く終わる。003・008B 竪穴住居跡等から出土している。

甕C II 胴部最大径が、胴部の中位から下にくるもので、003竪穴住居跡から1点出土している。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸く納まる。

甗A 底部から胴部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁部の外反が弱いもので、鉢形あるいはバケツ形を呈するものである。004竪穴住居跡で出土。

甗B いわゆる甗形となるもので、胴部の中位から上半部にかけて張りを有し、口縁部はゆるやかに外反して、端部が丸く納まる。008B・014竪穴住居跡等から出土している。

このほかでは、手づくね土器で小型の椀形を呈するもの1点（009竪穴住居跡）、扁平で皿形になるもの1点（013竪穴住居跡）、須恵器の杯身1点（005竪穴住居跡）、蓋2点（005・013竪穴住居跡）がある。

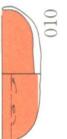
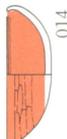
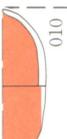
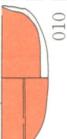
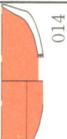
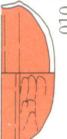
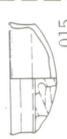
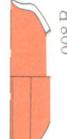
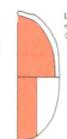
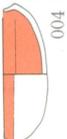
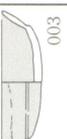
以上の器種分類に基づく相伴関係とその系譜、および竪穴住居跡の切り合い関係などを検討した結果、今回の調査で出土した土器を第I期から第III期に分けることが可能となった。

第I期 010・014竪穴住居跡出土土器を第I期とした。杯は、A I・A II・B I・B II・B III・B IV・C I・C IIが認められる。杯Aは3点とも内外面に赤彩が施されるもので、杯B・Cについても赤彩して仕上げられるものが半数以上になる。杯B IIIは須恵器の蓋の模倣と考えられ、成形・調整が丁寧である。椀は和泉式の椀の系統上にあると考えられ、本期にのみ存在する。杯と同様2点とも内外面赤彩である。高杯はA・Bがあり、脚柱部が短く内外面に赤彩が施される。壺は本期のみで、1点だけ確認できた。胴部最大径の位置に焼成後の穿孔があり、甗への転用が考えられるものである。甗はA・B IIがあるが量的に少ない。甗はBがある。

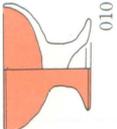
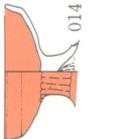
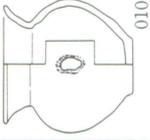
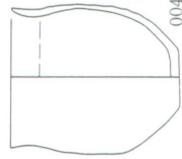
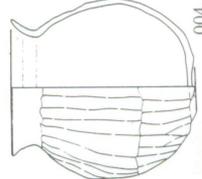
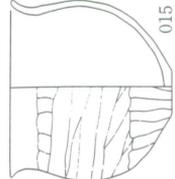
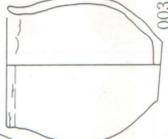
第II期 004・008B・015竪穴住居跡出土土器を第II期とした。杯はB・Cがあり、今回の調査では杯Aが未検出である。杯B IIの3点のうち内外面に赤彩が施されるものは1点で、他の2点は、外面の赤彩が口縁部だけにとどまり、体部にまでは及んでいない。杯B IIIは、第I期と同様、須恵器の蓋をよく模しているが小型化している。また杯Cにも第I期と比較し、器高が低くなっている様子をうかがうことができる。高杯はAと断片的ながらCが存在する。甗類は、小型甗A・B I・B II、甗B I・B IIがそろい、長胴甗である甗C Iも認められる。

第III期 003・005・009・011・012・013竪穴住居跡出土土器を第III期とした。本期の杯類で特徴となる点は、I・II期にあった赤彩されたものがなく、代わって黒色処理が施されたものが出現していることである。ほかでは杯B IIIが認められず、杯C IIの器高は低くなっている。また、鉢・甗C IIがI・II期になくて本期で検出されている。

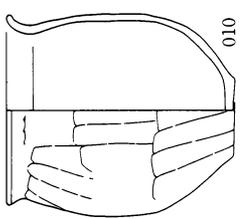
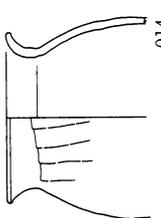
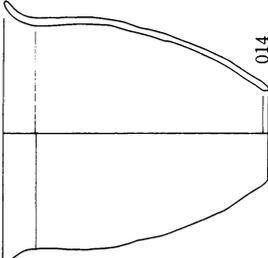
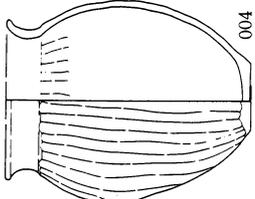
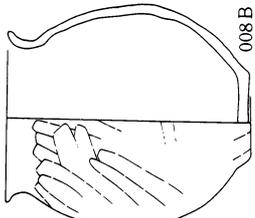
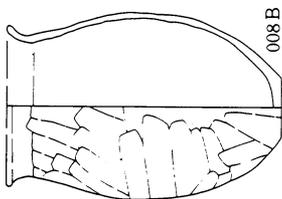
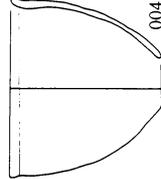
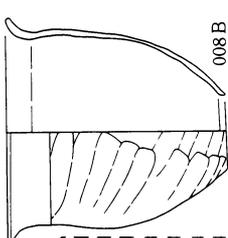
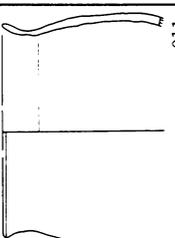
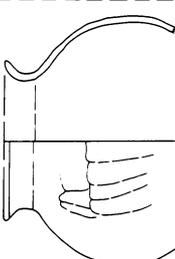
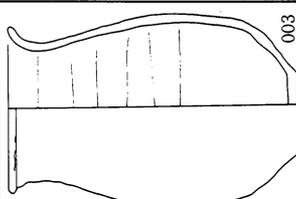
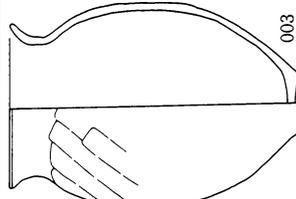
最後に年代について述べると、005・013竪穴住居跡の須恵器を参考にした場合、第III期は7世紀の前半に比定され、第I期～第II期は6世紀代ということになる。これは一応暫定的な区分としておき、複作遺跡の整理を進めるにしたがい、必要に応じて訂正したい。

	杯 A		杯 B				杯 C		碗
	I	II	III	IV	I	II	I	II	
I 期 010 014	 010  014	 010	 010  014  014	 014	 010  010	 010	 010  014		
II 期 004 008B 015			 004  015		 008B  008B  015		 004	 004	
III 期 003 005 009 011 012 013		 013		 003	 013	 003  009  013			

第37图 古墳時代後期土器編年①

	高			杯		鉢	壺	小型甕 A	小型甕 B	
	A	B	C	A	B				I	II
I 期	 010	 014					 010			
II 期	 004  004		 008B					 004	 004	 015
III 期		 005		 003	 011			 003	 003	

第38図 古墳時代後期土器編年②

	甕		甕		甗		甗	
	A	B	I	II	I	II	A	B
I 期	 010	 014						 014
II 期		 004	 008 B		 008 B		 004	 008 B
III 期	 011	 005					 003	 003

第39図 古墳時代後期土器編年③

2. 遺構について

検出した18軒の竪穴住居跡は、古墳時代前期から古墳時代後期にわたる。出土遺物が僅かなために、002・007・008A・016・017の5軒は明確な構築時期の比定が困難であったが、調査区全域の出土遺物等の状況から考えれば、この5軒も古墳時代という期間内で納まるであろう。

古墳時代前期に比定できるのは006竪穴住居跡である。2.9m×2.5mの楕円形の平面形を有し、主軸方向をN-42°-Wにとっている。柱穴や炉が存在しないもので、かなり小型の竪穴住居跡の部類になるであろう。

古墳時代中期に比定できるのは001竪穴住居跡である。平面形は9.23m×9.41mのほぼ正方形を呈し、主軸方向はN-35°-Eを指し、主軸線上の中央から北に寄った位置に炉を設置している。柱穴は対角線上の4か所に穿たれていると考えられ、2か所に貯蔵穴を設けている。

古墳時代後期に比定できるのは、003・004・005・008B・009・010・011・012・013・014・015の11軒である。前節で述べたとおり、この11軒は6世紀から7世紀前半にかけて営まれたと考えられ、第I期から第III期の時期区分を想定した。以下区分ごとに概要をまとめておきたい。なお不明なところは(?)としておく。

区分	番号	規模	主軸方向	柱穴	貯蔵穴
第I期	010	4.45m×4.70m	N-66°-E	4か所	カマドの右1
	014	5.90m×5.90m	N-85°-E	4か所	カマドの右1、張り出し部1
第II期	004	4.87m×5.16m	N-83°-E	4か所	カマドの右1
	008B	4.16m×4.58m	N-17°-W	(?)	なし
	015	6.70m×6.70m	N-62°-E	8か所	カマドの右1
第III期	003	8.70m×8.80m	N-1°-W	8か所	カマドの右1
	005	5.35m×5.05m	E-15°-S	4か所	カマドの右1
	009	7.20m×(?)	N-11°-E	(?)	なし
	011	5.70m×5.50m	N-18°-E	4か所	カマドの右1、カマドの左1
	012	4.80m×(?)	N-10°-E	(?)	なし
	013	6.60m×6.00m	N-13°-W	4か所	カマドの左1

古墳時代後期の竪穴住居跡は以上のように正方形に近い平面形をとる場合が多く、第I・II期に5軒中4軒までが東壁にカマドを設けていたものが、第III期になると北カマドが多くなっている傾向が認められる。また11軒のなかには、003・008B竪穴住居跡のように焼失している住居跡や、拡張された形跡のある013竪穴住居跡もあり、検出状況は多様である。

このほかに、古墳時代前期の土坑1基、縄文時代の土坑1基、溝状遺構3条、縄文時代の礫集中地点1か所を検出し、種ヶ谷津遺跡の性格の一端が明らかになった。今後、周辺の遺跡調査の進捗に伴い、より具体的な位置づけを行っていくことを課題としてまとめとする。

版 図



榎作遺跡

赤井谷津

種ヶ谷津遺跡

外房線

種ヶ谷津遺跡と周辺の空中写真



種ヶ谷津遺跡の空中写真



1. 遺跡遠景（榎作遺跡から） 2. 遺跡近景



調査終了時の空中写真 1. 北から 2. 南から



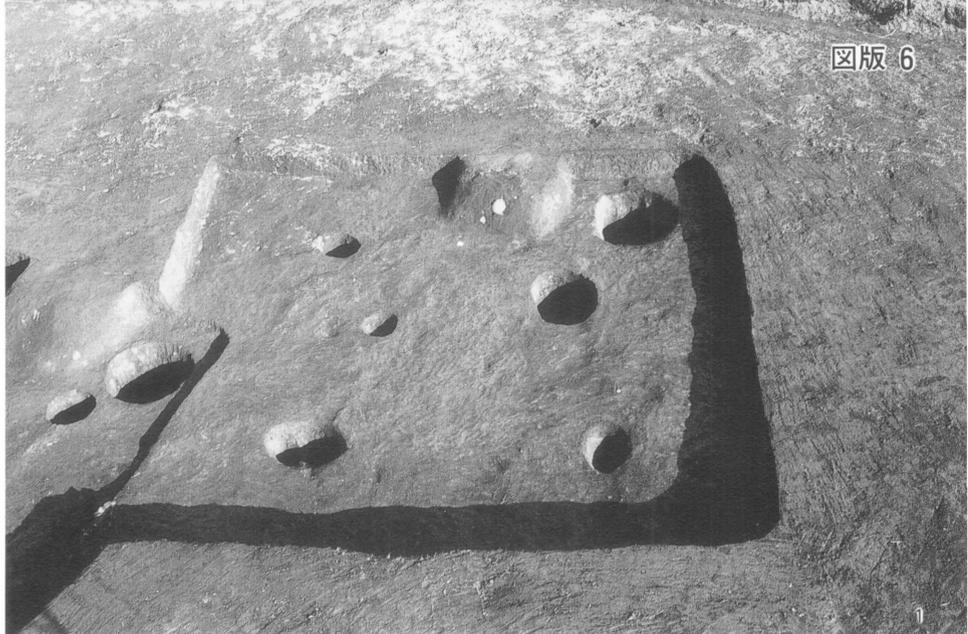
001 竖穴住居跡



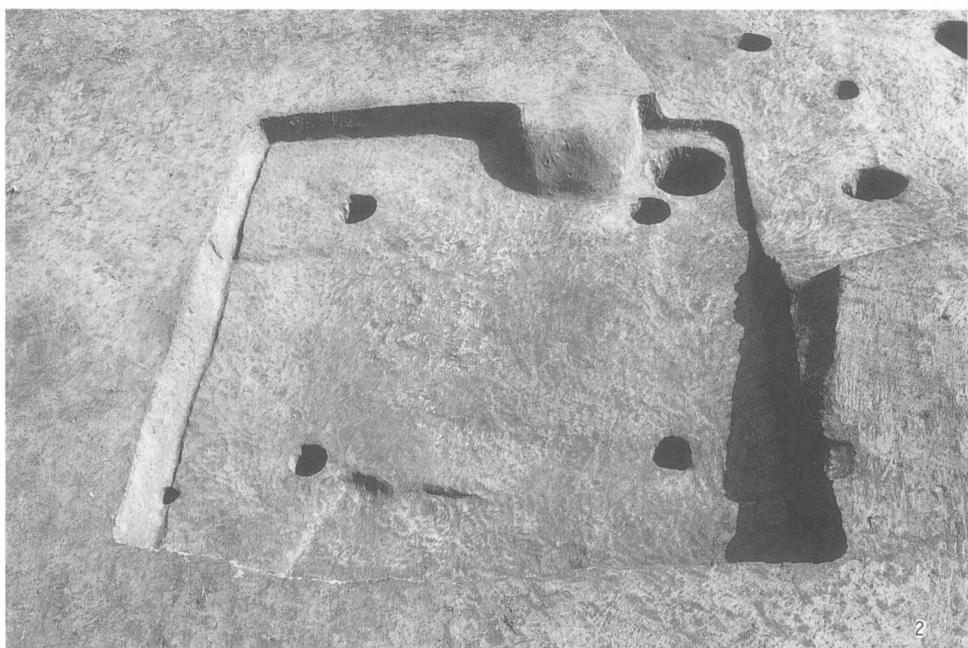
002 竖穴住居跡



003 竖穴住居跡



004 竖穴住居跡



005 竖穴住居跡



006 竖穴住居跡



008A・B 竪穴住居跡



008B 竪穴住居跡
遺物出土状況



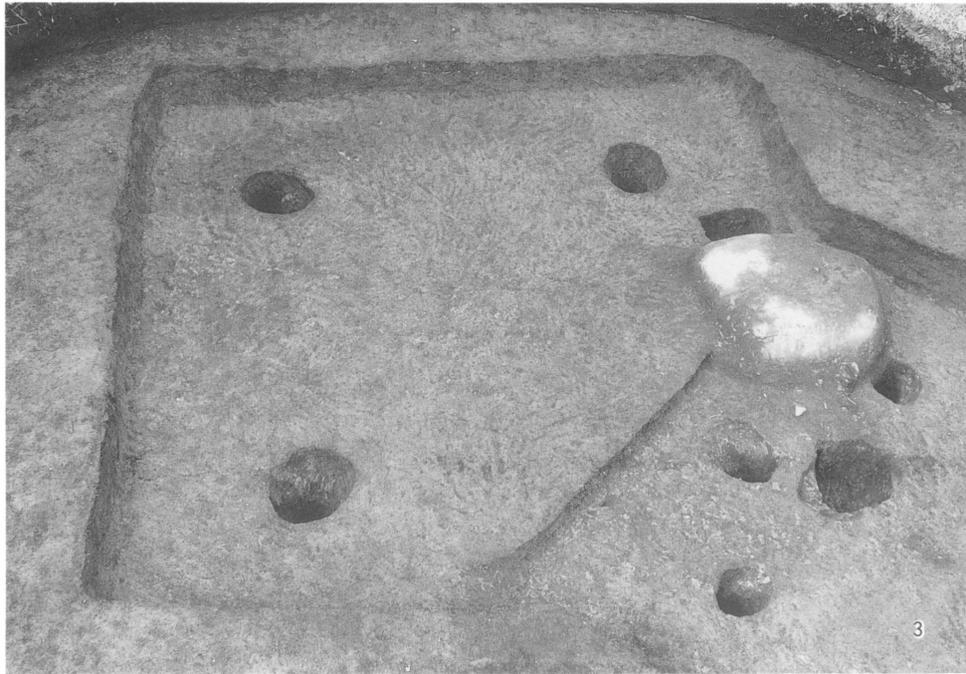
009 竪穴住居跡



010 · 011 竖穴住居跡



010 竖穴住居跡



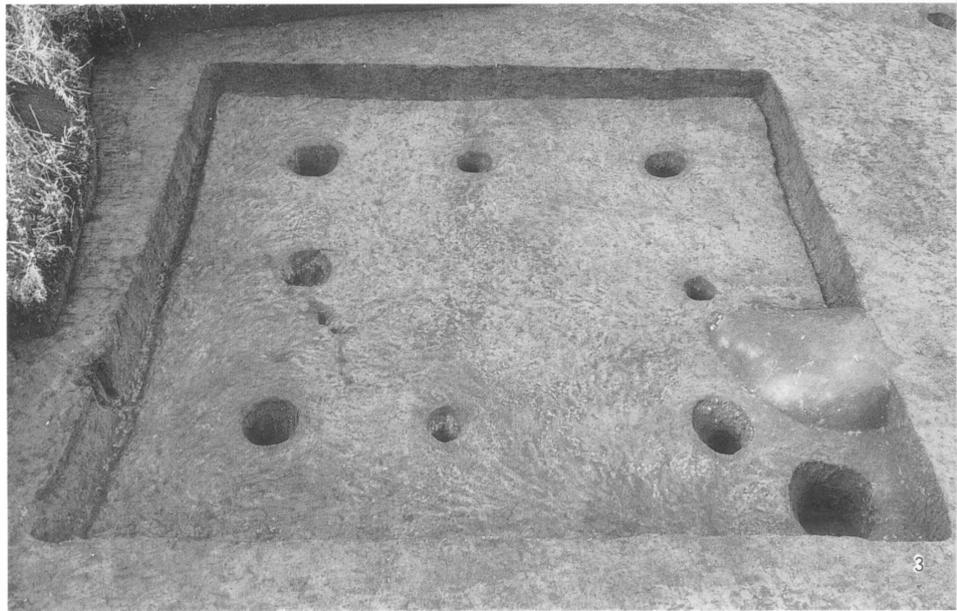
011 竖穴住居跡



013 竖穴住居跡



014 竖穴住居跡



015 竖穴住居跡



016 竖穴住居跡



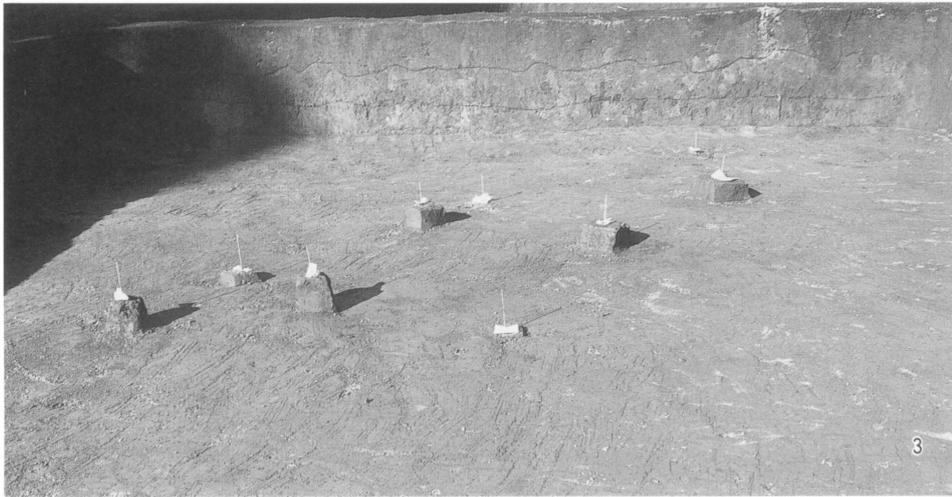
302 溝状遺構



202 土坑



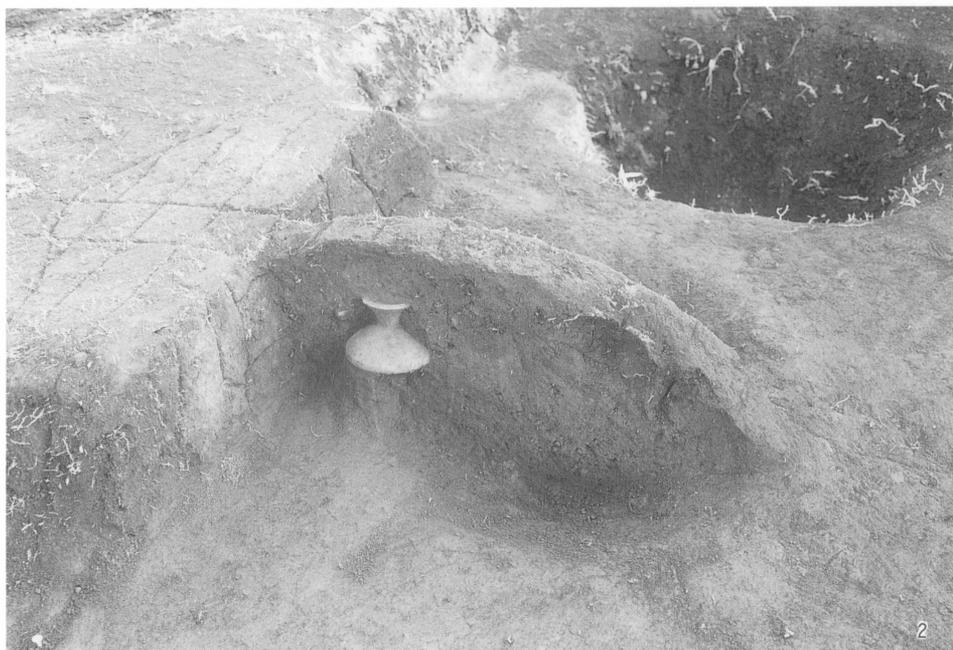
基本土層



2・3. 401ブロック
遺物出土状況



004 竪穴住居跡
カマド内甕出土状況



004 竪穴住居跡
カマド内高杯出土状況



010 竪穴住居跡
カマド内遺物出土状況



001-2



003-13



001-9



003-15



003-10



003-11



003-12



003-16

出土土器
001
003
竖穴住居跡



003-17



004-2



004-4



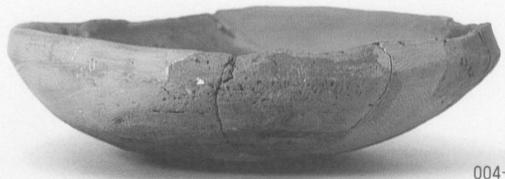
003-18



004-5



004-6



004-1

出土土器
003
004
竖穴住居跡



004-7



004-12



004-8



004-13



004-10



005-6

出土土器
004
005
竖穴住居跡



005-10



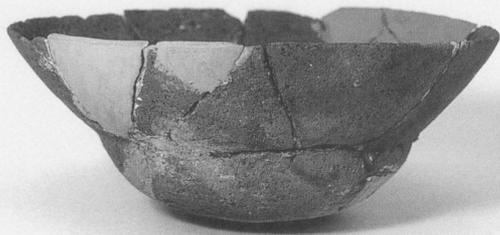
006-16



005-11



006-17



006-14



008B-4



006-15

出土土器
005
006
008B
竖穴住居跡



008B-7



008B-9



008B-8



010-1



010-3



010-4



010-5

出土土器
008B
010
豎穴住居跡



010-6



010-7



010-8



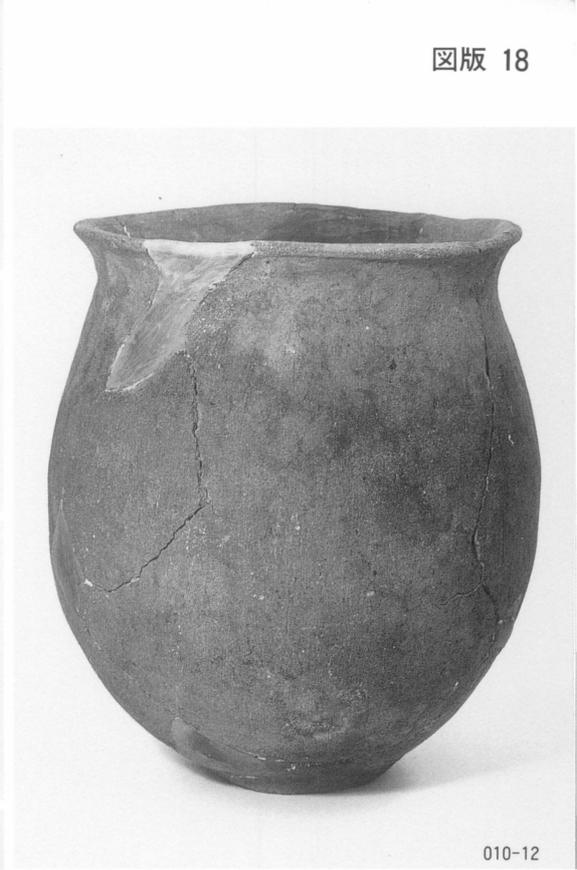
010-9



010-10



010-11



010-12



010-13

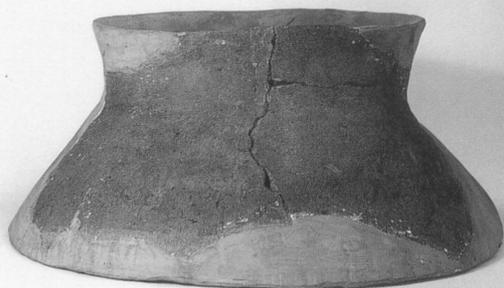


011-14

出土土器
010
011
竪穴住居跡



011-15



011-16



011-17



013-3



013-8



013-9



014-11



014-14



014-16



014-17

出土土器
011
013
014
竪穴住居跡



014-20



015-5



015-1



015-6



015-2

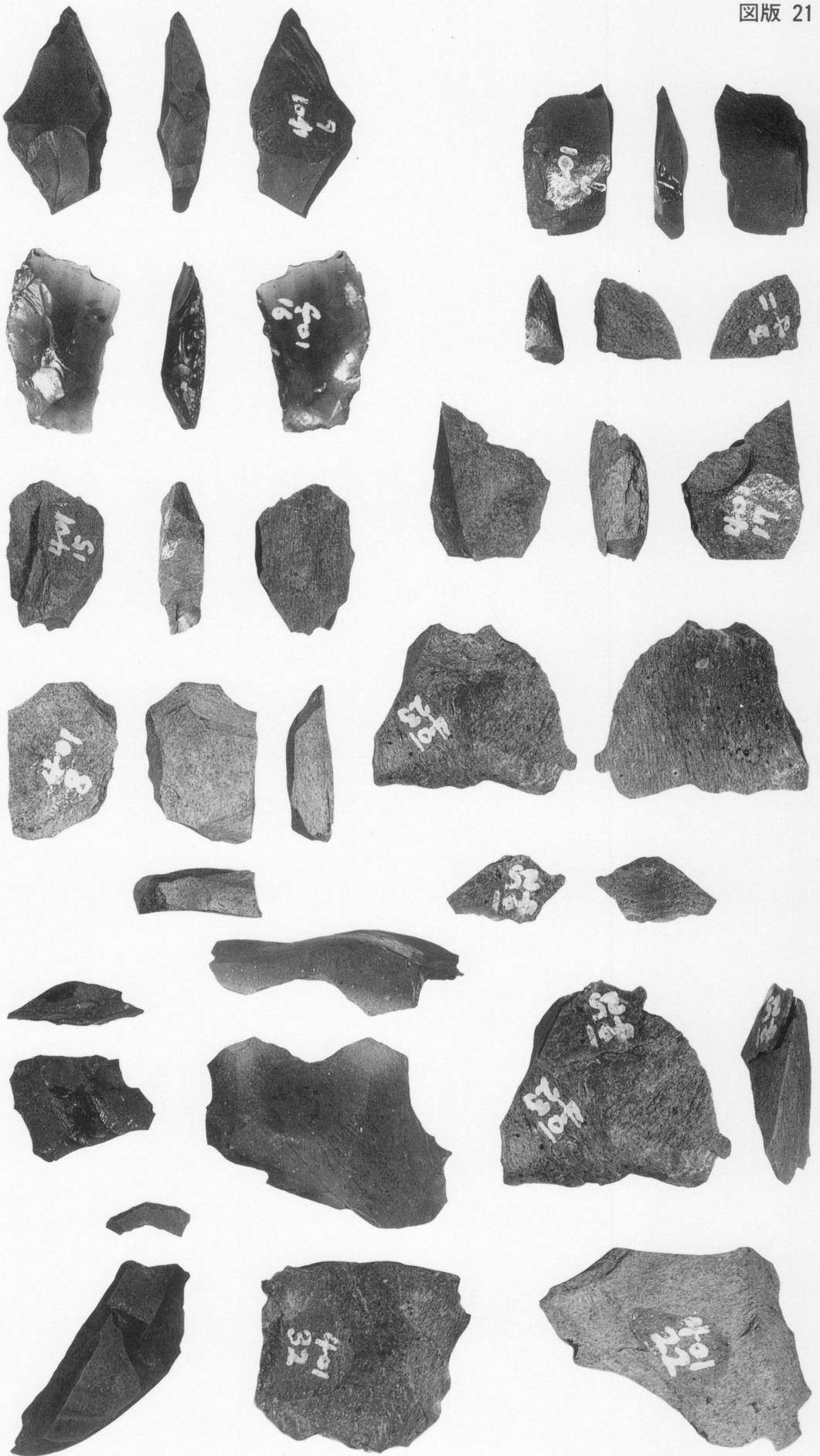


015-4

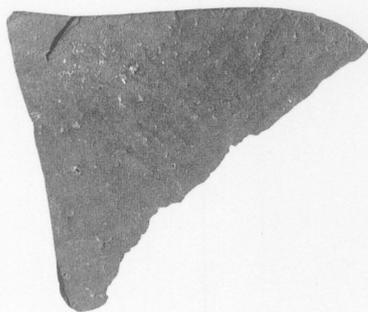


201-7

出土土器
014
015
竖穴住居跡
201
土坑



出土石器
401 ブロック



1. 出土石器
401ブロック
グリッド



2. 出土石製品

千葉県文化財センター調査報告 第170集

千葉市種ヶ谷津遺跡

— 千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ —

平成元年9月25日 印刷

平成元年9月30日 発行

発行 千葉急行電鉄株式会社

東京都台東区柳橋2-6-2

TEL 03-862-0002(代)

編集 財団法人 千葉県文化財センター

千葉市葛城2-10-1

TEL 0472-25-6478

印刷 有限会社 正文社

千葉市都町2-5-5

TEL 0472-33-2235
